

七カマド遺跡（第1地点）

赤砂利遺跡（第5・7・10・11地点）

市内遺跡群発掘調査報告書XXIV

2017

白岡市教育委員会

序

このたび白岡市教育委員会では、『七カマド遺跡（第1地点）・赤砂利遺跡（第5・7・10・11地点）』の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

白岡市は都心への通勤圏ということもあり、平成以降住宅やマンション建設が相次いできました。平成24年10月には、目覚ましい人口増加を背景に市制が施行されました。一方で郊外ではまだ緑豊かな田園風景が広がっています。

今回報告します2遺跡5地点においても、今から4千年前の縄文時代中期を中心に重要な成果を得ることができました。赤砂利遺跡第5地点において発見された住居跡や豊富な出土遺物の数々は、太古の昔に根付いた人々の活発な活動が窺われます。また、赤砂利遺跡第10地点では、中世の鎌倉街道に関連する可能性が高い掘立柱建物跡や柵列が検出されるなど、往時の繁栄を偲ぶ痕跡が発見されています。

教育委員会では、地域文化の特色を生かしながら、あらゆる機会と場所での生涯学習を目指す「白岡らしさの発見と創造」を目標に掲げております。当報告書が市民の皆様や学校等関係機関の方々に広く活用され、郷土白岡の再発見と埋蔵文化財保護のご理解につながれば幸いに存じます。

最後に、今回の発掘調査及び報告書作成に当たり、地権者や事業主様、地域の方々には格別のご支援とご理解を賜りました。ここに心より厚く御礼申し上げます。

平成29年3月

白岡市教育委員会
教育長 長島秀夫

例 言

- 1 本書は、埼玉県白岡市内に所在する七カマド遺跡（第1地点）・赤砂利遺跡（第5・7・10・11地点）の発掘調査報告書である。
- 2 調査地点所在地は以下のとおりである。
七カマド遺跡（第1地点）：白岡市白岡1470-1他
赤砂利遺跡（第5地点）：白岡市上野田164-1、166-1の一部
赤砂利遺跡（第7地点）：白岡市上野田170-1の一部
赤砂利遺跡（第10地点）：白岡市下野田938-1
赤砂利遺跡（第11地点）：白岡市上野田164-11の一部、164-13の一部
- 3 発掘調査は、白岡市教育委員会と白岡町遺跡調査会（当時）が主体となって実施した。七カマド遺跡（第1地点）の調査費用は日産化学工業株式会社 生物科学研究所長 水流添 鴨智氏が負担した。赤砂利遺跡（第7地点）の調査費用は宗教法人 大徳寺 渡辺 博見氏が負担した。それ以外の調査費用および整理作業費用は白岡市教育委員会が負担し、一部は国庫及び県費補助金を受けて実施した。
- 4 調査期間は、以下のとおりである。
七カマド遺跡（第1地点）：平成22年11月29日から平成22年12月15日
赤砂利遺跡（第5地点）：平成22年5月25日から平成22年6月24日（国庫補助事業）
赤砂利遺跡（第7地点）：平成23年2月14日から平成23年2月21日
赤砂利遺跡（第10地点）：平成26年7月1日から平成26年7月30日（国庫補助事業）
赤砂利遺跡（第11地点）：平成28年8月8日から平成28年8月19日
- 5 指示通知番号は、以下のとおりである。
七カマド遺跡（第1地点）：平成22年11月26日付け教生文第5-916号（指示）
平成22年12月6日付け教生文第2-46号（通知）
赤砂利遺跡（第5地点）：平成22年5月28日付け教生文第5-205号（指示）
平成22年6月15日付け生学第125号（通知）
赤砂利遺跡（第7地点）：平成23年2月22日付け教生文第5-1220号（指示）
平成23年2月25日付け教生文第2-57号（通知）
赤砂利遺跡（第10地点）：平成26年6月27日付け教生文第5-408号（指示）
平成26年6月27日付け生学第149号（通知）
赤砂利遺跡（第11地点）：平成28年8月8日付け教生文第5-764号（指示）
平成28年8月5日付け生学第239号（通知）
- 6 発掘調査は、赤砂利遺跡（第10・11地点）を杉山 和徳が担当し、それ以外を松崎 慶喜と岡田 勇介が担当した。
整理作業及び報告書作成作業は、杉山と奥野 麦生が担当した。
- 7 遺物の実測は、杉山と奥野が担当し、青木 美代子、増田 香織の補助を得た。
- 8 本書の執筆分担は以下のとおりである。

IV -2・5の遺物：奥野

それ以外：杉山

- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、地権者である日産化学工業株式会社 生物科学研究所長 水流添 鴨智様、千葉 真一様、宗教法人 大徳寺 住職 渡辺 博見様、渡辺 弘美様、齋藤 由美様の御理解、御協力を得て実施した。また、下記の諸氏及び諸機関から御指導と御助言を賜った。

赤熊 浩一、池尻 篤、植木 雅博、魚水 環、大和田 瞳、岡本 健一、鬼塚 知典、河井 伸一、小宮 雪晴、篠田 泰輔、鈴木 敏昭、関 絵美、田中 和之、山田 琴子、油布 憲昭、吉田 稔。

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、埼玉県教育委員会生涯学習文化財課、

白岡市文化財保護委員会、東部地区文化財担当者会（50音順、敬称略）。

- 10 発掘調査及び整理作業にあたっては、下記の方々に参加協力を得た。

青木 美代子、大野 美沙子、折原 奈美子、桂 都、興野 明夫、黒田 雅之、坂田 玲子、佐藤 利勝、下田 富士子、下津 守徳、菅原 春男、高橋 安代、田中 玉緒、鳥海 恵子、豊島 せつ子、中尾 亜子、中田 正男、中山 敏夫、藤巻 良雄、日直 千代子、星 和枝、槇島 武二、増田 香織、水沢 和子、宮内 しろ子、宮内 光世、森本 美代子、山田 登、渡邊 宏士朗、渡辺 英子（50音順、敬称略）。

- 11 調査組織は以下のとおりである。

調査組織（平成28年度）

調査主体者 白岡市教育委員会

事務局 教 育 長 長 島 秀 夫

教 育 部 長 高 澤 利 光

生 涯 学 習 課 長 齋 藤 久

生 涯 学 習 課 長 補 佐 仁 科 照 彦

学 習 支 援 担 当 / 文 化 振 興 担 当 主 査 奥 野 麦 生（調査担当） 同主事 杉 山 和 徳（調査担当）

凡 例

- 1 本書で用いる方位は国土座標の方位で、標高は海拔を表す。
- 2 使用した基準点と遺跡原点（日本測地系平面直角座標第9系）は以下のとおりである。
七カマド遺跡：X = 1,883.759 m、Y = - 14,715.268 m（5B コウ54）
X = 1,900.000 m、Y = - 14,850.000 m（遺跡原点）
赤砂利遺跡：X = 1,356.288 m、Y = - 12,451.643 m（8A コウ170）
X = 1,294.000 m、Y = - 12,414.000 m（遺跡原点）
巻末抄録の経緯度は遺跡原点を世界測地系に変換したものである。
- 3 本書で掲載した図版の縮尺は原則として以下のとおりである。
遺構：1/60 遺物：土器実測図・拓影図・石器実測図1/3
- 4 挿図と表中の略号は以下のとおりである。
H：住居跡 SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 SD：溝跡 SE：井戸跡 P：ピット
- 5 住居跡内の数値は、検出面から底面までのピットの深度を表し、単位はcmである。
- 6 遺構の計測表・遺物の観察表において残存値には（ ）を付して表記した。
- 7 実測図中の断面の●は繊維土器を表した。
- 8 磁着度はリング状フェライト磁石（30×17×5mm）を用いて、資料の磁着反応を1から順に数字で評価したもので、数値が大きいほど着磁性が強いことを意味する。磁石を用い、35cmの高さから木綿糸で吊り下げた状態で使用する。資料を順次接近させることにより磁石が動き始める距離単位（6mmを1単位とする）を評価台紙上で読み取り、数値化された遺物の評価をする方法である。磁着度0は非磁着を表す。

目 次

序	(5) ピット	54
例言	(6) グリッド出土遺物	54
凡例	3 第7地点の遺構と遺物	59
目次	(1) 住居跡	59
	(2) 掘立柱建物跡	60
I 調査の概要	(3) 土坑	61
1 調査に至る経緯	(4) ピット	65
2 調査の経過	(5) 調査区出土遺物	66
	4 第10地点の遺構と遺物	68
II 位置と環境	(1) 掘立柱建物跡	68
1 遺跡の立地と地理的環境	(2) 土坑	72
2 歴史的環境	(3) 溝跡	74
	(4) 井戸跡	75
III 七カマド遺跡(第1地点)の調査	(5) 柵列	75
1 遺跡の概要	(6) 畝跡	76
2 遺構と遺物	(7) ピット	78
(1) 土坑	(8) グリッド出土遺物	78
(2) 溝跡	5 第11地点の遺構と遺物	84
(3) ピット	(1) 住居跡	84
(4) 調査区出土遺物	(2) ピット	89
	(3) 調査区出土遺物	90
IV 赤砂利遺跡(第5・7・10・11地点)の調査	V 総 括	93
.....15	1 七カマド遺跡	93
1 遺跡の概要	2 赤砂利遺跡	93
2 第5地点の遺構と遺物		
(1) 住居跡	写真図版	
(2) 掘立柱建物跡	報告書抄録	
(3) 土坑		
(4) 溝跡		

挿 図 目 次

第1図 七カマド遺跡と周辺の遺跡分布図	5	第3図 七カマド遺跡の位置と発掘調査区	7
第2図 赤砂利遺跡と周辺の遺跡分布図	6	第4図 赤砂利遺跡の位置と発掘調査区	8

第5図	七カマド遺跡の試掘調査箇所	10	第38図	第2～4・7号溝跡	51
第6図	七カマド遺跡(第1地点)全測図及び 第1号溝跡	12	第39図	溝跡出土遺物	52
第7図	第1～7号土坑	13	第40図	グリッド出土遺物(1)	55
第8図	調査区出土遺物	14	第41図	グリッド出土遺物(2)	56
第9図	赤砂利遺跡(第5地点)全測図	15	第42図	グリッド出土遺物(3)	57
第10図	サブトレンチ配置図及び土層断面図	16	第43図	赤砂利遺跡(第7地点)全測図	58
第11図	第1号住居跡	17	第44図	第7号住居跡	59
第12図	第1号住居跡出土遺物	18	第45図	第7号住居跡出土遺物	60
第13図	第2号住居跡	20	第46図	第3号掘立柱建物跡	61
第14図	第2号住居跡炉	21	第47図	第25～35号土坑	62
第15図	第2号住居跡出土遺物(1)	22	第48図	土坑出土遺物(3)	64
第16図	第2号住居跡出土遺物(2)	23	第49図	ピット出土遺物	65
第17図	第2号住居跡出土遺物(3)	24	第50図	調査区出土遺物(1)	66
第18図	第2号住居跡出土遺物(4)	25	第51図	赤砂利遺跡(第10地点)全測図	67
第19図	第3号住居跡	27	第52図	第4号掘立柱建物跡	68
第20図	第3号住居跡炉	28	第53図	第5号掘立柱建物跡	69
第21図	第3号住居跡出土遺物(1)	29	第54図	第6号掘立柱建物跡	70
第22図	第3号住居跡出土遺物(2)	31	第55図	第7号掘立柱建物跡	71
第23図	第3号住居跡出土遺物(3)	32	第56図	第36～45号土坑	73
第24図	第3号住居跡出土遺物(4)	33	第57図	第10号溝跡	74
第25図	第4号住居跡	35	第58図	第1号井戸跡	75
第26図	第4号住居跡出土遺物	36	第59図	第1～5号柵列	76
第27図	第5号住居跡	37	第60図	畝跡	77
第28図	第5号住居跡出土遺物	37	第61図	ピット配置図	78
第29図	第6号住居跡	38	第62図	土坑・溝跡・ピット出土遺物	79
第30図	第6号住居跡出土遺物	39	第63図	グリッド出土遺物(4)	84
第31図	第1号掘立柱建物跡	40	第64図	赤砂利遺跡(第11地点)全測図	85
第32図	第2号掘立柱建物跡	41	第65図	第8号住居跡	86
第33図	第1～11号土坑	44	第66図	第8号住居跡遺物分布図	87
第34図	土坑出土遺物(1)	45	第67図	第8号住居跡出土遺物(1)	88
第35図	第12～24号土坑	48	第68図	第8号住居跡出土遺物(2)	89
第36図	土坑出土遺物(2)	49	第69図	調査区出土遺物(2)	90
第37図	第1・5・6・8・9号溝跡	50	第70図	調査区出土遺物(3)	91

表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表	4	第12表	赤砂利遺跡（第7地点）掘立柱建物跡 ピット計測表	61
第2表	七カマド遺跡試掘調査歴	9	第13表	赤砂利遺跡（第7地点）ピット計測表	65
第3表	七カマド遺跡（第1地点）ピット計測 表	13	第14表	赤砂利遺跡（第7地点）出土石器計測表	66
第4表	七カマド遺跡（第1地点）出土石器計 測表	14	第15表	赤砂利遺跡（第10地点）掘立柱建物跡 ピット計測表	71
第5表	第2号住居跡出土石器計測表	26	第16表	赤砂利遺跡（第10地点）ピット計測表	80
第6表	第3号住居跡出土石器計測表	34	第17表	赤砂利遺跡（第10地点）出土石器計測 表	84
第7表	第4号住居跡出土石器計測表	36	第18表	赤砂利遺跡（第11地点）ピット計測表	90
第8表	赤砂利遺跡（第5地点）掘立柱建物跡 ピット計測表	41	第19表	赤砂利遺跡（第11地点）出土石器計測 表	92
第9表	土坑出土石器計測表	49			
第10表	赤砂利遺跡（第5地点）ピット計測表	54			
第11表	グリッド出土石器	57			

写真図版目次

図版1	掘削作業状況（1） 掘削作業状況（2） 実測作業状況（1） 実測作業状況（2）	調査区全景（南から）	
図版2	調査区全景 第1号溝跡	図版5	第1号住居跡 第2号住居跡 第2号住居跡炉
図版3	第1号土坑 第2号土坑 第3号土坑 第4号土坑 第5号土坑 第6号土坑 第7号土坑 調査区出土遺物（1）	図版6	第3号住居跡 第3号住居跡遺物出土状況 第3号住居跡炉
図版4	調査区全景（北から）	図版7	第4号住居跡 第5号住居跡 第6号住居跡
		図版8	第1号掘立柱建物跡 第2号掘立柱建物跡
		図版9	第2号土坑 第4号土坑 第5号土坑

	第7号土坑	溝跡出土遺物
	第8号土坑遺物出土状況	グリッド出土遺物 (1)
	第9号土坑	図版17 グリッド出土遺物 (2)
	第10・11号土坑	グリッド出土遺物 (3)
	第12・13号土坑	図版18 調査区全景
図版10	第16号土坑	第7号住居跡
	第17号土坑	図版19 第1号住居跡炉
	第18号土坑	第25号土坑
	第19号土坑	第26・27号土坑
	第20号土坑	第26号土坑遺物出土状況
	第22号土坑	第29号土坑
	第23号土坑	第31・33号土坑
	第24号土坑	第34号土坑
図版11	第1号溝跡	第35号土坑
	第2・3号溝跡	図版20 第7号住居跡出土遺物
図版12	第4号溝跡	土坑出土遺物 (3)
	第7号溝跡	銭差紐
図版13	第1号住居跡出土遺物	調査区出土遺物 (2)
	第2号住居跡出土遺物 (1)	図版21 調査区北半部全景
	第2号住居跡出土遺物 (2)	調査区南半部全景
	第2号住居跡出土遺物 (3)	図版22 第36号土坑
	第2号住居跡出土遺物 (4)	第38号土坑
図版14	第2号住居跡出土遺物 (5)	第41号土坑
	第3号住居跡出土遺物 (1)	第43号土坑
	第3号住居跡出土遺物 (2)	第10号溝跡
	第3号住居跡出土遺物 (3)	第1号井戸跡
図版15	第3号住居跡出土遺物 (4)	土坑出土遺物 (4)
	第3号住居跡出土遺物 (5)	グリッド出土遺物 (4)
	第3号住居跡出土遺物 (6)	図版23 調査区北区全景
	第3号住居跡出土遺物 (7)	調査区南区全景
	第3号住居跡出土遺物 (8)	第8号住居跡
	第4号住居跡出土遺物	図版24 第8号住居跡出土遺物 (1)
	第5号住居跡出土遺物	第8号住居跡出土遺物 (2)
図版16	第6号住居跡出土遺物	調査区出土遺物 (3)
	土坑出土遺物 (1)	調査区出土遺物 (4)
	土坑出土遺物 (2)	

I 調査の概要

1 調査に至る経緯

白岡市は埼玉県東部に位置する総面積24.92km²の市で、東西約10km、南北約6kmと東西方向に長い。地域の中央部を南北にJR宇都宮線（東北本線）、東北新幹線、東北自動車道等が貫き、JR白岡駅・新白岡駅周辺や主要地方道（県道）さいたま・栗橋線沿いに市街地が形成されている。しかし市街地外縁には水田や畑地、特産の梨の畑等が営まれ、水と緑の豊かな光景が広がる。

昭和29年に篠津村と大山村及び日勝村の3村合併により誕生した白岡町は、当初純農村的な町であった。しかし、昭和33年の東北本線の電化、同40年代初頭の県道大宮・栗橋線（現さいたま・栗橋線）や国道122号など主要道の開通などをきっかけに、都心から40km圏内である当市はベッドタウン化が顕著となった。平成以降は駅周辺にマンションや集合住宅が目立って増え、山林は分譲宅地に姿を変えつつある。中高層のマンション開発も進み、今後も市域における開発の激化が予想される。

また、平成22年度には、市域北部で首都圏中央連絡自動車道（圏央道）と東北自動車道を接続するジャンクション建設（久喜白岡ジャンクション）が完了し、交通網の発達が目ざましい。人口の増加を背景に、平成24年10月には市制を施行した。

このような情勢のなか、白岡市教育委員会では公共及び民間の開発事業と埋蔵文化財保護の調整に努めてきた。開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に該当する場合は事前に試掘調査等を行い、遺跡の破壊が免れない場合には事前に発掘調査による記録保存を実施している。今回報告する七カマド遺跡（第1地点）、赤砂利遺跡（第5・7・10・11地点）の発掘調査は、以下の経緯で調整された。

2 調査の経過

七カマド遺跡（第1地点）は、平成22年11月9日・10日に実施した試掘調査の結果を受け、同年中に発掘調査を行った。調査地点は遺跡の中央部よりやや南寄りに位置し、標高は約9mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成22年11月29日	準備作業
11月30日	表土除去
12月2日～8日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
12月13日～15日	埋め戻し作業、調査終了

赤砂利遺跡（第5地点）は、平成21年10月23日に実施した試掘調査の結果を受け、翌年度に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の南東寄りに位置し、標高は約10mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成22年5月25日～27日	表土除去
5月28日	周辺環境整備、基準杭設定
5月31日～6月21日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
6月22日～24日	埋め戻し作業、調査終了

赤砂利遺跡（第7地点）は、平成23年2月3日に実施した試掘調査の結果を受け、同年中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の中央に位置し、標高は約10mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成23年2月14日	表土除去、遺構確認、遺構掘削、
2月16日～18日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
2月21日	埋め戻し作業、調査終了

赤砂利遺跡（第10地点）は、平成26年6月18日に実施した試掘調査の結果を受け、同年中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の北端に位置し、標高は約11mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成26年7月1日・2日	調査区南半部表土除去
7月7日・8日	周辺環境整備
7月9日～17日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
7月22日・23日	排土反転、調査区北半部側表土除去
7月24日～29日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
7月30日	埋め戻し作業、調査終了

赤砂利遺跡（第11地点）は、平成28年7月19日に実施した試掘調査の結果を受け、同年中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の中央に位置し、標高は約10mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成28年8月8日	表土除去
8月9日	周辺環境整備
8月10日～18日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
8月19日	埋め戻し作業、調査終了

II 位置と環境

1 遺跡の立地と地理的環境

七カマド遺跡の位置する地域は、近世村名をとって白岡地区といわれ、地形的には大宮台地白岡支台上にあたる。白岡支台は久喜市除堀付近から、当市の篠津地区、白岡地区、小久喜地区を経て、蓮田市黒浜付近まで南北約9kmにわたって展開している。支台の東側に広がる沖積地は「日川筋」と呼ばれる利根川水系の旧河道である。西側には元荒川の沖積低地が広がっている。

白岡支台の特徴は、北部と南部で標高や低地との比高差が異なることである。北部では標高12m、低地との比高差は1m程と低平なのに対し、南部では約15～16m、比高差5～6mと明瞭な崖線を形成する。これは埼玉県加須市を中心とする関東造盆地運動に起因するといわれている。また支台の東縁と西縁の台地形状も対照的で、東縁は沖積低地との差が不明瞭なのに対し、西縁は支谷が発達し切り立った崖線を形成するという特徴がある。

赤砂利遺跡の位置する地域は、近世村名をとって上野田・下野田地区といわれ、地形的には大宮台地慈恩寺支台上にあたる。慈恩寺支台は南西の元荒川、東の古利根川によって画された独立した台地である。北西から南東に9km程延びており、元荒川及びその支流の開析を受けている。北は久喜市太田袋付近から、南は春日部市花積付近まで展開する。支台東側から南端部までは中川低地に面し、西側は近世初頭まで利根川の旧流路であった日川低地に面している。また、慈恩寺支台の北部は、中川低地からの小支谷が複雑に入り込んでいる。

慈恩寺支台は周囲の沖積低地との比高差や支谷の開析状態に特徴がある。北部は関東造盆地運動の影響により沖積低地への埋没化が顕著である。台地南縁部の春日部市花積付近の標高は18m程だが、北上するにつれ標高を減じ、高岩付近では標高9m程度となって、周囲の沖積地とほとんど比高差がなくなり、埋没台地となって久喜市方面へ延びると考えられている。また東縁部と西縁部とは対照的で、東縁部は比高差が少なく複雑に支谷が発達するのに対し、西縁部は明瞭な崖線をもちながら支谷は比較的未発達である。往古の人々はこのような台地の縁辺部や谷頭部を好んで選地したと見え、遺跡が多数分布する。中世期にはこの台地上を鎌倉街道中道なかつみちが縦貫しており、このルートを追跡するように、近世初頭には日光御成道が整備された。

2 歴史的環境

大宮台地白岡支台上に展開する遺跡の内、七カマド遺跡周辺の代表的な遺跡を通時的に概観する。

旧石器時代の遺跡としては、層位的な出土ではないものの、入耕地遺跡をはじめ白岡支台西縁部の山遺跡やタタラ山遺跡などで、ナイフ形石器や角錐状石器等が出土している。

縄文時代は早期から晩期までの遺跡がみられる。周辺では、正福院貝塚や入耕地遺跡、茶屋遺跡があげられ、入耕地遺跡においては、縄文時代後・晩期の環状盛土遺構の存在が明らかになっている。

弥生時代から古墳時代にかけては遺跡分布が希薄になる。古墳時代前期では入耕地遺跡や茶屋遺跡で住居跡が認められ、一定規模の集落規模の展開が窺われるほか、正福院貝塚では方形周溝墓が検出されてい

る。一方、古墳時代中・後期は中妻遺跡や神山遺跡で住居跡が数軒検出される程度である。

奈良・平安時代では、中妻遺跡が居住域及び生産域の中心であったと考えられる。中妻遺跡では精錬作業を含む製鉄を行っていた8世紀代の鍛冶工房跡が検出された。

中世では、入耕地遺跡で堀に囲まれた14～16世紀の館跡とともに舶載陶磁器類が多数出土している。また、中妻遺跡においても掘立柱建物跡群や大規模な堀が検出されている。白岡支台は中世の埼玉郡に属し、武蔵七党の野与党の有力一族、鬼窪氏が本貫地としたといわれる。遺跡近辺に存在する白岡八幡宮や正福院、篠津久伊豆神社などは、草創や社殿造立に同氏との関わりが傳承されている。

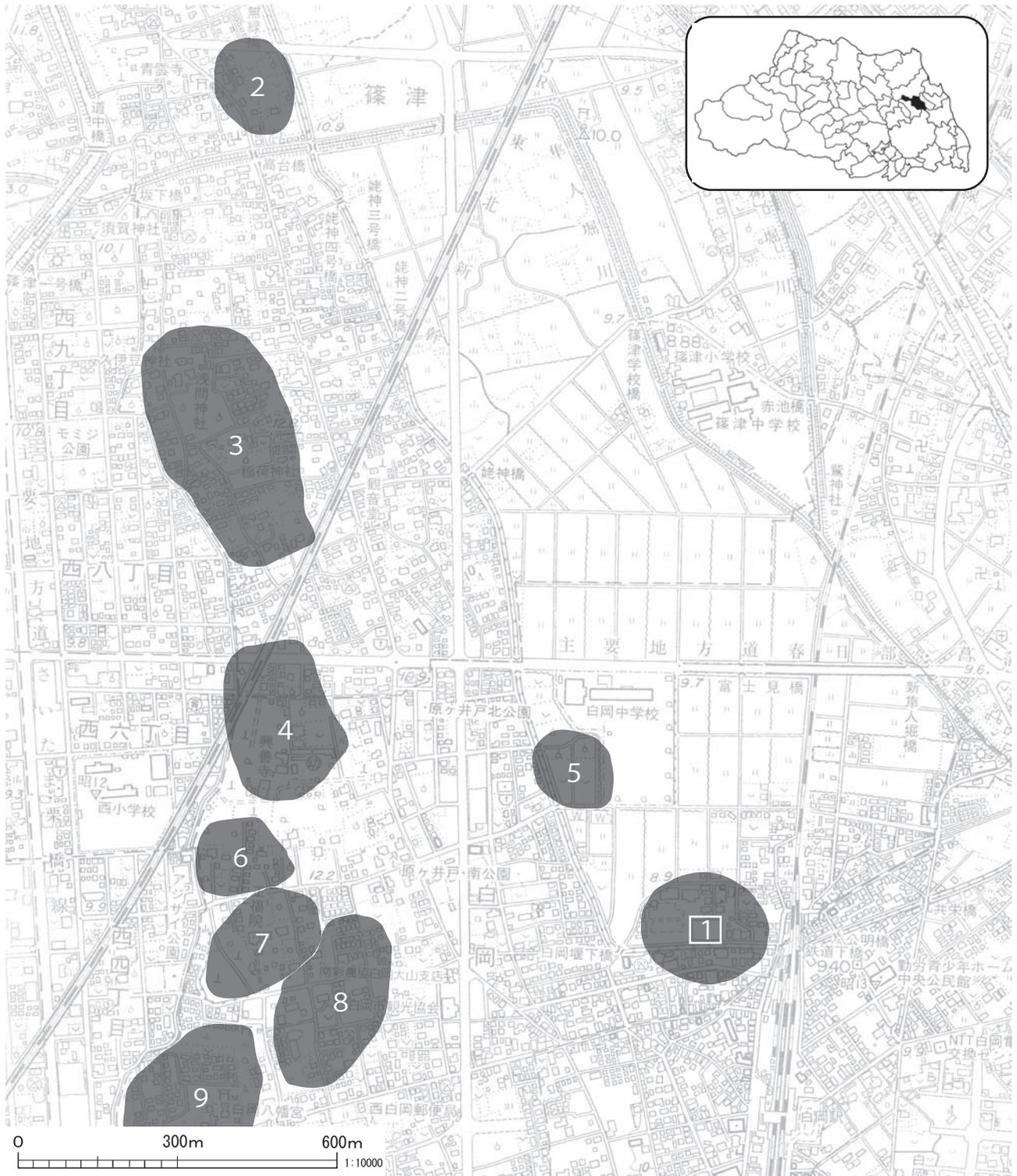
大宮台地慈恩寺支台上に展開する遺跡の内、赤砂利遺跡周辺の代表的な遺跡を通時的に概観する。

旧石器時代の遺跡としては、上小笠原遺跡のソフトローム層中からナイフ形石器2点が出土している。

縄文時代は中期以降に遺跡数が大きく増加し、ほとんどの遺跡で遺構や遺物が確認される。代表的な遺跡として本報告の赤砂利遺跡のほか、清左衛門遺跡や上小笠原遺跡があげられる。赤砂利遺跡では、加曾利EⅡ式期の住居跡をはじめ、中期後半から後期までの多くの住居跡が台地の縁辺にまで展開する。清左衛門遺跡では、中期後半から晩期までの多数の住居跡が検出されたほか、石冠や人面土版など埼玉県内でも希少な遺物が出土したことで注目を集めた。埋没谷では堅果類の灰汁抜き等に用いたと考えられる木組み施設が発見されたほか、縄文時代後期の土器片を伴う地点貝層が検出され、マシジミやハイガイ、オオタニシに混じってニホンジカやイノシシといった獣骨、さらには鳥骨や魚骨も出土した。上小笠原遺跡では、長径10mを超える大型住居跡を含む、縄文時代後期前葉の住居跡が18軒検出された。

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	発掘調査(年度)
1	七カマド遺跡	白岡字東下谷	縄文後、中世、近世	平成22
2	志部遺跡	篠津字志部	古墳前、奈良・平安	
3	中妻遺跡	篠津字中妻・神山・磯・宿	縄文早～後、古墳前～後、奈良・平安、中世、近世	平成12・14・16・18・21・22・24・25・26・27・28
4	神山遺跡	篠津字神山・白岡東	縄文前・中、古墳中・後、中世、近世	昭和51・平成5・12・17・25・26
5	西下谷遺跡	白岡字西下谷・東	縄文中、古墳前	
6	白岡東遺跡	白岡字東	縄文早・前・後、中世	
7	正福院貝塚	白岡字茶屋	縄文早～晩、古墳前、中世、近世	昭和62・平成13
8	入耕地遺跡	白岡字茶屋・東	縄文早・前・後・晩、古墳前、中世、近世	昭和26・平成3・4・7・15・16・17・19・23・25・28
9	茶屋遺跡	白岡字茶屋	縄文早・前・後、古墳前	昭和57・平成6・8・13・14・18
10	赤砂利遺跡	上野田字赤砂利、下野田字宿字赤砂利、彦兵衛字八幡	縄文中・後、中世、近世	平成5・7・11・12・22・24・25・26・28
11	宿本村遺跡	下野田字宿本村、上野田字本村	縄文	
12	本村遺跡	上野田字本村、下野田字宿本村	縄文中・後、古代	
13	宿赤砂利遺跡	下野田字宿赤砂利	縄文中	平成25
14	原遺跡	太田新井字原	中世、近世	
15	鶴ヶ曾根西遺跡	下野田字鶴ヶ曾根	縄文中・後、中世、近世	昭和62
16	鶴ヶ曾根東遺跡	下野田字鶴ヶ曾根	縄文中、近世	
17	上小笠原遺跡	彦兵衛字上小笠原・下小笠原	旧石器、縄文後	平成13・20
18	下小笠原遺跡	彦兵衛字下小笠原・下北山	縄文中・後	
19	清左衛門遺跡	彦兵衛字清左衛門・八幡、上野田字八幡	縄文中～晩、中世、近世	平成13・14・15・20・22・23・24・28
20	台下遺跡	岡泉字台下	縄文中・後	
21	下道遺跡	岡泉字下道	縄文中	平成2
22	神台遺跡	岡泉字神台	縄文早・中、近世	昭和63
23	丸山遺跡	岡泉字丸山	縄文前～後、中世	
24	大山遺跡	岡泉字大山	縄文早・後	
25	向野谷遺跡	太田新井字向野谷	縄文中	
26	下野谷西遺跡	太田新井字下野谷	縄文後、近世	



第1図 七カマド遺跡と周辺の遺跡分布図

弥生時代から古墳時代にかけては遺跡分布が希薄になる。

奈良・平安時代には、慈恩寺支台一帯は武蔵国埼玉郡に属し、平安時代末には太田荘が成立した。本村遺跡では平安時代の須恵器片が採集されている。

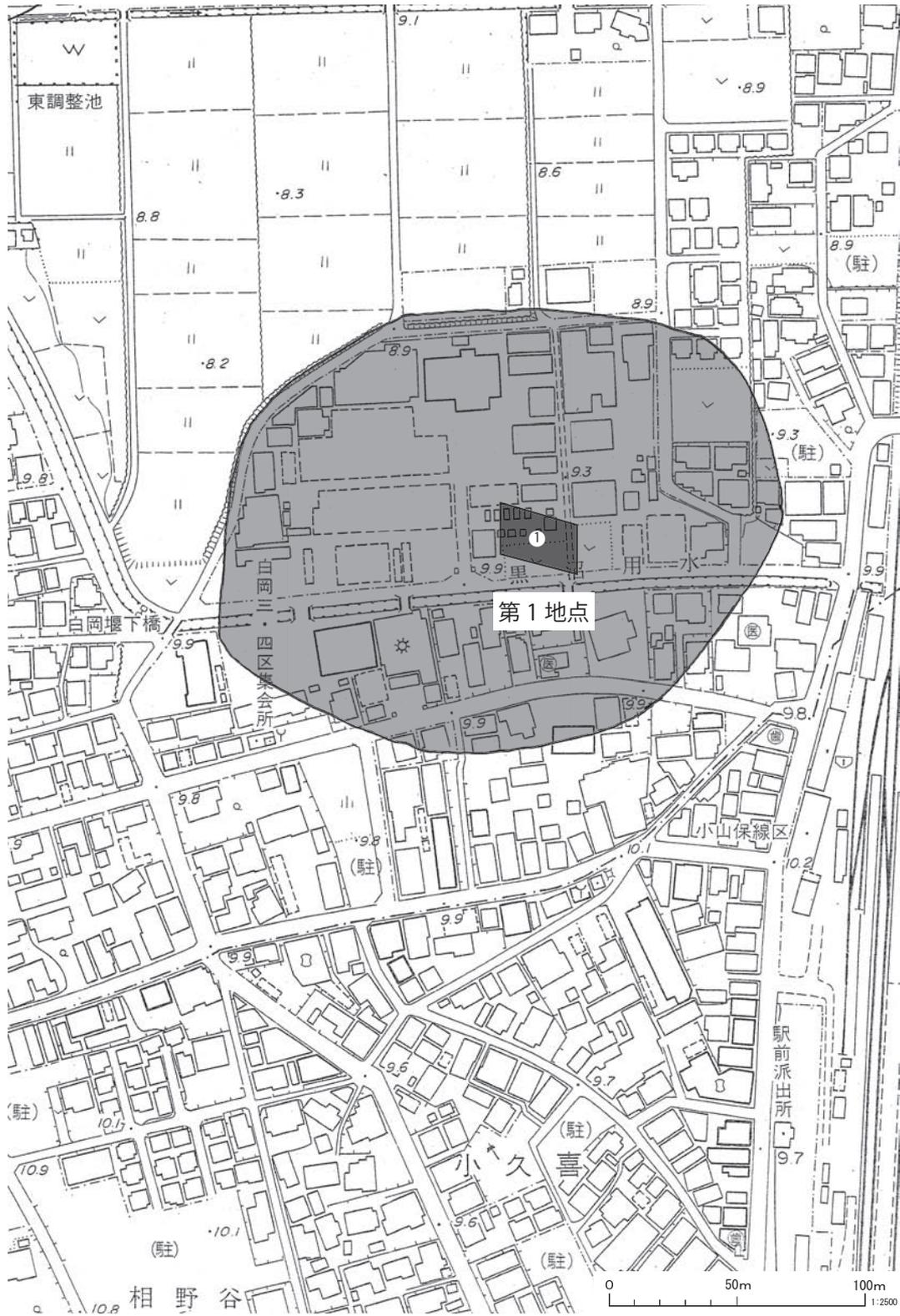
中世以降、太田荘は鎌倉幕府や室町幕府の鎌倉府の直轄領を経て、戦国時代には、関東管領上杉氏も対峙する古河公方足利氏の前線域となった。また、丸山遺跡には中世城館である丸山城の存在が伝承されて



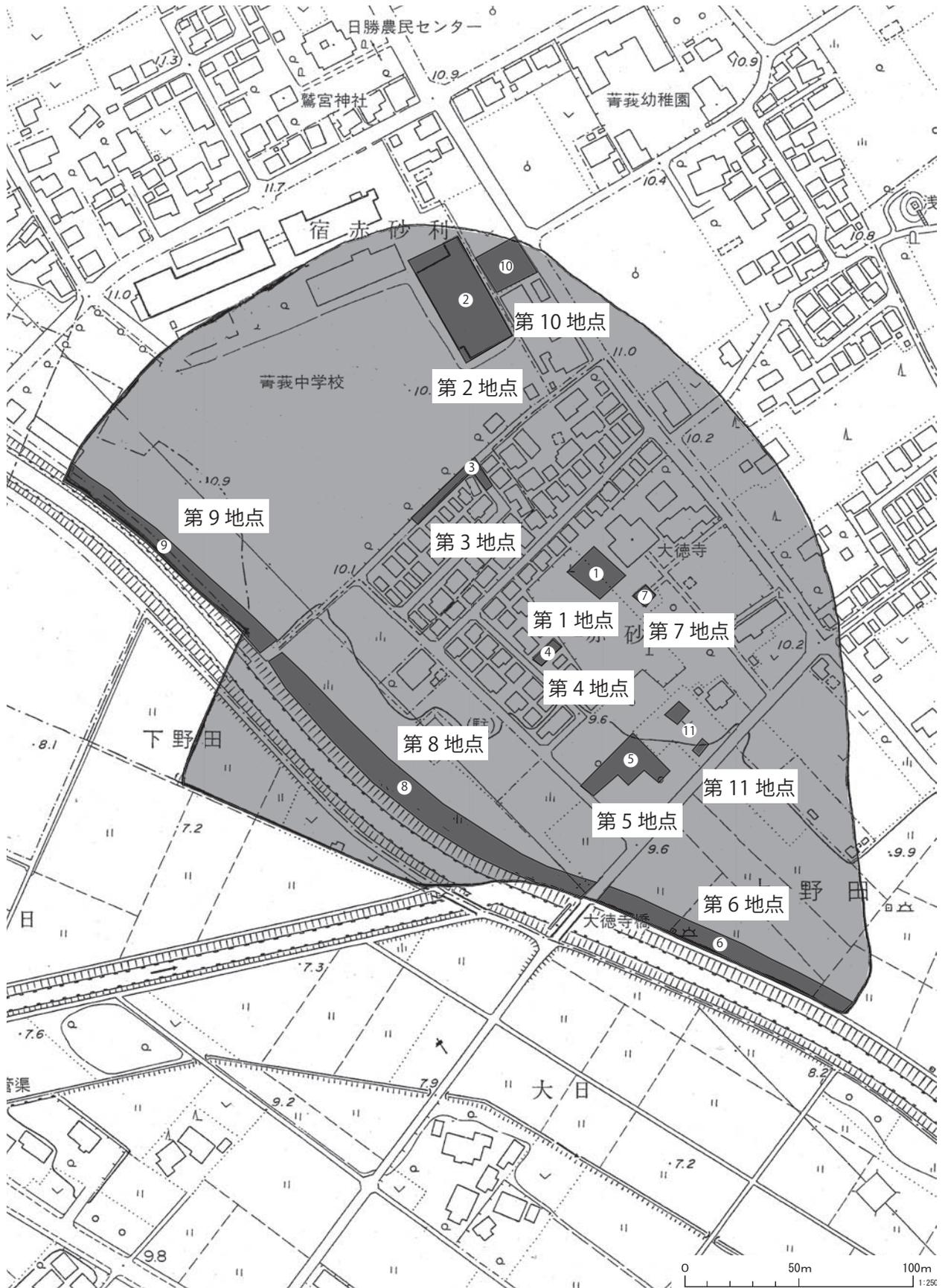
第2図 赤砂利遺跡と周辺の遺跡分布図

いる。

赤砂利遺跡内に位置する大徳寺は、寺伝によれば開山は中世に遡り、鎌倉時代の武将として名高い新田義貞も折に触れて参籠したと伝えられている。寺の東側を通る道は日光御成道整備前の「本街道」と伝わり、これが鎌倉街道中道であると推定されている。発掘調査の成果としても、13世紀の以降の土坑群や溝跡、柱穴群が検出され、舶載陶磁器や和鏡、木製櫛などが出土している。



第3図 七カマド遺跡の位置と発掘調査区



第4図 赤砂利遺跡の位置と発掘調査区

Ⅲ 七カマド遺跡（第1地点）の調査

1 遺跡の概要

七カマド遺跡は大宮台地白岡支台の東縁に位置する。同支台の東側には旧利根川やその支流の氾濫によって形成された沖積低地である日川低地が広がり、遺跡は幅300m、長さ400mほどの舌状に張り出す台地突端に立地している。遺跡の南寄りには近世に開削された黒沼用水が流れ、舌状台地の付け根を分断している。遺跡の北側は日川低地に面しており、地下水位の高い地域である。

当遺跡は、第5図と第2表のとおり、現在まで16地点での試掘調査実績がある。平成22年度から平成28年度まで、日産化学工業株式会社敷地内における研究施設建設に先立ち、計10地点にトレンチを入れる試掘調査を実施した。平成22年11月に実施した当遺跡6回目の試掘調査において、中・近世の溝跡が確認されたことが、初の本格的な発掘調査に繋がった。本発掘調査地点は、遺跡の中央部に位置し、標高は約10mである。

2 遺構と遺物

(1) 土坑

●第1号土坑（第7・8図）

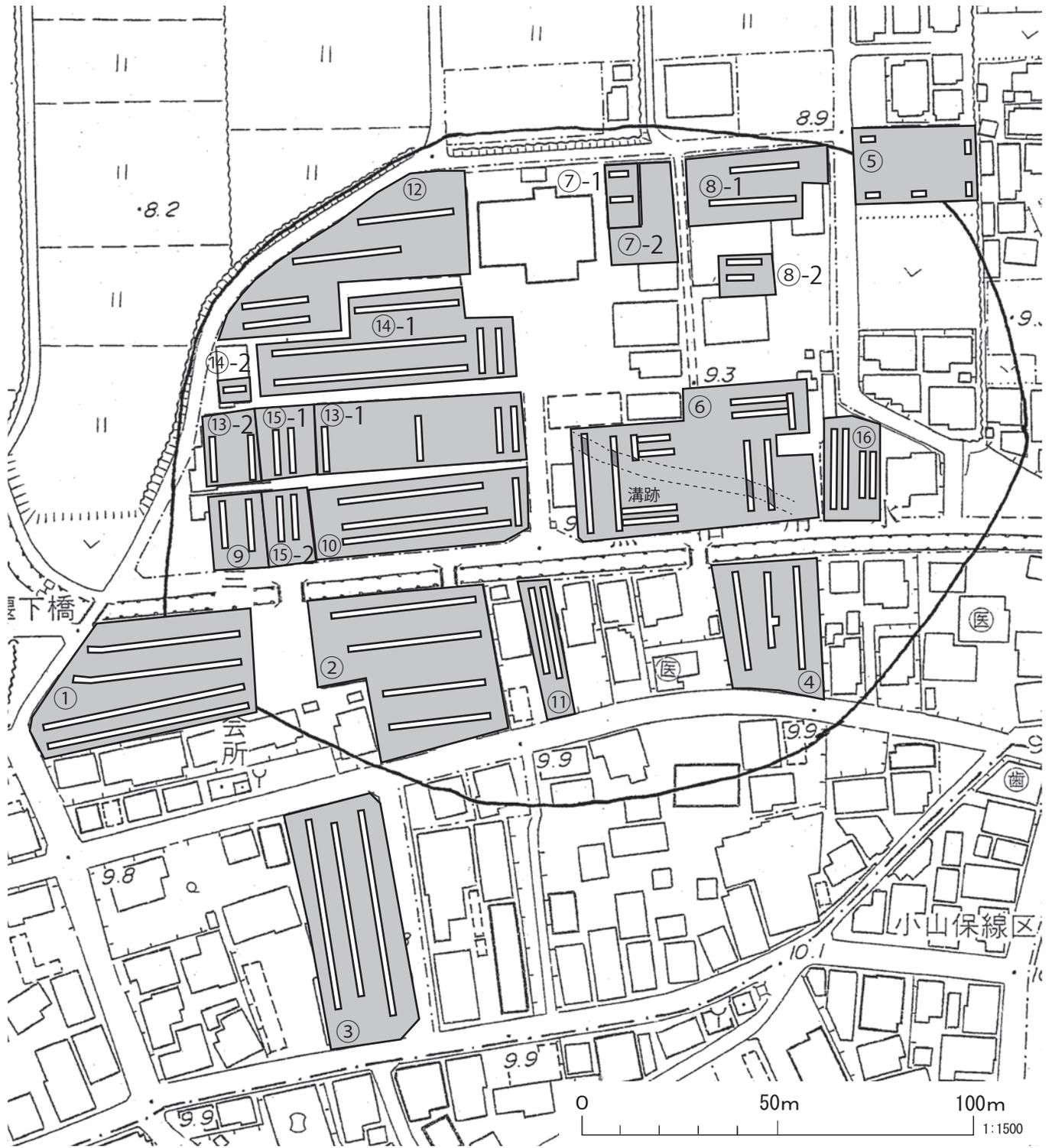
調査区南西寄りに位置する。平面形は長径約2.8m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第8図）

土器 1は胴部片で、斜位に単節縄文が施される。

第2表 七カマド遺跡試掘調査歴

番号	試掘調査原因	試掘調査面積	試掘調査日	備 考
1	共同住宅建設	1,734.5㎡	H2.12.19	
2	共同住宅建設	1,592.01㎡	H7.5.10	
3	共同住宅建設	1,502.39㎡	H7.5.11	
4	集合住宅建設	839.54㎡	H9.7.10	
5	共同住宅建設	493.44㎡	H16.6.15	
6	研究施設建設	1,500㎡	H22.11.9・10	七カマド遺跡（第1地点）として対象地の一部が本発掘調査に移行
7	研究施設建設	660㎡	H24.2.9	⑦-2地点は汚染土壌対策範囲内であるため調査不可能であった
8	研究施設建設	1,340㎡	H24.5.30	
9	研究施設建設	130㎡	H24.11.29	
10	研究施設建設	1,836㎡	H25.6.4	
11	分譲住宅建設	289.17㎡	H26.1.23	
12	研究施設建設	1,818.83㎡	H26.8.25	
13	研究施設建設	891.27㎡	H27.5.13	
14	研究施設建設	1,278.11㎡	H27.11.25	
15	研究施設建設	512㎡	H28.7.21	
16	研究施設建設	247.31㎡	H28.12.12	



第5図 七カマド遺跡の試掘調査箇所

●第2号土坑（第7図）

調査区西寄りに位置する。平面形は長径約2.1m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。東西方向に壁面がややハングしている。

●第3号土坑（第7図）

調査区東寄りに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.7mを測り、底面は平坦である。

●第4号土坑（第7・8図）

調査区東寄りに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.3mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第8図）

土器 2は胴部片で、斜位に垂下する沈線と縦位の単節縄文が認められる。

●第5号土坑（第7図）

調査区東寄りに位置する。平面形は直径約1.1mの円形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面の東西端がそれぞれ浅く窪む。

●第6号土坑（第7図）

調査区北東寄りに位置する。平面形は直径約1.1mの円形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面の東西端がそれぞれ浅く窪む。

●第7号土坑（第7図）

調査区東寄りに位置し、第1号溝跡に切られる。平面形は南端が切れているため長径は不明であるが、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

(2) 溝跡

●第1号溝跡（第6・8図）

調査区中央を北西から南東へ延伸し、第7号土坑を切る。建設工事の作業上、中央部分に未調査部分を残す。溝跡の壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、底面付近が幅広になっている。調査区での最大幅は4.5mを測る。確認面からの深さは約0.8mを測り、底面は平坦で凹凸が少なく、断面観察の結果、大きく分けて2度の掘り直し（8・9層の間）を受けていることが分かった。粘性の強い粘土層に鉄分の沈着が多く認められ、溝内には水が蓄えられていた可能性が高い。溝跡の性格としては、流路跡などが想定される。

今回の調査によって溝跡の走行方向が判明した。調査区外で屈曲して、どこかで区画を形成するのか、あるいは南側の黒沼用水などに接続するのか今後注意を要する。

出土遺物（第8図）

土器 4は陶器壺の胴部下半から底部片である。胴部には横位のヘラケズリの痕跡が認められる。高台が

付き、推定底径は13.5cm程である。

石器 5~8は磨石である。5・6は扁平な円礫を素材とし、表裏両面を研磨調整し平滑にしている。7・8は本来大形であった礫を打ち欠いて用いたものと考えられる。9・10は板碑片の残欠と思われる。

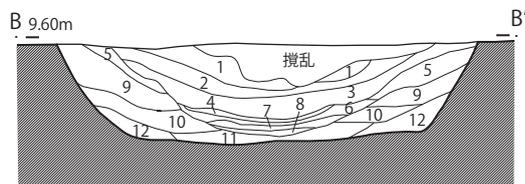
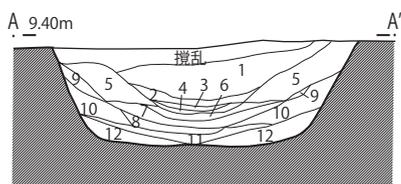
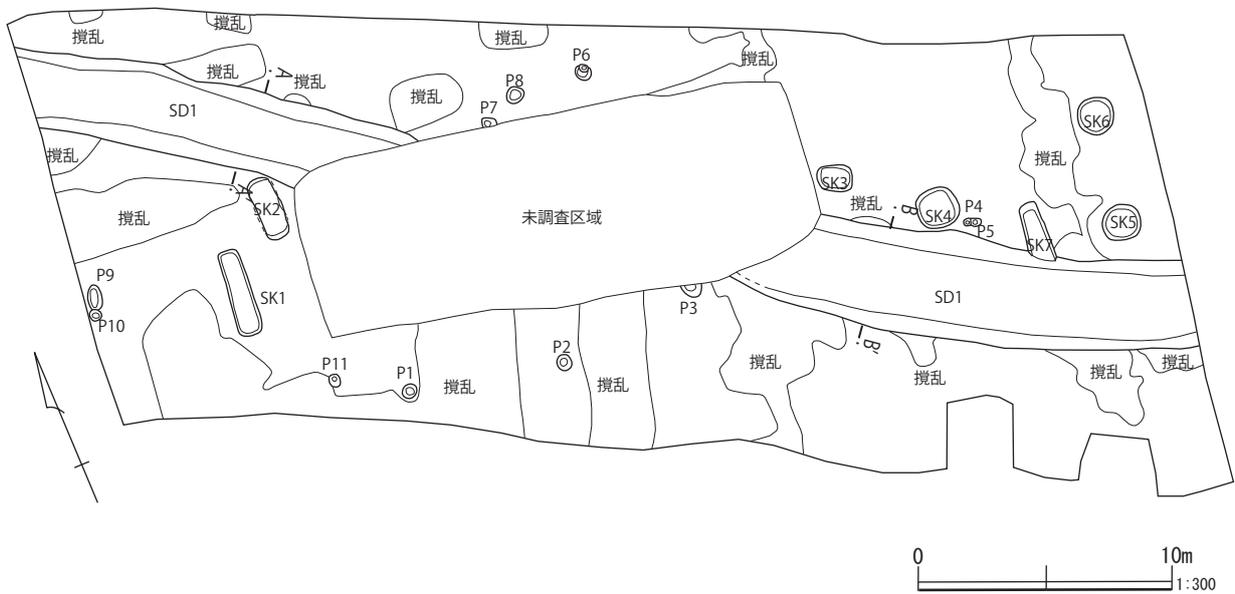
鉄滓 11は炉内滓と考えられる鉄滓である。長さ7.9cm、幅9.8cm、厚さ4.0cm、重量は307.0gを測る。メタルが多く遺存しており、磁着度は4であった。

(3) ピット (第6図)

検出されたピットは11基を数えるが、遺物の出土は僅かな小破片のみで帰属時期は判然としない。ピットの計測値は第3表に示した通りである。

(4) 調査区出土遺物 (第8図)

土器 3は胴部片で、斜位と縦位に垂下する沈線が認められる。

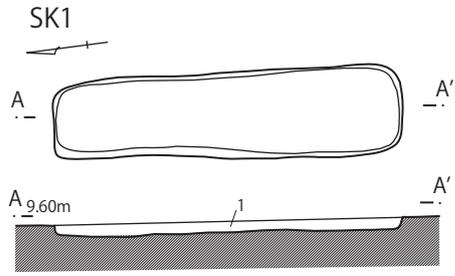


SD1

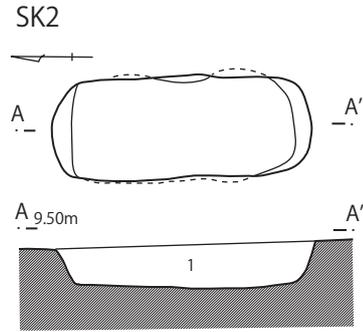
- 1 暗灰色土 締り弱 黄灰色粘土ブロック (2~5cm) を少し、鉄分を多く含む。
- 2 暗灰色土 暗褐色土ブロック (1~5cm) と黄灰色粘土 (0.2~1cm) を少し、鉄分を多く含む。
- 3 暗灰色土 締り弱 粘性強 黄褐色粘土 (0.5~3cm) と鉄分をやや多く、有機物を多く含む。
- 4 褐灰色土 締り弱 粘性強 褐灰色粘土 (0.5~1cm) を少し、鉄分と炭化物をやや多く含む。
- 5 暗灰色土 締り弱 ローム粒子やや多く、ロームブロック (0.5~1cm) と鉄分を少し含む。
- 6 暗灰色土 締り弱 粘性強 黄灰色粘土 (0.2~1cm) を少し含む。
- 7 黒褐色土 締り弱 粘性強 褐灰色粘土 (0.5~1cm) を少し、鉄分と炭化物をやや多く含む。
- 8 黄褐色土 締り弱 粘性強 黄灰色粘土 (0.2~1cm) を少し含む。
- 9 黒褐色土 締り弱 有機物やや多く、ローム粒子を少し含む。
- 10 黄褐色土 締り弱 粘性やや強 ロームブロック (0.5cm程) と鉄分をやや多く含む。
- 11 暗灰色土 締りやや強 粘性やや強 ロームブロック (0.5~3cm) をやや多く、鉄分を多く含む。
- 12 黒灰色土 締り弱 ローム粒子とロームブロック (0.5~2cm) を多く含む。



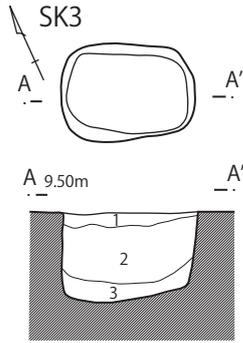
第6図 七カマド遺跡 (第1地点) 全測図及び第1号溝跡



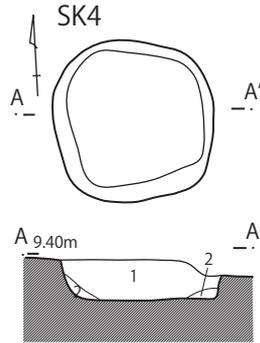
SK1
1 暗褐色土 縮まり弱
ローム粒子とロームブロック (0.5 ~ 1cm) を
やや多く、炭化物粒子を少し含む。



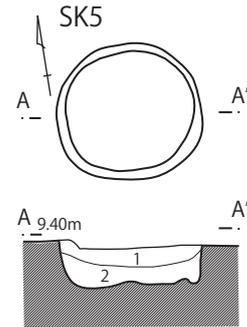
SK2
1 灰褐色土 縮まりやや強
ローム粒子とロームブロック
(0.5 ~ 2cm) をやや多く含む。



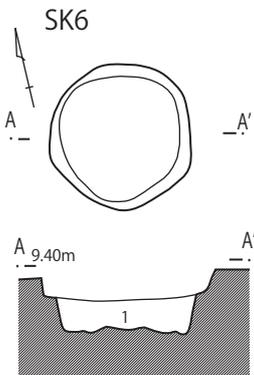
SK3
1 暗褐色土 縮まり弱
ローム粒子とロームブロック
(0.5cm 程) をやや多く、
炭化物粒子を少し含む。
2 暗褐色土 縮まり弱
ローム粒子とロームブロック
(0.5 ~ 6cm) を多く含む。
3 暗褐色土 縮まり弱
ローム粒子をやや多く、
ロームブロック (0.5cm 程)
を少し含む。



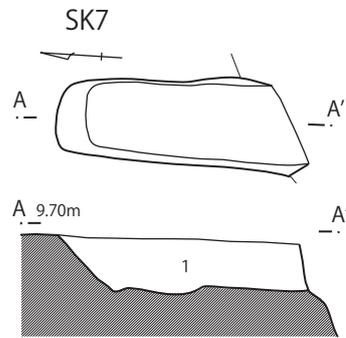
SK4
1 暗褐色土 縮まり弱
ローム粒子とロームブロック
(0.5cm 程) をやや多く含む。
2 暗褐色土 縮まり弱
ローム粒子とロームブロック
(0.5 ~ 5cm) を多く含む。



SK5
1 灰褐色土 縮まり弱
ロームブロック (0.5 ~ 1.5cm)
を多く、ローム粒子を
やや多く含む。
2 灰褐色土 縮まり弱
ローム粒子をやや多く、
ロームブロック (1cm 程)
と炭化物粒子を少し含む。



SK6
1 黒褐色土 縮まり有 粘性有
ロームブロック (3cm 程)
を若干含む。



SK7
1 黒褐色土 縮まり有 粘性有
ロームブロック (3cm 程)
を若干含む。

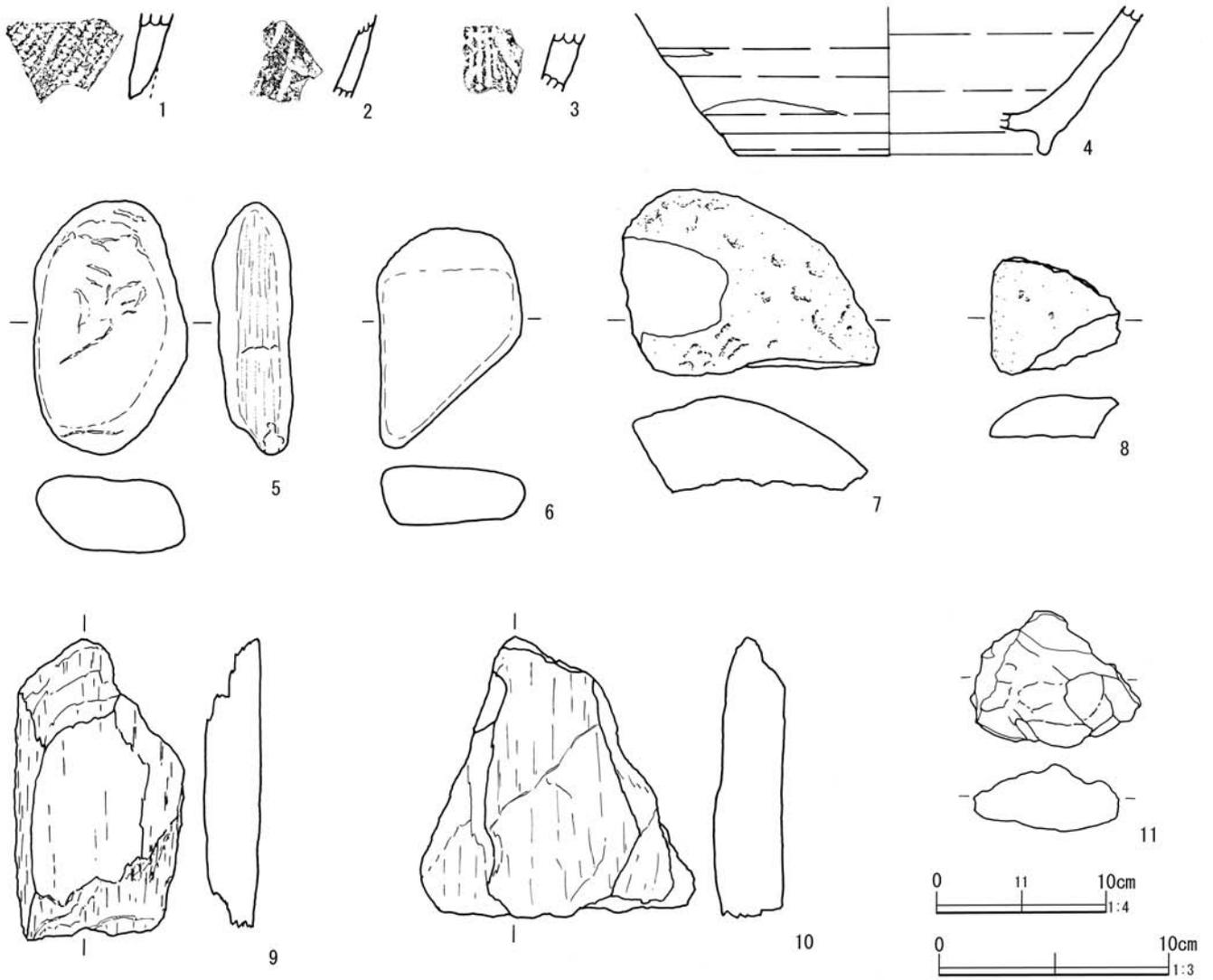


第7図 第1~7号土坑

第3表 セカマド遺跡 (第1地点) ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
1	42	40	22	5	(32)	28	21	9	80	42	14
2	46	42	37	6	48	44	13	10	26	24	18
3	68	(36)	27	7	42	30	16	11	36	30	26
4	24	(19)	26	8	52	48	14				

※単位は全てcm



第8図 調査区出土遺物

第4表 七カマド遺跡（第1地点）出土石器計測表

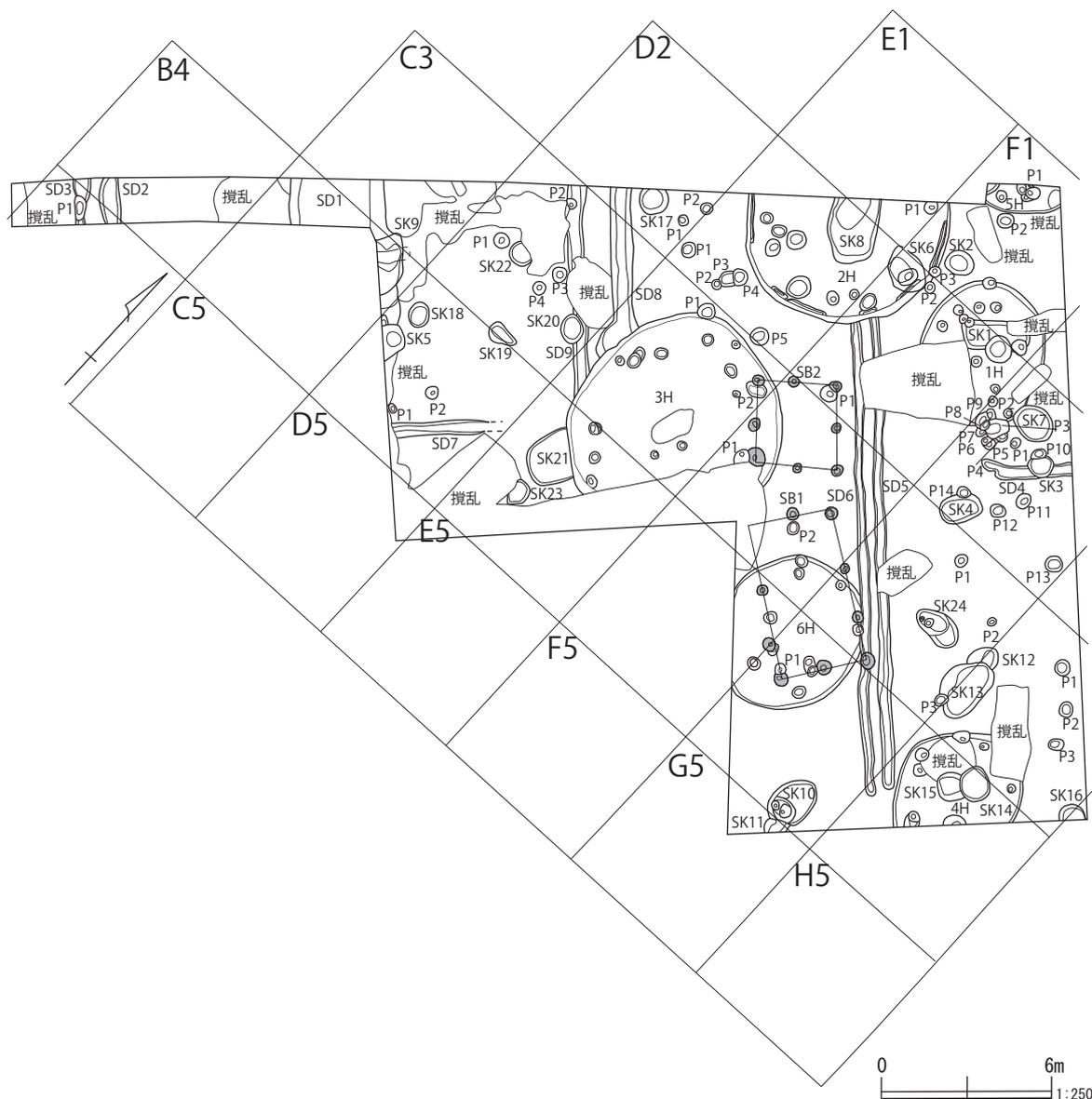
図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
8	5	SD1	磨石	砂岩	11.2	6.5	3.4	350.0	
8	6	SD1	磨石	砂岩	9.7	6.3	2.5	215.0	
8	7	SD1	磨石	安山岩	8.0	11.0	3.4	410.0	
8	8	SD1	磨石	安山岩	5.0	5.5	1.8	63.0	
8	9	SD1	板碑	緑泥片岩	13.1	7.4	2.4	315.0	
8	10	SD1	板碑	緑泥片岩	12.3	11.8	2.8	490.0	

IV 赤砂利遺跡（第5・7・10・11地点）の調査

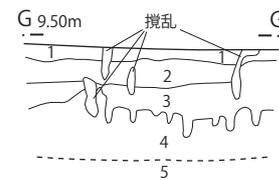
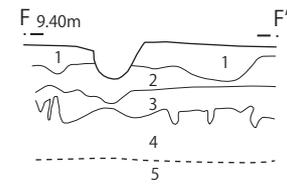
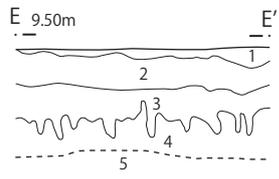
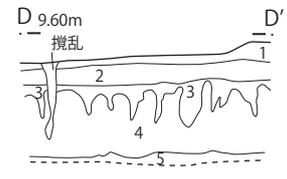
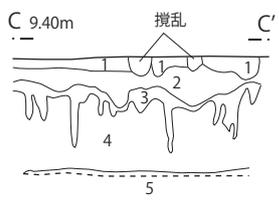
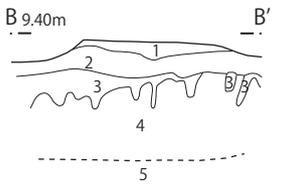
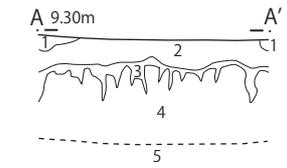
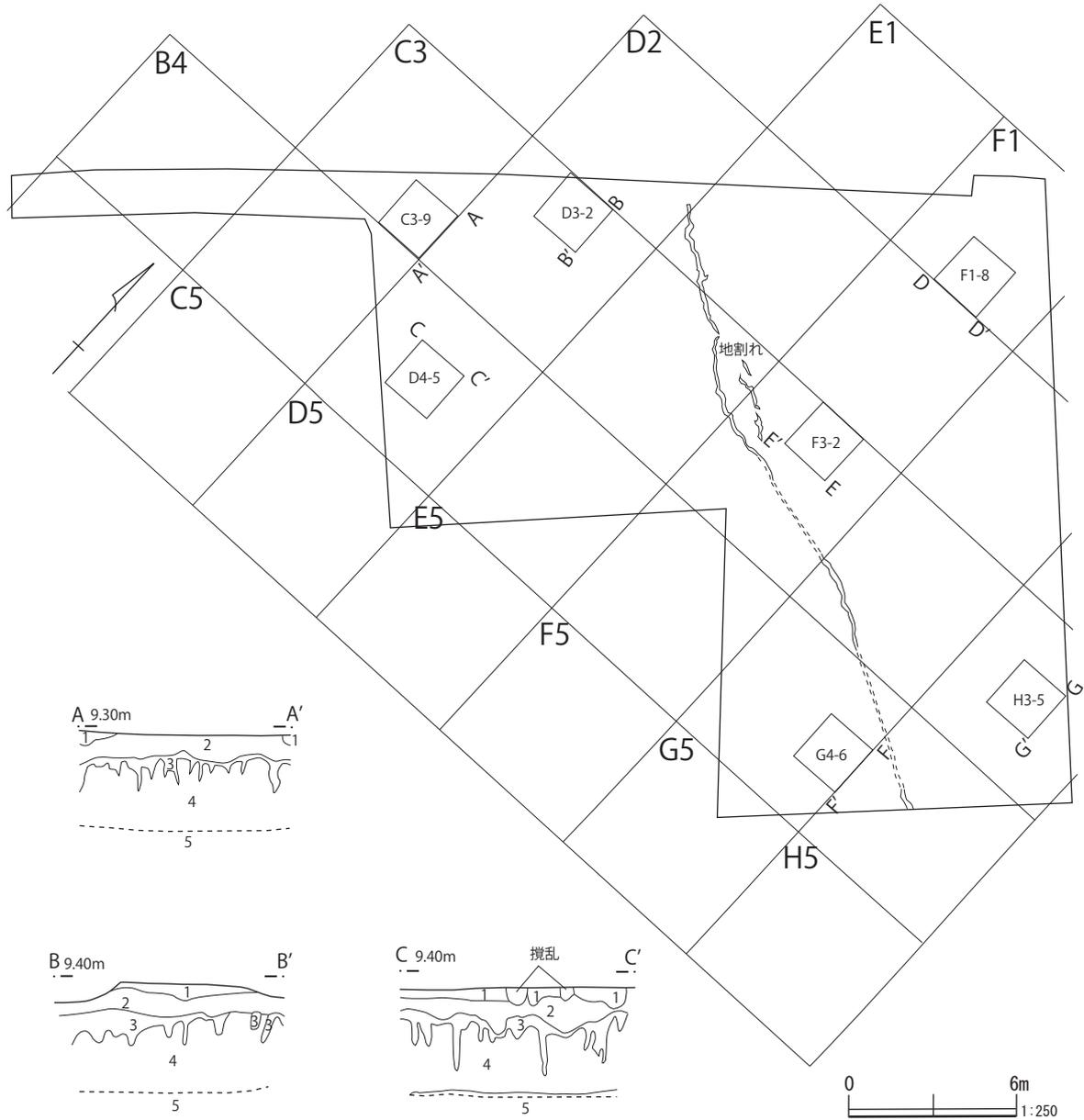
1 遺跡の概要

赤砂利遺跡は大宮台地慈恩寺支台の北部西縁に位置する。同支台の西側には旧利根川やその支流の氾濫によって形成された沖積低地である日川低地が広がり、遺跡はその日川低地から南東方向に入り込む支谷（通称「大日沼」）の、谷開口部東縁台地上に展開する。なお、近世初頭には、この支谷筋を隼人堀川が開削されている。

当遺跡は縄文時代中期と中世を主体とする遺跡であり、これまでに菁莪中学校体育館、隼人堀川河川沿いなど、本報告地点を含む計11地点で発掘調査が行われた。調査地点の内、本報告の第5・11地点は遺跡の南西寄り、第7地点は遺跡の中央、第10地点は遺跡の北端に位置し、標高はいずれの地点でも約10mである。



第9図 赤砂利遺跡（第5地点）全測図

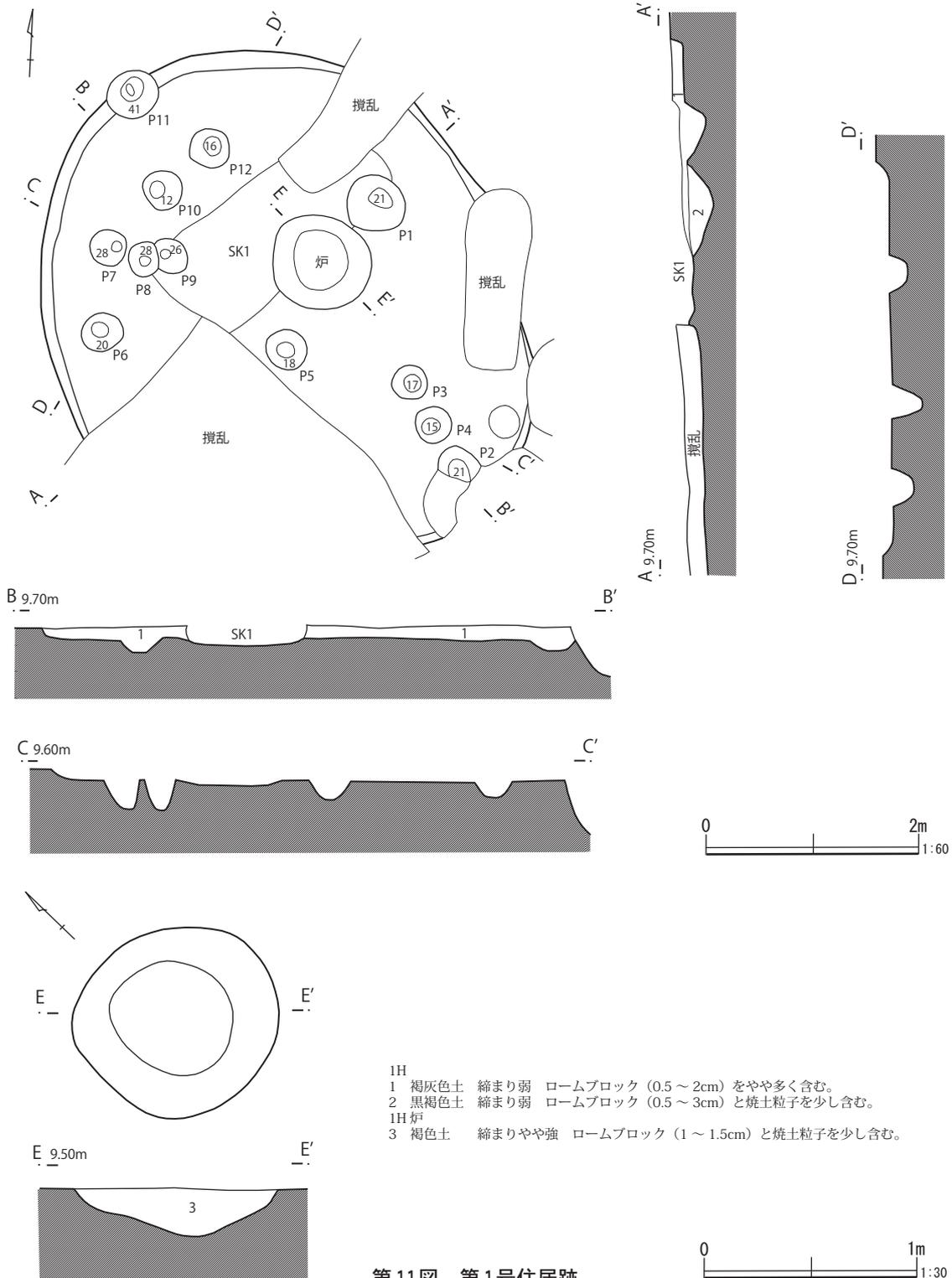


- 基本土層
- | | |
|--------|----------------------------|
| 1 褐色土 | ロームブロックをやや多く、炭化物と土器片を少し含む。 |
| 2 黄褐色土 | ロームへの漸移層。炭化物粒子を少し含む。 |
| 3 暗褐色土 | 白色粒子を含む。第1黒色帯。 |
| 4 暗褐色土 | 赤色スコリアと褐色土ブロックを少し含む。第2黒色帯。 |
| 5 明褐色土 | いわゆるX層。 |



第10図 サブトレンチ配置図及び土層断面図

なお、第5地点においては、旧石器時代の遺物確認のため、調査区内に一辺2m四方のサブトレンチを7か所設け、ローム土層の掘り下げを行った（第10図）。旧石器時代の遺物は認められなかったが、各サブトレンチにおいてローム土層の堆積を確認することができた。また、D2・E2・3・F3・G3・4・H4グリッドにおいて、遺構完掘後に幅10~20cmの蛇行する筋状の痕跡が確認された。地震による地割れの痕跡の可能性が考えられる。



第11図 第1号住居跡

2 第5地点の遺構と遺物

(1) 住居跡

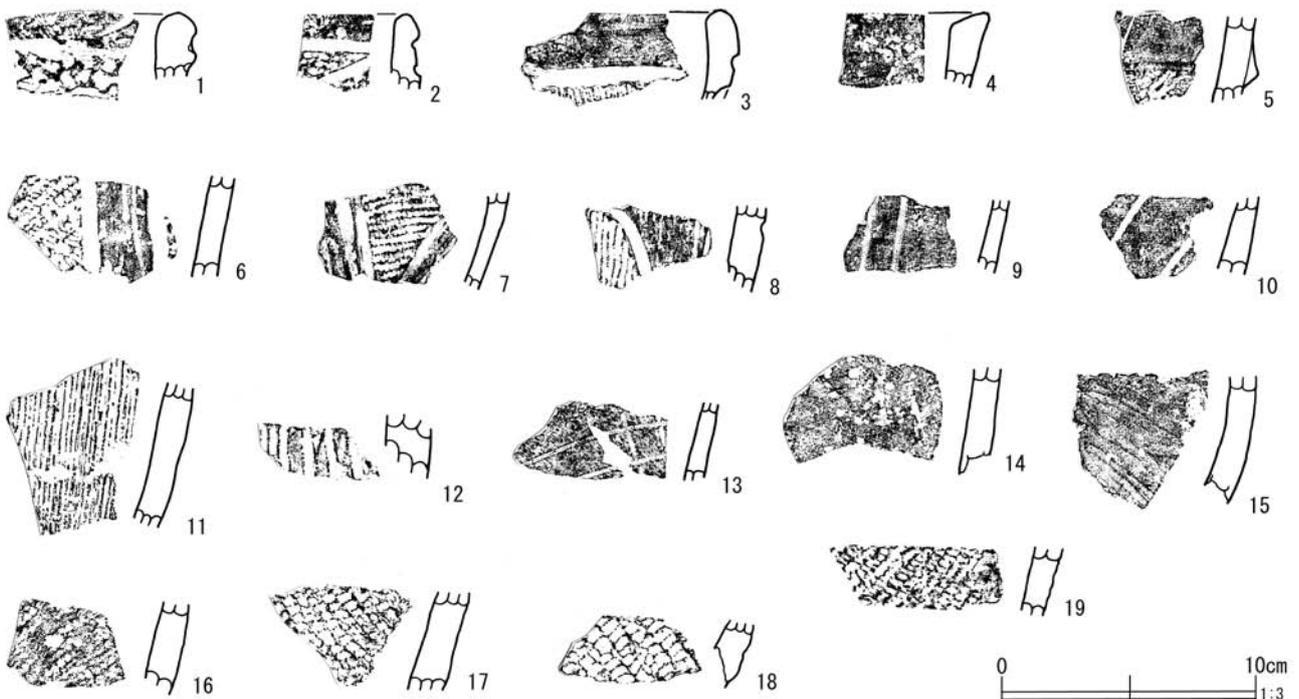
●第1号住居跡 (第11・12図)

F1・2・G1・2グリッドに位置し、第1号土坑に切られる。平面形は長径約5.2m、短径約4.4mの不整形を呈す。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。住居の外寄りに位置するP2・6・7・11が床面からの深さもあり、支柱穴の可能性が高い。

炉跡は長径約2m、短径約1.8mの不整形を呈し、住居内中央部よりやや北東寄りに位置している。炉跡は中央部がやや低く窪み、覆土には焼土粒子が混じるものの、発達した焼土の広がりなどは認められなかった。

出土遺物 (第12図)

土器 1~4は、加曾利E式に比定される口縁部資料である。1は、口縁部に棒状施文具による交互刺突文列を持つ資料、2は、口唇部に沿う沈線から口縁部文様帯を斜めに切る隆帯とこれを縁取る沈線とが斜行する資料、3は、口縁部にやや幅のある無文帯を持ち、無文帯下端を画す横走沈線以下に縦位の条線文が施されるもの、4は、内削ぎとなる無文の口縁部資料である。5は、断面三角形の横走隆帯の見られるものである。6~9は、垂下する沈線に縁取られた磨消文帯と縄文帯とが観察される胴部資料で、6・7は、単節RL縄文、8は撚糸文が施される。10は2条の沈線が斜行する資料である。11は、縦位の条線文が施される資料、12は、縦位の集合沈線の観察されるもの、13は、斜格子の施されるものである。14・15は無文の胴部資料で、両者とも斜位の整形痕を残す。16~19は縄文の施される胴部資料である。16・19は単節LR縄文、17は複節RLR、18単節RLである。



第12図 第1号住居跡出土遺物

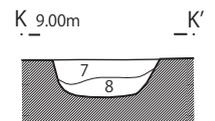
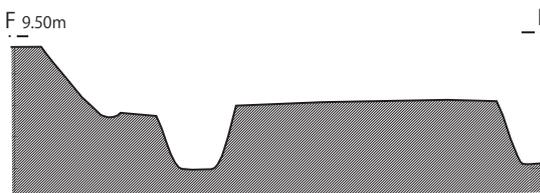
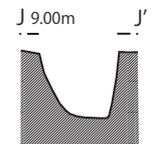
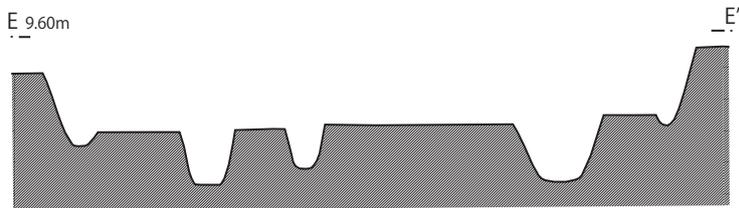
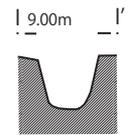
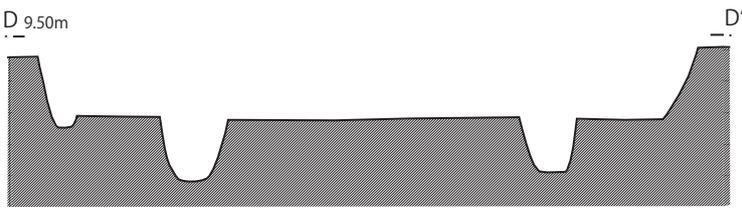
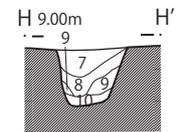
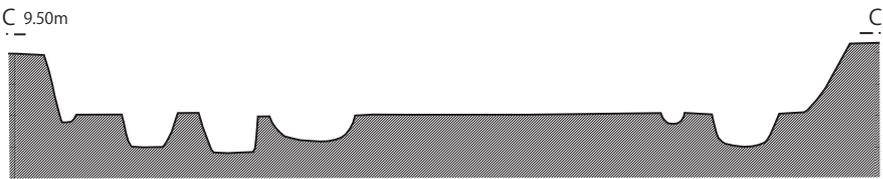
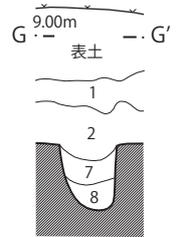
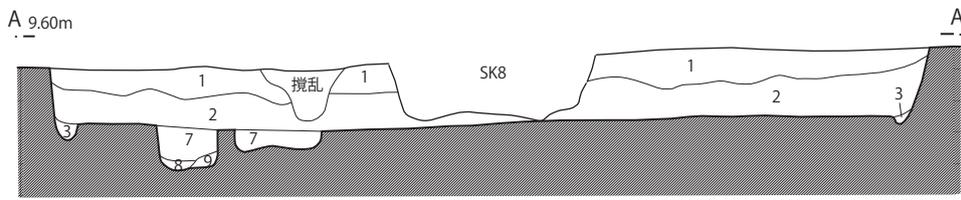
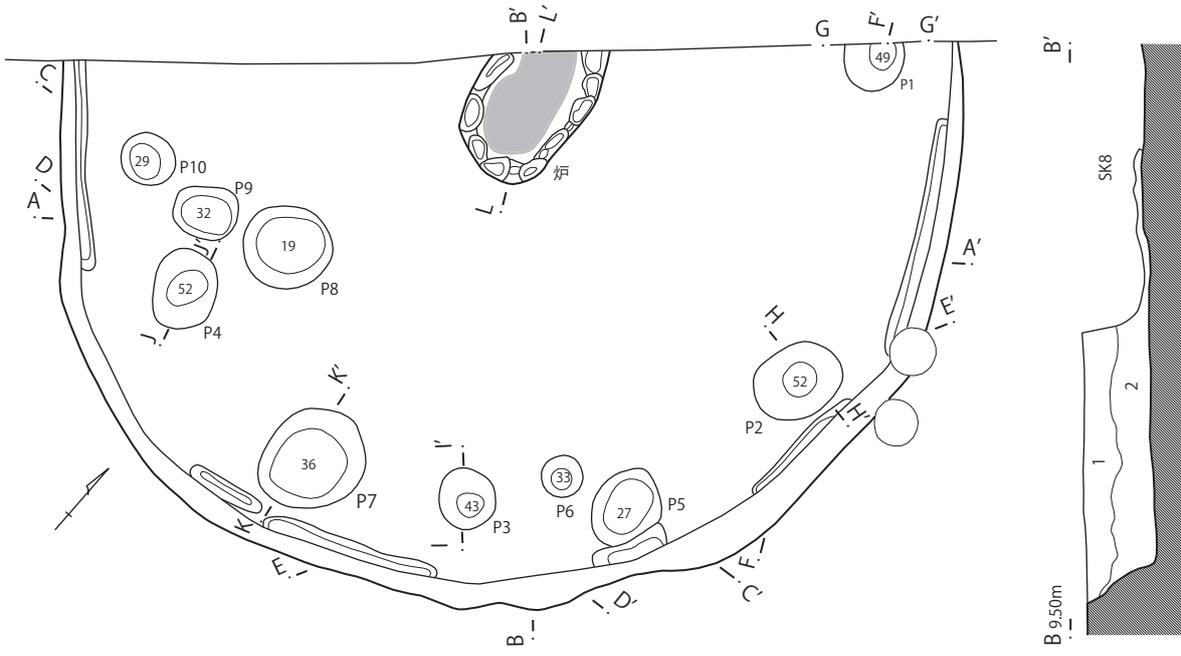
●第2号住居跡（第13・14・15・16・17・18図）

E1・2・F1・2グリッドに位置し、北半部は調査区外である。第8号土坑に切られる。検出部分から平面形は直径約7mの円形を呈すものと推定される。確認面から床面までの深さは約0.6mであった。住居の壁寄りに位置するP1・2・3・4・5・7が支柱穴と思われる。壁際に幅0.1～0.2mの溝跡が断片的に認められ、壁溝の可能性も考えられる。

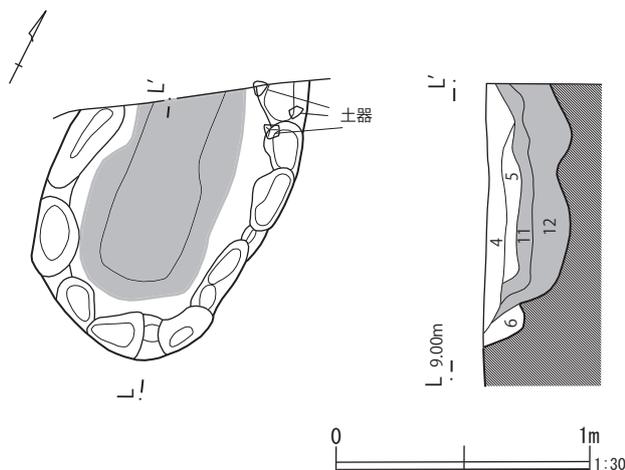
炉跡も北側が調査区外であるが、検出部分から平面形は直径約2.5m、短径約1.8mの楕円形を呈すものと推定される。炉跡の中央部は被熱を受けたローム層が硬く締まっていた。炉跡の外縁には石の抜き取り痕跡が認められ、本来、炉枠として円礫を配した石囲炉であったものと考えられる。抜き取り痕から推定される礫の形状は、直径0.4～0.6m、短径0.2～0.3mの楕円形を呈すものと思われる。

出土遺物（第15・16・17・18図）

土器 第15図1は、直立する胴部に横走隆帯とこれを挟んで向き合う弧状隆帯及び角押文の見られる資料である。阿玉台式土器である。2～19は、加曾利E式に比定される口縁部資料である。2は、しっかりと巻く渦巻文の見られる資料で、渦巻の両側には単節縄文の充填された長楕円形の枠状文が配される。また、渦巻上部の口唇部にも小さな渦巻が配される。3は、口縁部を巡る枠状区画の中に沈線で描出される渦巻が取り込まれるもの、4・5・12は、玉縁状の口唇を持つ平縁土器で、横走する幅広の沈線と並行する隆帯とが観察される。6は、楕円形の枠状区画の一部と見られる隆帯が斜行する資料、7は、低平な隆帯とこれを縁取る沈線で枠状区画が表現される資料、8は、細く丈の高い隆帯で渦巻状のモチーフを描くと思われる平縁資料、いわゆる梶山類型に該当する資料である。9は、器面を垂下する太く丈の高い隆帯の見られる口縁部資料である。口縁部に枠状区画を持たない可能性がある。10は、口縁部に横走する隆帯の見られる平縁資料、11は、角張った枠状区画の見られる平縁資料、13・14は、口縁部に2列の円形刺突列を持つ平縁資料で、後者は、強く内湾する口縁部を持ち、撚糸地文上に沈線で縁取られた波状に蛇行する磨消文帯が看取される。いわゆる連弧文系の土器群である。15は、口縁部文様帯に比較的大型の円形の区画文を持つものと思われる。区画内には、縦位の押し引き刺突列が充填される。16は、キャリパー形の波状縁深鉢で、幅狭の口縁部無文帯の下に、振幅の大きな波状あるいは「H」状の磨消文帯が観察される。磨消文帯の間隙の縄文帯に小さな渦巻文が配されるようである。17は、口縁部の直立する平縁土器で、口縁部に沿って交互刺突文列が施される。18は、やや外反する口縁部資料で口縁部無文帯下端に1条の沈線が観察される。19は、内湾気味の無文の浅鉢形土器で、玉縁状となる口唇部下端を幅の広い横走沈線で画す。20は、内傾する無文の平縁土器で、口唇外面に隆帯を貼り突出させる。21は、直立する無文の平縁資料、22は、単節縄文の施される平縁土器である。23は、口縁部文様帯下端を横走隆帯で画す資料である。24は、内湾する頸部に罅を持つ土器で、胴部は縦位の集合沈線が施される。直立ないしやや外反する口縁部を持つ有孔罅付土器である可能性が高い。25・26は、連弧文系土器群の胴部資料である。前者は、地文に条線文を持ち弧線の下端と胴部区画とをつなぐ3本の短沈線とこれらを縁取る区画線が看取される。後者は、撚糸文地文上に3条1組の沈線で縁取る磨消文帯により2重の連弧文を描くものである。27は、「く」の字に屈曲する胴部資料で、交互刺突列で区画される。28は、2条の円形刺突列の観察される胴部資料で、2条の沈線に縁取られる幅の狭い磨消文帯が垂下する。29は、2条の横走沈線と垂下沈線の窺われる縄文地文の胴部資料である。30は、垂下隆帯と斜行する沈線とが観察される胴部資料、31は、垂下する鎖状隆帯とこれを縁取る沈線の観察される胴部資料である。曾利式系譜の一群であろう。32・33



第13图 第2号住居跡



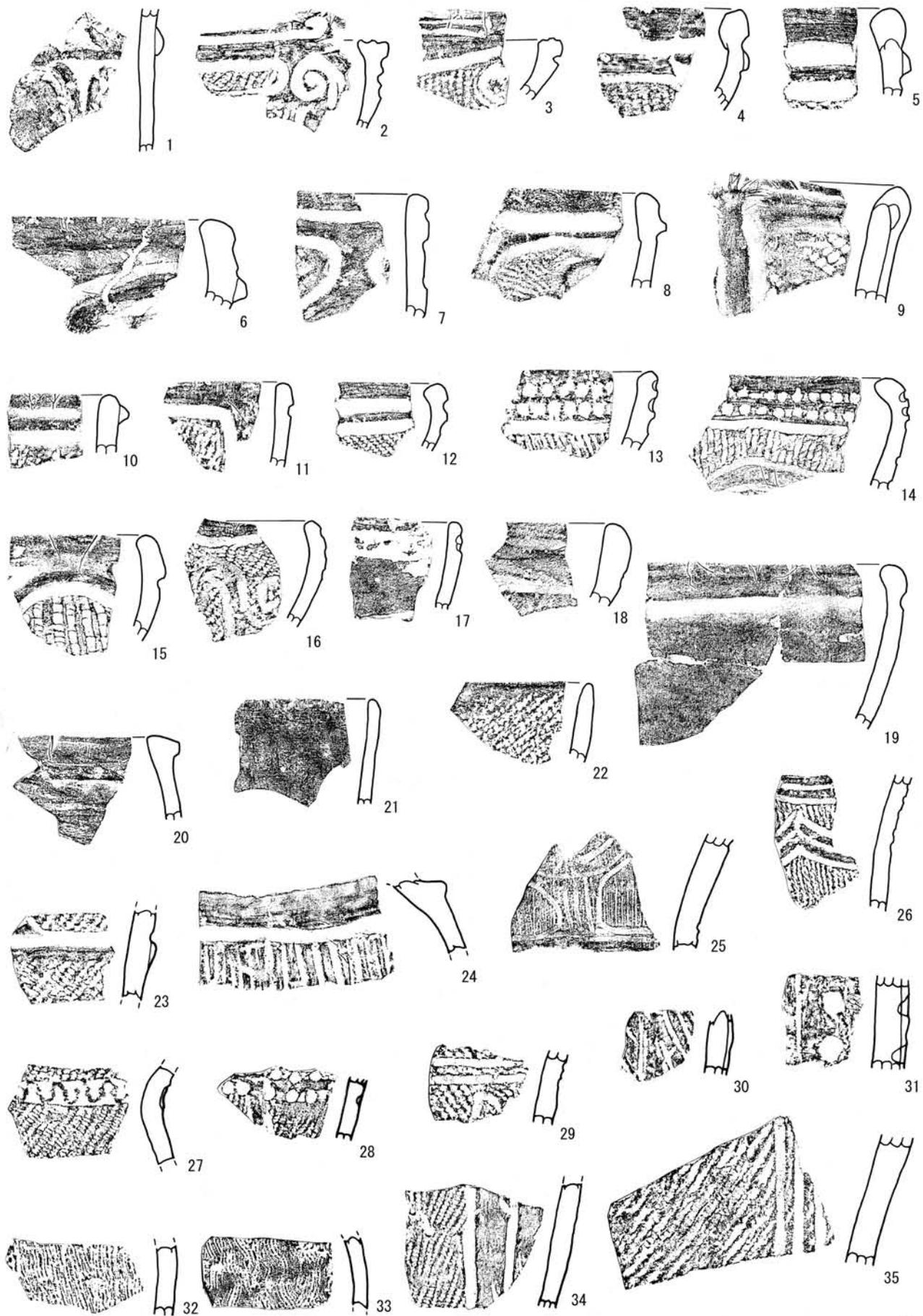
- 2H
 1 褐色土 締まり強 ロームブロック (1~2cm) と 焼土粒子、炭化物粒子をやや多く含む。
 2 褐色土 締まり強 炭化物粒子を多く、ロームブロック (0.2~0.5cm) と 焼土粒子をやや多く含む。
 3 褐灰色土 締まり強 炭化物粒子をやや多く含む。
 4 黒褐色土 締まり弱 焼土ブロック (0.1~0.5cm) と炭化物 (0.2~0.5cm) を多く含む。
 5 暗褐色土 焼土ブロック (0.2~0.5cm) を多く含む。灰層。
 6 暗褐色土 締りやや強 焼土粒子を少し含む。掘り方。
 7 褐色土 締まり弱 ロームブロック (0.2~0.3cm) を多く、炭化物粒子を少し含む。抜き取り痕。
 8 褐色土 締まりやや弱 ロームブロック (1cm程) を僅かに含む。抜き取り痕。
 9 茶褐色土 締まりやや強 黒色帯由来の暗褐色土ブロック (1~2cm) をやや多く含む。立柱後の埋め土。
 10 暗褐色土 締まりやや弱 黒色帯由来の暗褐色土ブロック (0.5~1cm) とロームブロック (0.5cm程) をやや多く含む。掘り方掘削時に入り込んだ土。
- 2H 炉
 11 赤褐色土 締まり強 被熱層。
 12 暗褐色土 締まり強 被熱ローム層。

第14図 第2号住居跡炉

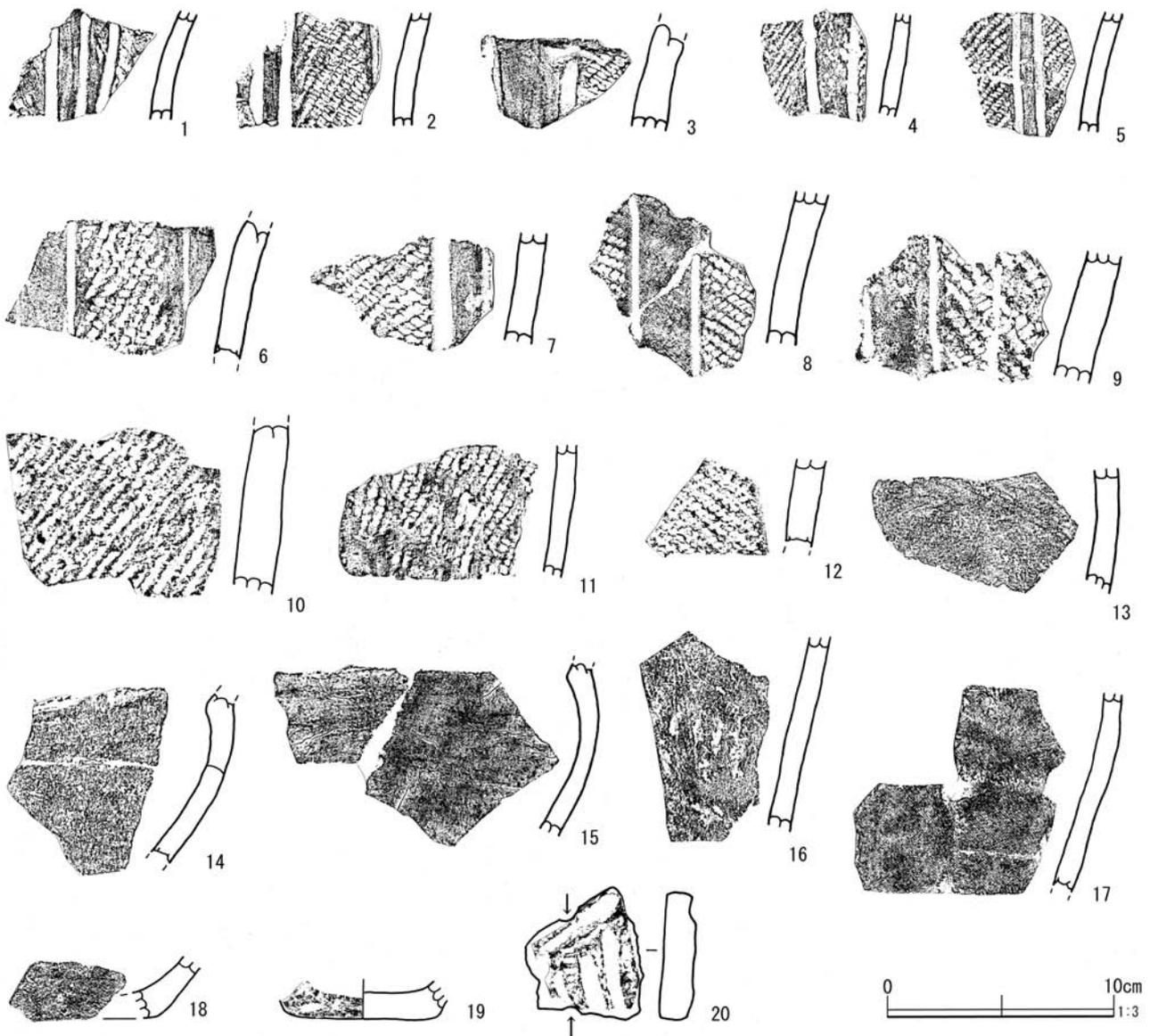
は、内湾する浅鉢形土器の胴部資料と思われる、櫛状施文具による条線文が施される。34~第16図9は、沈線ないし沈線で縁取られた磨消文帯の垂下する胴部資料である。地文は単節縄文を用い斜位から縦位回転させるものが多い。

第16図10~12は、縄文の施される胴部資料である。10・11は単節縄文、12は、複節縄文である。13~17は、無文の胴部資料である。このうち14・15は、外反する口縁部を持つ浅鉢形土器の括れ部付近のものである。18・19は、無文の底部資料で、後者は底径約7cmを測る。

第17図1は、口径24cmほどと推定される平縁深鉢形土器の口縁部資料である。外反する口縁部に上下を隆帯で区画した文様帯を持つ。内部に配した渦巻文の脚が文様帯内を斜めに分割するものと思われる。2は、胴径16cm、残存高16cmを測る深鉢形土器の胴下半部である。2本1組の沈線で縁取られた磨消文帯が垂下し、地文に撚糸文が施される。3は、無文の浅鉢形土器の胴部資料である。内外面とも丁寧に撫で整形が加えられている。4は、底径7cm、残存高10cmを測る深鉢形土器の底部資料である。2本1組の沈線で縁取られた磨消文帯が垂下する。地文は単節RL縄文である。5は、推定底径6cmほどの無文の底部資料である。大きく外反することから浅鉢と推定される。6は、推定底径7.5cmを測る底部資料である。単節縄文の地文上に垂下沈線が観察される。7は、残存部最大径14.5cm・残存高7cmを測る深鉢形土器の胴部資料である。2本1組の沈線で縁取られた磨消文帯が垂下する。器面の磨耗が著しいが、地文は条間の開く単節縄文と思われる。8は、残存部最大径14cm、残存高7cmを測る深鉢形土器の胴部資料である。胴部には撚糸文が施されるが、輪積から欠損する上部には斜行する集合沈線が施されていたようである。9は、残存部最大径34cm、残存高27cmを測る比較的大振りな深鉢形土器の胴部資料である。2本1組の沈線で縁取られた磨消文帯が垂下する。地文は単節RL縄文の縦位施文である。



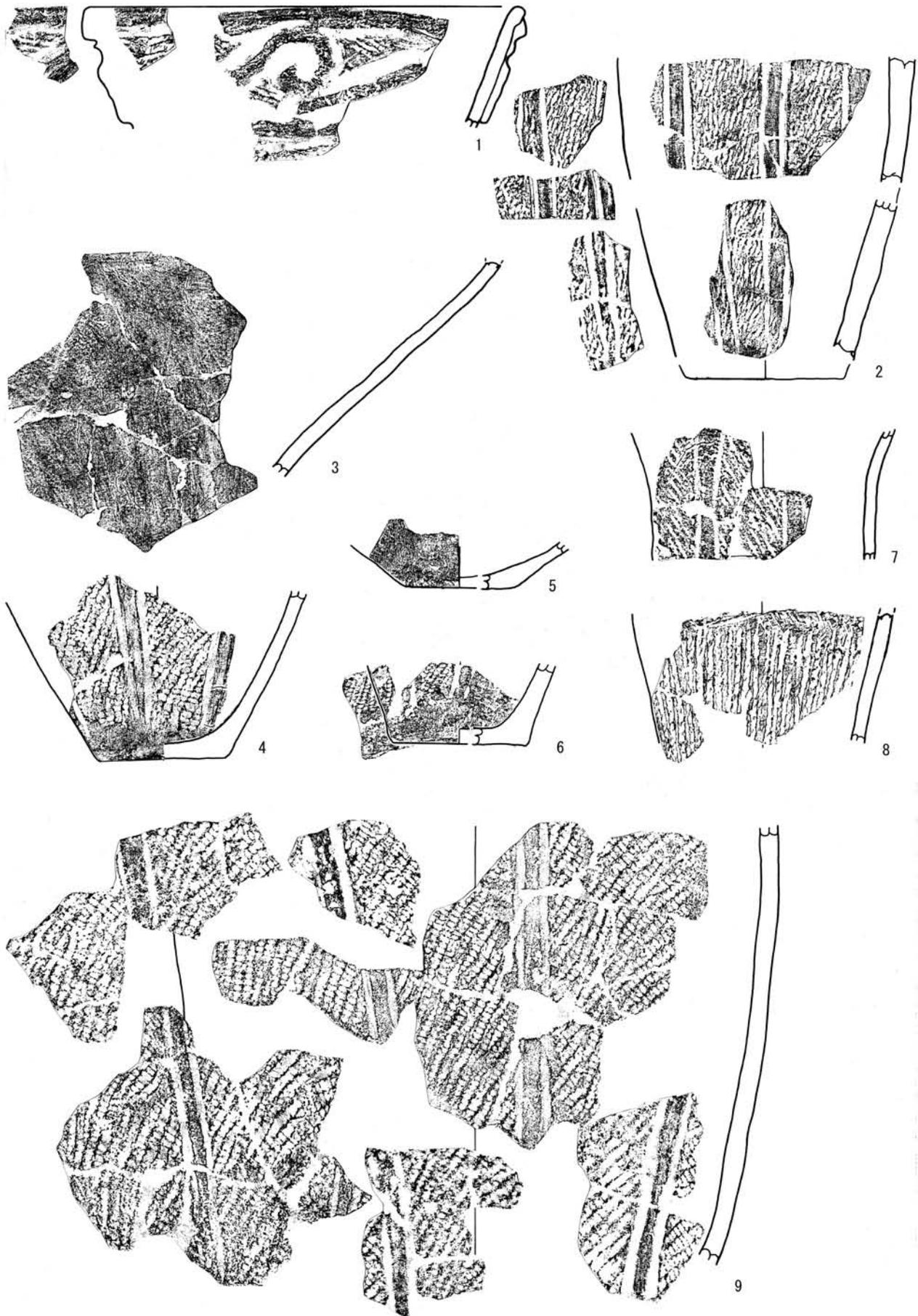
第15图 第2号住居跡出土遺物 (1)



第16図 第2号住居跡出土遺物(2)

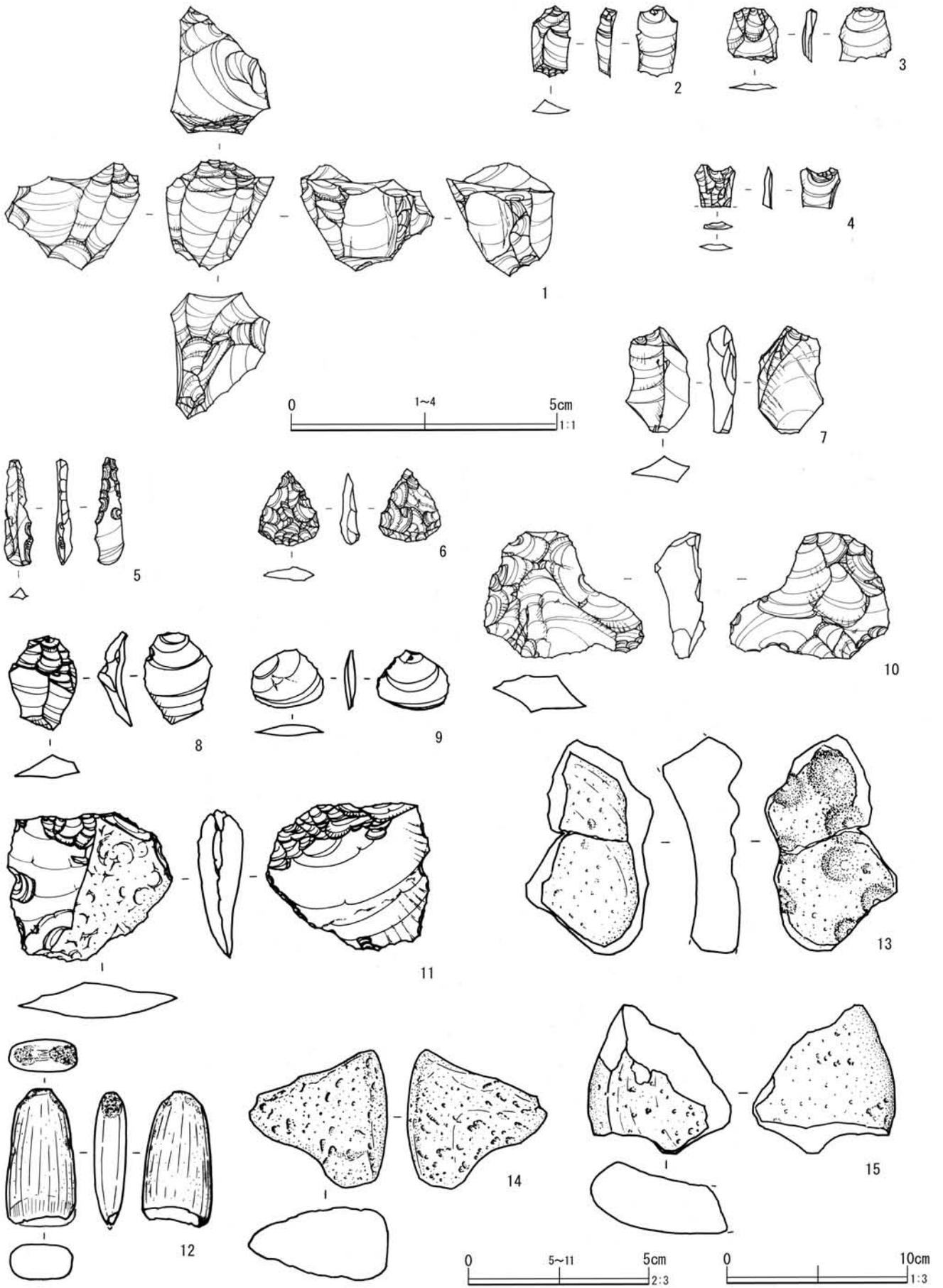
土製品 第16図20は、土器片錘である。太めの沈線を縦横に引く大振りの深鉢形土器の破片を素材とする。矢印の部分が縄掛け部であり、打欠き後明瞭な擦痕が残される。

石器 第18図1は、黒曜石製の細石核である。平面形状は三角形を呈し打面は右側からの剥離で整えられている。正面側にやや高く残っている部分があることから、数度の再生が行われた可能性が高い。剥片剥離作業は、規則的連続的に行われており、正面付近を中心に並行する数条の稜を残す。2は、黒曜石製の細石刃である。正面中央やや左側に主稜を残し、裏面には主剥離面を残す。上部には打瘤及び打瘤裂痕が観察される。先端部に裏面からの押圧剥離を加え整形している。3は、黒曜石製の二次加工剥片である。正面に2条の稜が残され裏面には主剥離面を残す。上部には打瘤が観察される。先端部に裏面からの押圧剥離を加えている。2と同様の加工方法を取り、細石刃である可能性が高いが本資料については、二次加工剥片とした。4は、黒曜石製の挟入石器で、剥片上部に両面から押圧剥離を加えたものである。裏面には主剥離を残す。5は、黒曜石製の石錐と思われ、削片状の縦長剥片の上部に両側から押圧剥離を施し、錐部を整えている。6は、黒曜石製の石鏃である。正面は周辺から不規則で粗い成形加工を施したのち、先端部と基部を中心に裏面からの押圧剥離で不規則な整形加工を施している。裏面右上部に主剥離を見ることができる。基部を中心に厚みを削ぐためとみられる剥離を施しているが細かな整形加工は施されてい



第17图 第2号住居跡出土遺物 (3)

0 10cm
1:3



第18图 第2号住居跡出土遺物(4)

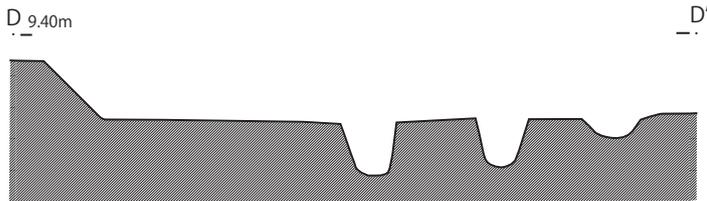
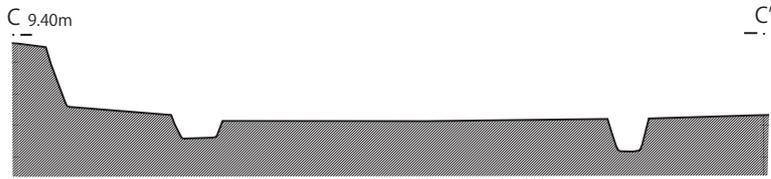
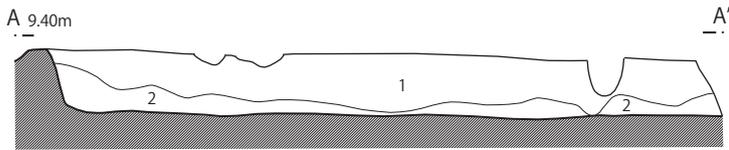
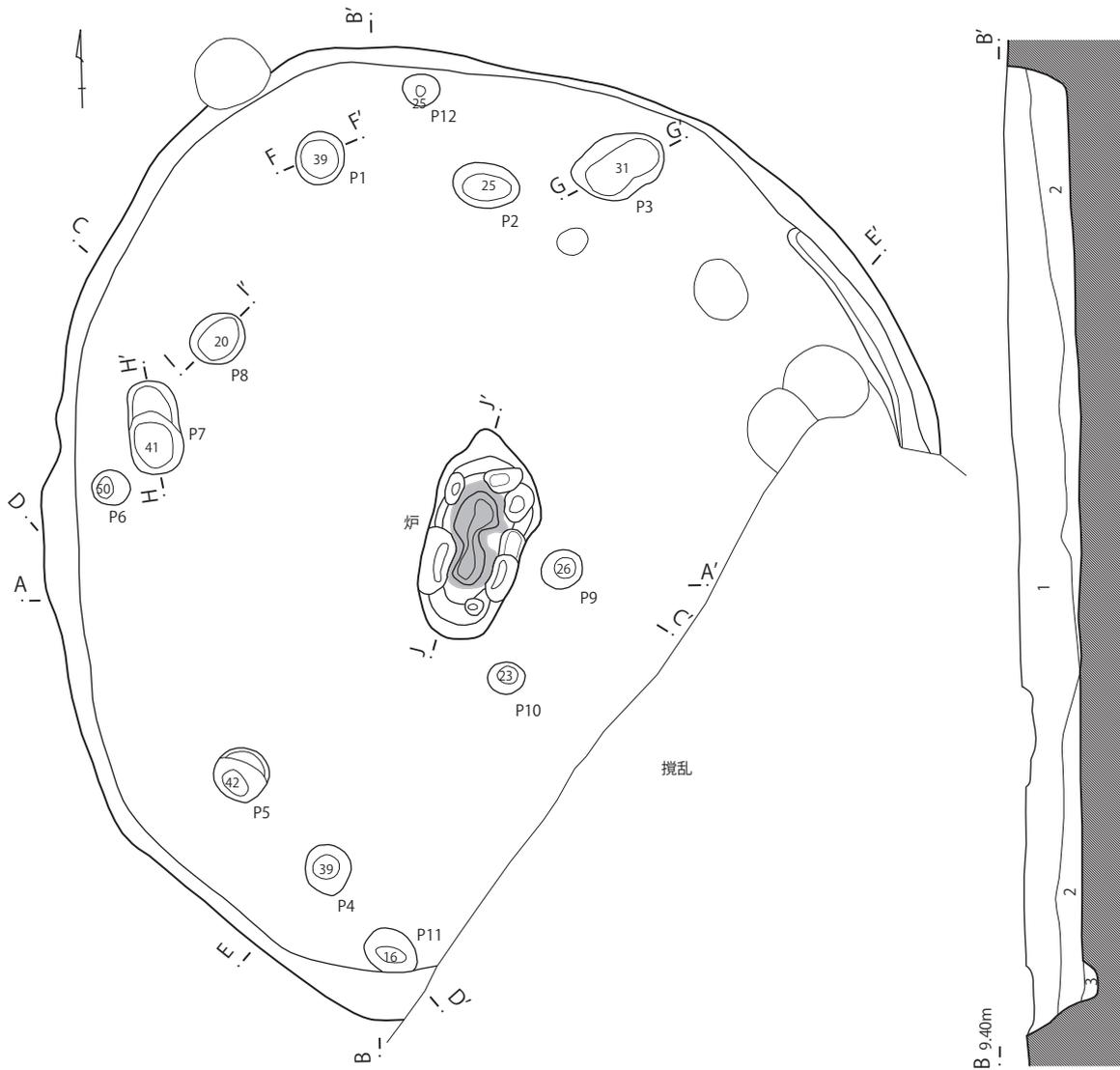
ない。7は、黒曜石製の剥片で、正面には剥片上部に打点を持つ大きな剥離痕2面を残し、先端をやや尖らせるように両側から加撃されている。裏面には、右下方向に打点を持つ主剥離と剥片上部に打点を持つ細長い剥離痕が数面観察される。8は、黒曜石製の剥片で、正面は下半部には剥片上部からの加撃による2面の剥離面と両者の間に残される稜が観察されるが、上半部にはこれより小さな剥離面が数面残される。裏面には主剥離が残される。9は、チャート製の貝殻状を呈する使用痕剥片で、正面には、剥片左上部からの加撃による剥離面が、裏面には、上部に打点を残すほか、打瘤及び打瘤裂痕が観察される。左側縁に刃こぼれ状の使用痕がみられる。10は、チャート製のスクレイパーである。厚みのある不整形剥片を素材として周辺部から脚の深い成形剥離を施す。刃部は、正面右側に細くのびた先端で、裏面から急角度の成形加工が施される。11は、赤色チャート製のスクレイパーである。転石素材で正面右側に礫表皮を残す。左側には上部に打点を持つ大きな剥離面が観察される。裏面は、上部に打点を持つ主剥離が残されるが、打瘤を剥ぐように正面側から丁寧な剥離が繰り返し施される。両側縁に細かな押圧剥離を施し刃部が形成される。12は、緑色岩製の磨製石斧である。両面とも縦位の研磨痕を留めるも極めて丁寧に仕上げられている。正面刃部付近はやや平らな面を持つように研がれている。刃部は欠損する。基部は敲打痕が残される。研磨成形後に叩かれていることから着柄段階での調整加工痕と思われる。13は、本址の炉跡出土の安山岩製の石皿残欠である。正面は石皿使用面、裏面は多孔石としての使用痕が最低8箇所確認できる。14は、三角形の軽石製品である。右側縁は明瞭な面を持つ。断面は楔状を呈し、左側が尖る。15は、本址の炉跡出土の安山岩製の石皿残欠である。使用面はよく磨られている。裏面は周辺部を面取りし正面側に反るように整形されている。比較的小振りの石皿であったものと思われ、底面側に凹み等は見られない。

第5表 第2号住居跡出土石器計測表

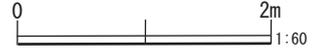
図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
18	1	2H	細石核	黒曜石	1.7	2.4	1.8	5.5	
18	2	2H	細石刃	黒曜石	1.3	0.7	0.3	0.2	
18	3	2H	二次加工剥片	黒曜石	1.0	1.0	0.2	0.2	
18	4	2H	抉入石器	黒曜石	0.8	0.7	0.2	0.1	
18	5	2H P4	石錐	黒曜石	2.9	0.8	0.5	0.6	
18	6	2H	石鏃	黒曜石	2.1	1.8	0.5	1.3	材質悪い
18	7	2H	剥片	黒曜石	3.0	1.8	0.8	2.9	
18	8	2H	剥片	黒曜石	2.6	1.9	0.7	2.0	
18	9	2H	使用痕剥片	チャート	1.7	2.0	0.3	1.0	
18	10	2H	スクレイパー	チャート	3.5	4.4	1.4	14.1	
18	11	2H	スクレイパー	赤チャート	4.0	4.4	1.2	19.4	
18	12	2H	磨製石斧	緑色岩	(7.4)	3.9	1.8	(84.5)	
18	13	2H 炉	石皿	安山岩	(13.0)	(6.8)	4.3	(265.0)	残欠
18	14	2H	軽石製品	軽石	(7.2)	(7.6)	4.0	(11.6)	
18	15	2H 炉	石皿	安山岩	(8.3)	(7.8)	3.0	(182.6)	残欠

●第3号住居跡 (第19・20・21・22・23・24図)

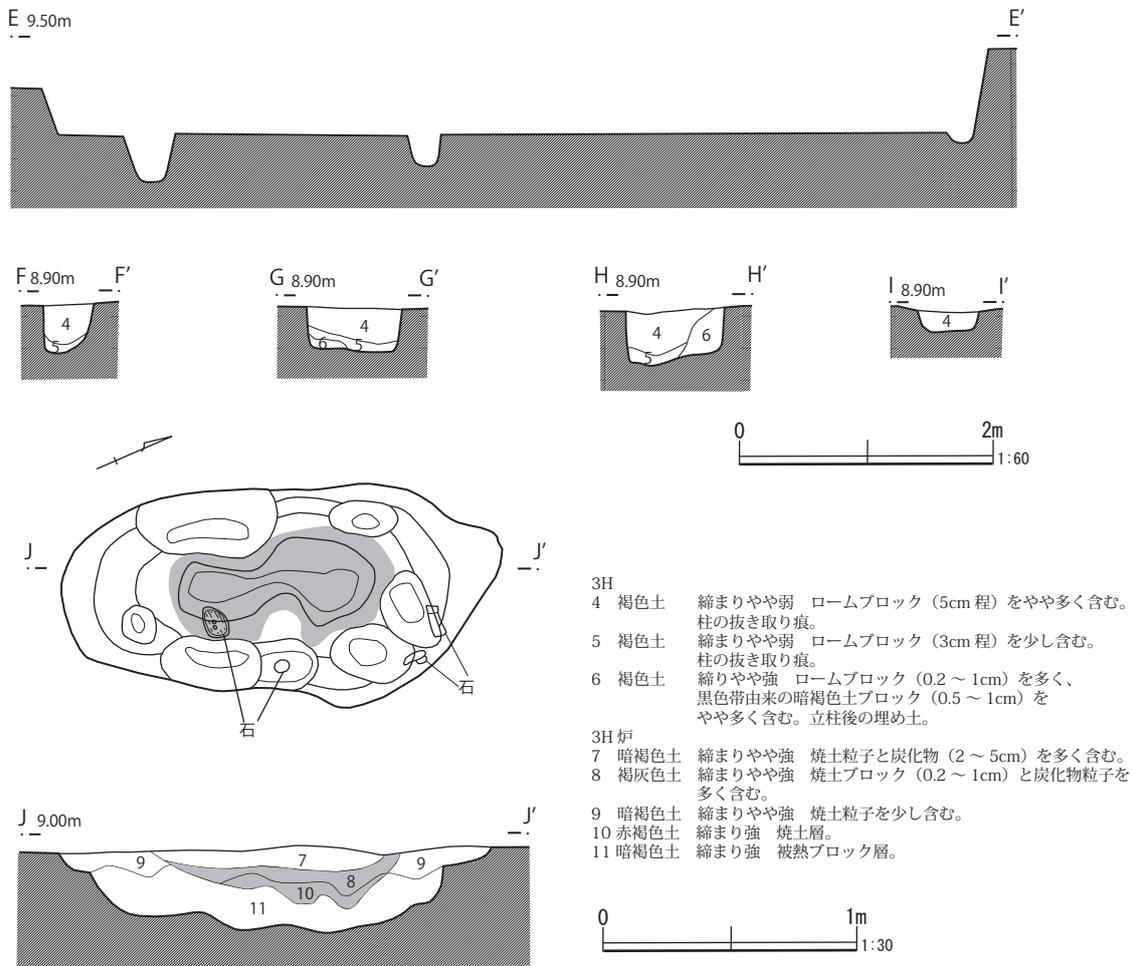
E3・4・F3グリッドに位置し、第21号土坑を切り、南東部は攪乱によって切られる。南東部を切られているため不確定な部分もあるが、検出部分から平面形は長径約8m、短径約7.5mの不整形円形を呈すものと推定される。確認面から床面までの深さは約0.5mであった。P1・3・4・7と南東部に存在したであろう支柱穴2基を加えた6本柱の住居が想定される。P7については、建て替えのためか、柱を動かした痕跡がある。東の壁際に幅0.1～0.2mの溝跡が認められ、壁溝の可能性も考えられる。



- 3H
 1 暗褐色土 縮まり強 ロームブロック (1~3cm) を多く、
 焼土粒子と炭化物粒子を
 少し含む。埋め戻し土。
 2 暗褐色土 縮まり強 焼土粒子を
 やや多く、ロームブロック
 (1~3cm) を少し含む。
 3 暗褐色土 縮まり強 ローム粒子と
 炭化物粒子をやや多く含む。



第19図 第3号住居跡

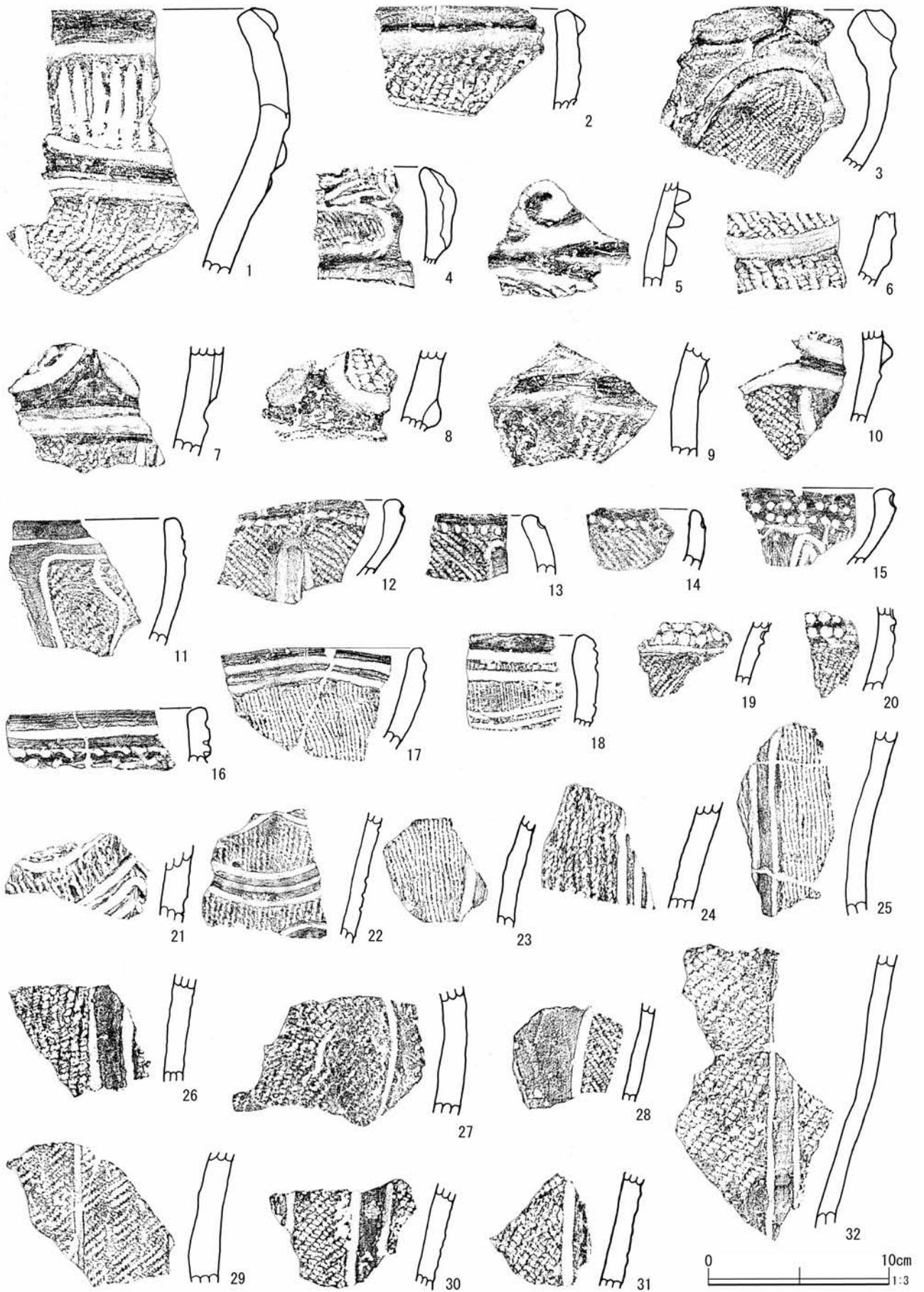


第20図 第3号住居跡炉

炉跡は住居のほぼ中央に位置し、平面形は直径約1.7m、短径約0.9mの楕円形を呈す。炉跡の中央部は被熱を受けたローム層が硬く縮まっていた。第2号住居跡と同様に、炉跡の外縁には石の抜き取り痕跡が認められ、本来、炉枠として円礫を配した石囲炉であったものと考えられる。炉枠の石の残欠か、炉内の第20図の位置から石が検出された。抜き取り痕から推定される礫の形状は、直径0.3~0.5m、短径0.2~0.3mの楕円形を呈すものと思われる。

出土遺物 (第21・22・23・24図)

土器 第21図1は、大振りのキャリパー形深鉢の口縁部資料で、沈線で縁取られた丈の低い隆帯で長楕円形の枠状区画を持つものである。区画内は縦位の沈線が充填される。頸部以下は単節 RL 縄文を縦位施文している。2は、口唇外縁に断面三角形の隆帯を持つ平縁土器で、破片下端に沈線の痕跡が認められる。3は、口縁部に微隆帯で画された無文帯を持つ緩波状縁深鉢で、波頂部に摘み上げたような突起を持ち、これを起点に微隆帯で縁取られた磨消文帯が下向きに開きながら垂下する。いわゆる岩坪類型といわれる一群である。4は、わずかに内湾する平縁土器で、丈の高い隆帯に縁取られた長楕円形の枠状区画が看取される。区画内には無節縄文が充填される。5~10は、口縁部文様帯下端区画となる隆帯や沈線の観察される土器である。5は、丈の高い隆帯を用いた渦巻文や口縁部文様帯区画線などが観察されるもの、6は、枠状区画の下端の沈線と隆帯が観察され、隆帯上まで縄文が施される。11は、わずかに内湾する平縁深鉢で、口縁部に幅狭の無文帯を置き口縁部から胴部を貫くように下開きの長方形区画を連ねる構造で、区画内には単節縄文が充填され、中央には蛇行沈線が垂下する。12・13は、単節縄文が施される口縁部以下の文様帯を貫くように、細長い「∩」状の磨消文がみられるものである。前者は、幅狭の口縁部無文帯下端を押し引き刺突列で区画し、後者は円形



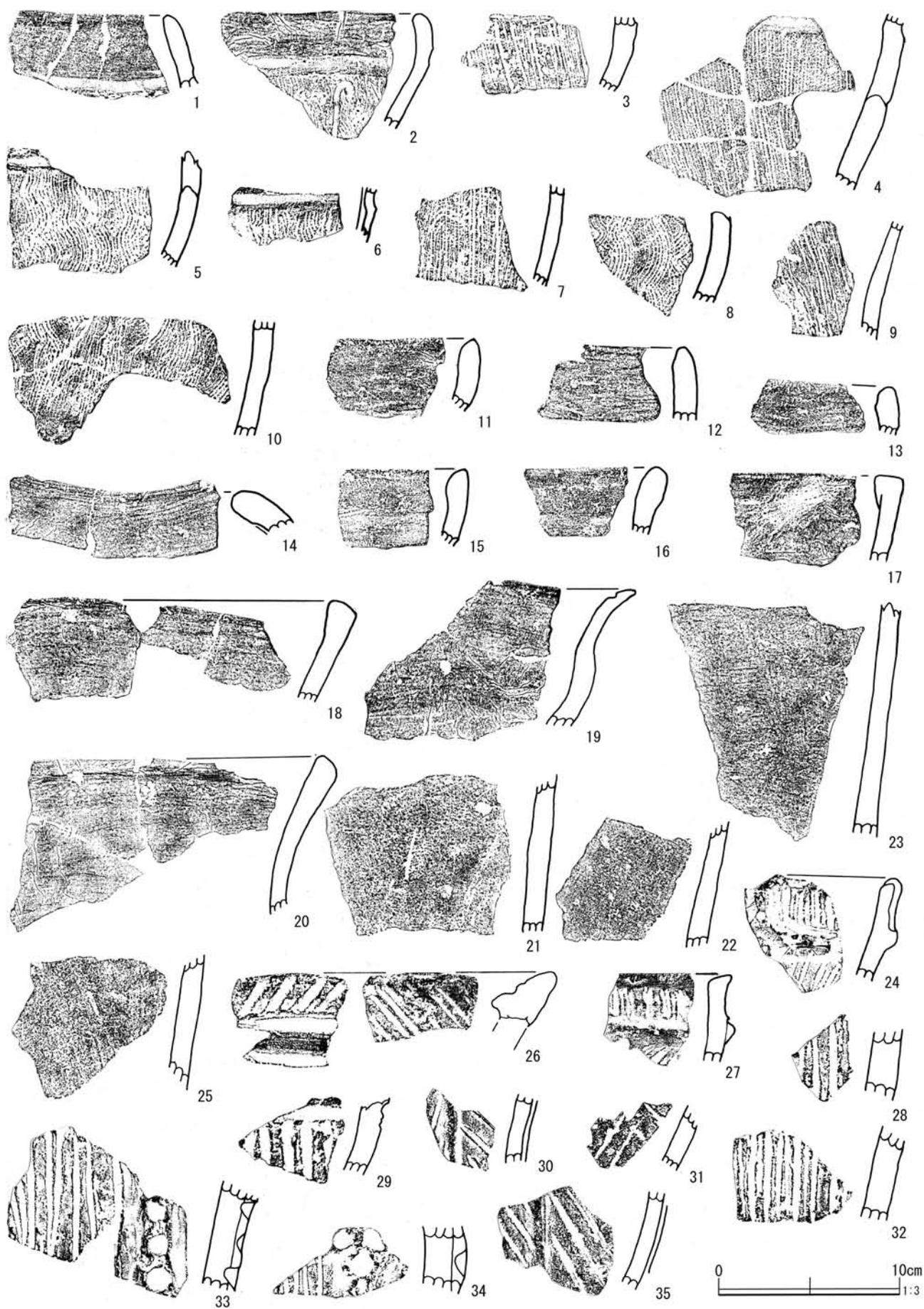
第21图 第3号住居跡出土遺物 (1)

刺突列で区画する。14は、口縁部に円形刺突列を持つ縄文施文の口縁部、15は、2条の円形刺突列の下が条線文となり、2重の沈線で「∩」状モチーフが描出されるものである。16は、半截竹管によるコンパス文風の押し引き文のみられる口縁部資料である。17・18は、いわゆる連弧文土器の口縁部資料で、2条の横走沈線で口縁部文様带上端を区画する。前者は緩波状縁で、以下に撚糸文の施されるもの、後者は、平縁で条線文が施された上から連弧文が描かれる。19・20は、横走る2条の円形刺突列のみられる口縁部付近と思われる資料である。21・22は、連弧文のみられる胴部資料である。両者とも地文に撚糸文を持ち、3本1組の沈線で弧線を引く。23～32は、垂下沈線または垂下する磨消文帯のみられる胴部資料である。23～25は、撚糸文を地文とする。27はやや左側に湾曲しながら沈線が垂下する。28は、「∩」状モチーフ内に縄文が充填されるものかもしれない。

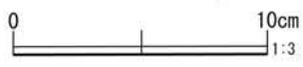
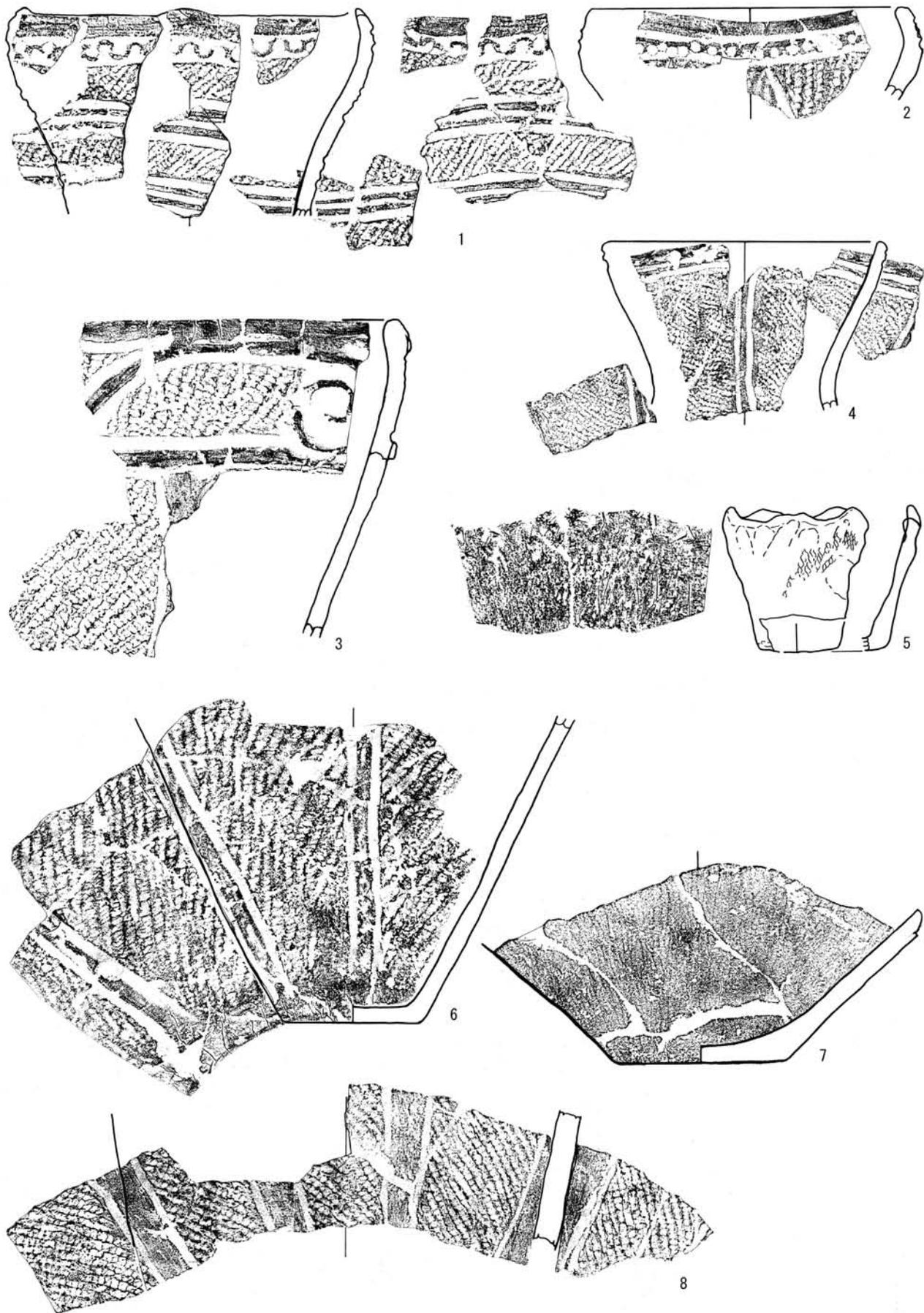
第22図1～6は、内湾する口縁部を持つ浅鉢形土器の口縁部付近の資料である。1・2は、内湾する口縁部無文帯下端を1条の沈線で画し、以下に櫛状施文具による蛇行条線を施すものである。2では、垂下するステッキ状沈線がみられる。3～6は口縁部を欠くが無文の口縁部を持つものと思われる。8～10は、この一群の胴部資料と思われ、櫛状施文具による条線文がみられる。11～20は、無文の口縁部資料を一括した。14は、強く内湾するもの、17は、内側に折込む特徴的な口縁部形態をとる。18・20は、外反する大振りの浅鉢となるものと思われる。19は、緩波状を呈する浅鉢と思われ、口縁部内面に幅の広い沈線を持つ。21～23・25は、無文の胴部資料である。24・27は、口縁部に長方形の隆帯区画を持ち、内部に半截竹管による縦位の並行沈線を充填するものである。26は、曾利式の斜行沈線文系土器群の系譜を引くものと思われ、面を持つ口唇部内面に2条の沈線と刻み風に付けられた短沈線がみられる。外面は、斜行する並行沈線文となる。28・29・32は、彫りの深い縦位の沈線の施されるもので、29では、破片上端に横走沈線がみられる。30・35は、器面を垂下する丈の低い隆帯とその両側に斜行するシャープな沈線が観察される。31は、斜格子の施される胴部資料である。33・34は、垂下する鎖状隆帯と縦位の集合沈線のみられる曾利式系譜の胴部資料である。

第23図1は推定口径20cm、残存高12cmほどの小ぶりの平縁深鉢である。口縁部には4単位の山状の小突起を持ちわずかに内湾する。2cmほどの口縁部無文帯の下端を交互刺突列で締め、単節縄文地文上に3本1組の横走沈線帯が2帯観察される。沈線帯内は磨り消される。連弧文土器の系譜上に位置するものと思われる。2は、推定口径17cm、残存高6cmのキャリパー形深鉢の口縁部資料である。2条の沈線に縁取られた円形刺突列と、条が縦位に立つように斜位回転させた単節縄文の地文上に施された斜行沈線とを見ることができる。3は、大振りの平縁深鉢の口縁部から胴上位にかけての破片資料である。口縁部には、隆帯によるよく巻かれた渦巻文と、そこから派生し文様帯を斜に切る隆帯とを観察できる。隆帯は、幅の広い沈線でなぞられる。地文は単節LR縄文の横位施文である。4は、推定口径15cm、残存高10cmほどの小ぶりの平縁深鉢形土器のものである。よく撫でられた口縁部に2条の沈線を引き、これを起点とする2条の垂下沈線が4単位で器面を分割するものと思われる。あるいは、この分割軸に合わせて小突起が配された可能性もある。5は、口径7cm、器高8cmほどのミニチュア土器である。口縁部は緩い5単位の波状を呈し、器面には指痕を残すとともに、散漫な単節縄文の痕跡を留める。6は、残存部最大径24cm、残存高17cm、底径8cmを測る深鉢形土器の胴下半部資料である。2条の沈線に縁取られた磨消文帯が垂下する資料で、地文は単節RL縄文の縦位施文である。7は、無文の浅鉢形土器の底部資料である。残存部最大径24cm、底径9cm、残存高11cmを測る。器面は丁寧な縦位の撫で整形が加えられる。8は、6などと同様に、2条の沈線に縁取られた磨消文帯が垂下する深鉢形土器の胴部資料で、地文には単節LR縄文が縦位に施文される。

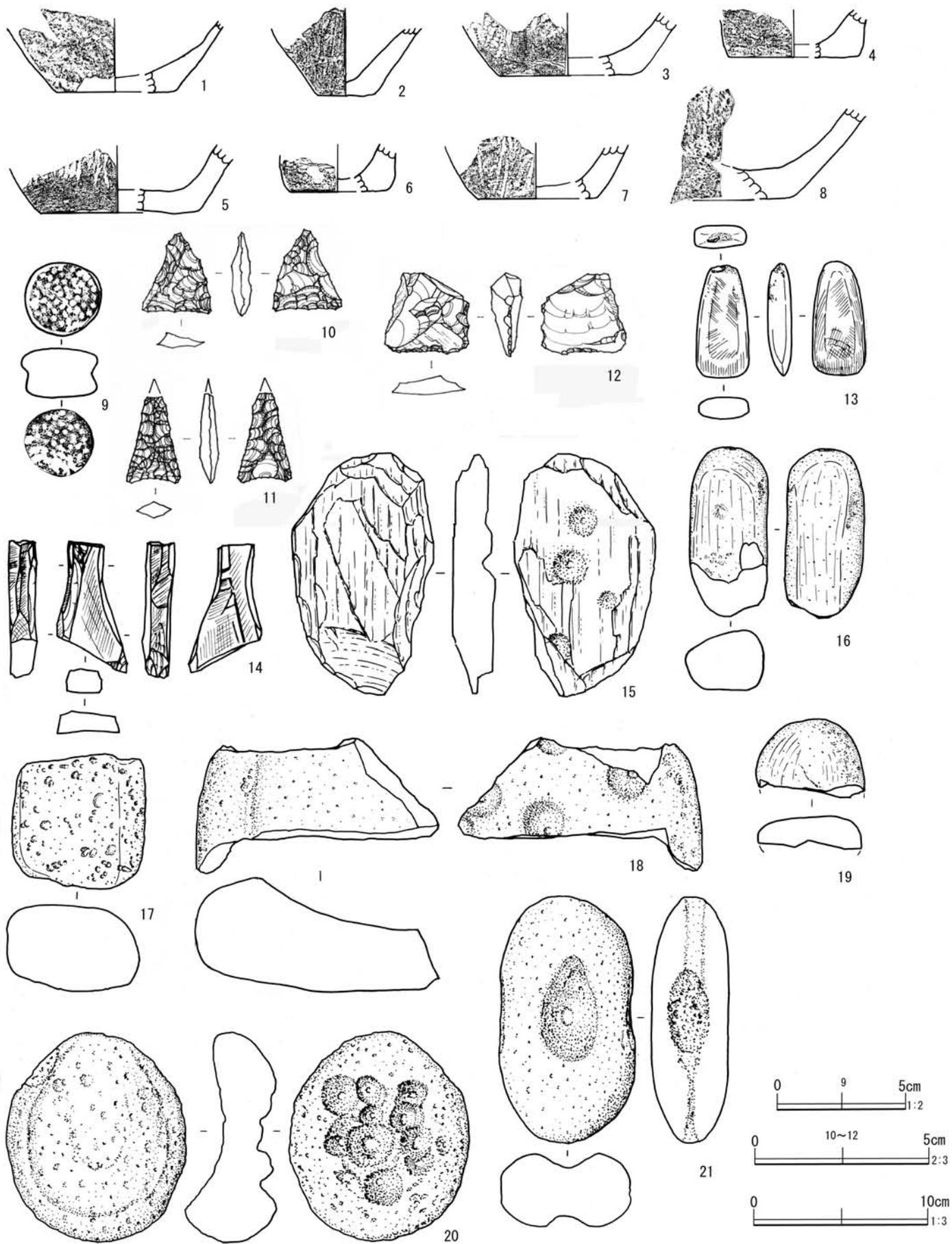
第24図1～8は、本址出土の底部資料を一括した。1は、推定底径7cm、残存高4cmを測る無文の資料、2は、



第22图 第3号住居跡出土遺物(2)



第23图 第3号住居跡出土遺物(3)



第24图 第3号住居跡出土遺物(4)

底径3.2cm、残存高5cmを測る無文の資料、丁寧な縦位の撫でが観察される。3は、推定底径8cm、残存高4cmを測るもので、垂下沈線と単節縄文とを観察することができる。4は、推定底径8cm、残存高3cmを測るもので、横位の撫で整形が施される。5は、推定底径9cm、残存高4cmを測るもので、底面外周を丁寧に横撫でしている。地文は撚糸文である。6は、推定底径6cm、残存高3cmを測る直立傾向の高い資料、7は、推定底径7cm、残存高4cmを測るもので、縦位の沈線文が観察される。8は、比較的大振りの資料で縦位のミミズ腫れ状の微隆帯がみられる。

土製品 第24図9は、糸巻形の耳栓である。上面側で直径2.9cm、下面側で2.6cm、厚さ1.8cmを測る。両面に細い棒状施文による多数の刺突が施される。胎土は洗練された緻密な粘土が使われる。

石器 第24図10・11は、石鏃である。前者はチャート製の平基無茎石鏃である。左右の側縁の反り具合が異なることや押圧剥離による調整加工の状態から未製品である可能性もある。11は、赤色のチャート製の細身の無茎石鏃で、先端部をわずかに欠く。両側縁とも表裏から規則的で丁寧な整形加工を施すものである。基部は、わずかに抉られる。12は、チャート製のスクレイパーである。厚みのあるやや縦長の剥片を素材とし、左側縁に礫表皮を、刃部には節離面を残す。裏面には上部からの加撃による主剥離面を残し、打瘤は除去されている。整形加工は押圧剥離による細かいもので、正面下端とほぼ直角に折れる右側縁とに施される。縦断面は楔形を呈する。13は、緑色岩製の磨製石斧である。比較的小型で細身の資料で表裏両面とも中央部に面を持つように薄く仕上げられている。刃部は両端に丸みを持つものの直刃となり、主軸方向の研磨を受けている。基端部から右側縁上部にかけて敲打痕が残され、着柄の痕跡と思われる。14は、不正三角形の砥石と思われる資料である。上部が細く下部が広がる扁平な形状をとる。15は、緑泥片岩製の凹石である。板状の素材の裏面に4箇所凹みが観察される。正面下端に緩やかな磨面が見られることから、欠損した石皿を整形し凹石としたものと思われる。16は、硬砂岩製の敲石である。長楕円形の転石を用い、使用は正面上部と欠損する下部のほか上端面に及ぶ。17は、用途不明の軽石製品である。方形に整えられ、表裏には不安定ながら面を持つ。18は、安山岩製の石皿の残欠である。正面は石皿としての使用面で、磨面中央付近では、素材の厚みの半分ほどまで磨っている裏面には少なくとも4箇所の凹みが観察される。19は、硬砂岩製の敲石の残欠である。使用は、右上部から側縁にかけてである。20は、安山岩製の石皿である。長軸12cm、幅10cmで、石皿としては最も小さい部類に属すものと思われる。磨面は、素材礫の周囲を2cmほど残し前面に及ぶが、正面上部は磨り落とされ、片口状となる。裏面は、少なくとも10箇所の凹みが見られ、凹石としての使用も進んでいる。21は、磨石兼凹石である。安山岩製で、長楕円形で扁平な自然礫を素材とし、面取り整形を施す。磨石としての使用、凹石としての使用とも表裏両面に及び、両側面には敲打痕が見られる。

第6表 第3号住居跡出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
24	10	3H	石鏃	チャート	2.3	2.0	0.5	1.9	
24	11	3H	石鏃	赤チャート	(2.5)	1.6	0.6	1.6	
24	12	3H	スクレイパー	チャート	2.3	2.4	1.0	4.5	
24	13	3H	磨製石斧	緑色岩	6.5	3.1	1.4	47.2	
24	14	3H	不明石製品	泥岩	3.3	1.9	0.9	5.8	砥石か
24	15	3H	凹石	緑泥片岩	14.1	8.1	2.5	334.0	
24	16	3H	敲石	硬砂岩	(9.7)	4.5	3.5	220.0	
24	17	3H	軽石製品	軽石	7.9	7.7	5.0	38.6	
24	18	3H	石皿	安山岩	(6.6)	13.9	5.9	(550.0)	残欠
24	19	3H	敲石	硬砂岩	(4.3)	6.1	(1.9)	(64.3)	残欠
24	20	3H	石皿	安山岩	12.0	10.2	5.2	435.0	
24	21	3H	磨石兼凹石	安山岩	14.3	7.8	4.4	660.0	

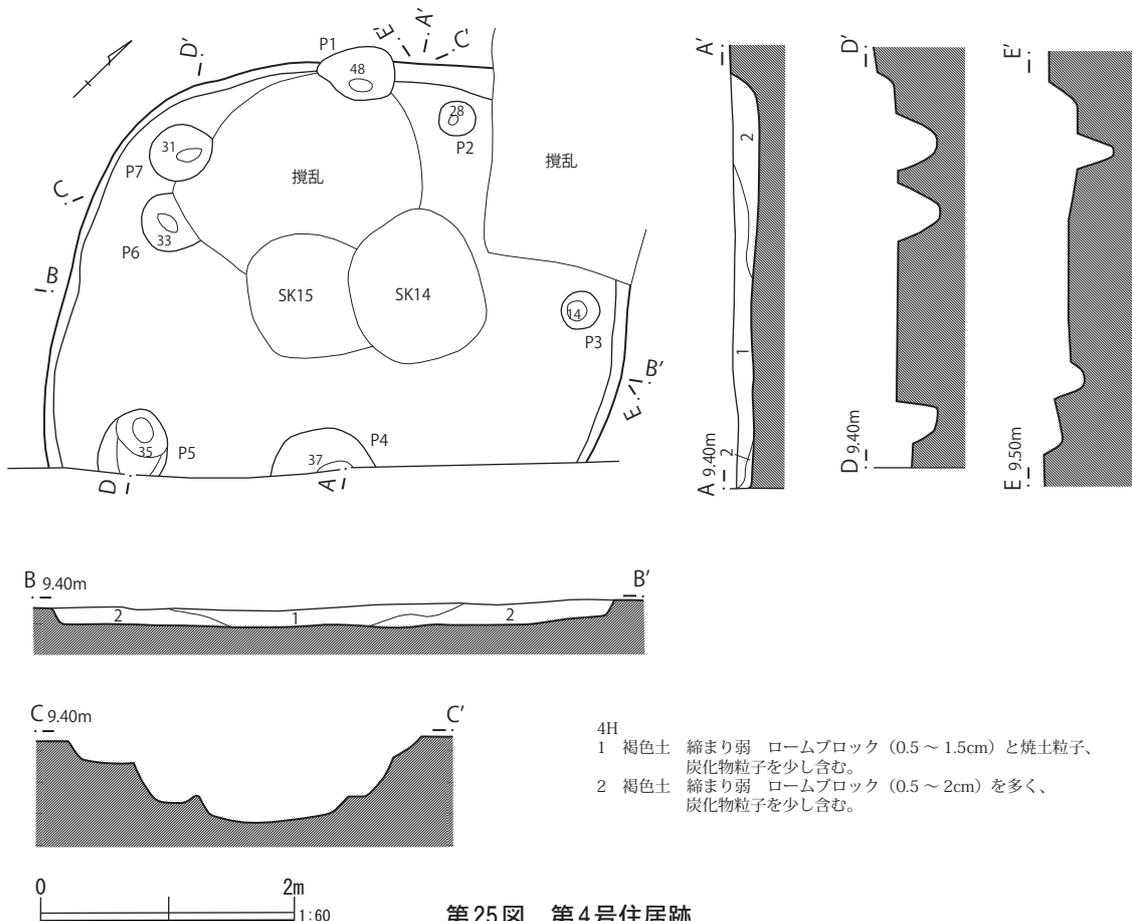
●第4号住居跡（第25・26図）

H3・4グリッドに位置し、南半部は調査区外である。第14・15号土坑と攪乱に切られる。検出部分から平面形は直径約4.5mの円形を呈すものと推定される。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。柱穴を7基検出したが、炉跡の痕跡は認められなかった。

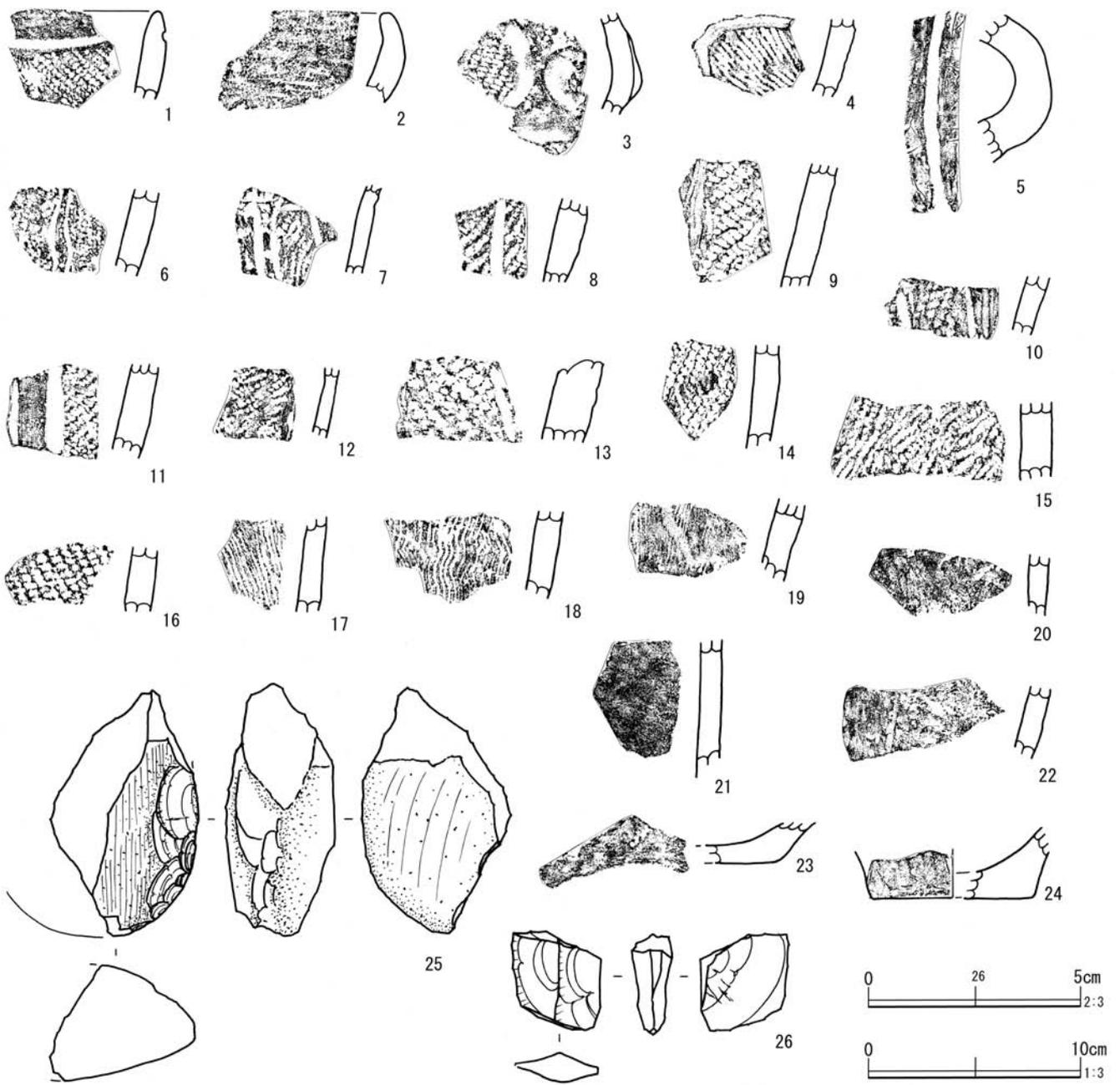
出土遺物（第26図）

土器 1は、口縁部外縁に1条の沈線の引かれる口縁部資料である。地文は単節LR縄文である。沈線がわずかに上方に湾曲していることから緩波状縁となる可能性がある。2は、内湾傾向を示す無文の平縁土器である。3は、キャリパー形深鉢の口縁部付近の資料である。渦巻文と単節縄文の充填された楕円形の枠状区画を隔てる低平な隆帯が観察できる。4は、無節縄文の充填された沈線区画の見られる胴部資料である。5は、1条の沈線の引かれた橋状把手である。6～13は、縄文地文上に垂下沈線の観察される胴部資料を一括した。6では、蛇行気味の並行沈線が、7では、下開きの「∩」状沈線と垂下する蕨手文が観察される。11では、2条の沈線に縁取られた磨消文帯が垂下する。14～16は単節縄文の施される胴部資料である。17～19は、櫛状施文具による条線文の見られるもの、18は、施文具を蛇行させながら施文している。20～22は、無文の胴部資料である。23・24は、底部資料である。両者とも無文で、後者は推定底径8cm、残存高3cmである。

石器 25は、硬砂岩製の磨製石斧残欠である。円刃を呈したものとわれ、側縁部は成形剥離を加えたのち研磨整形している。26は、ガラス質黒色安山岩製の剥片である。横長の剥片に切断を加えている。



第25図 第4号住居跡



第26図 第4号住居跡出土遺物

第7表 第4号住居跡出土石器計測表

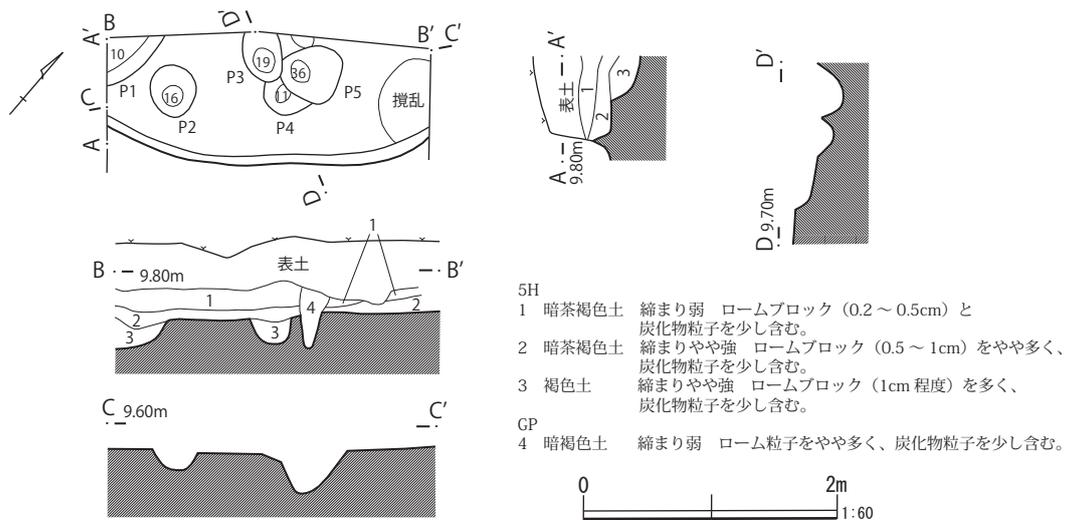
図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
26	25	4H	磨製石斧	硬砂岩	(5.5)	(3.5)	(2.6)	(41.4)	刃部残欠
26	26	4H	剥片	ガラス質黒色安山岩	2.1	2.1	1.0	4.1	

●第5号住居跡 (第27・28図)

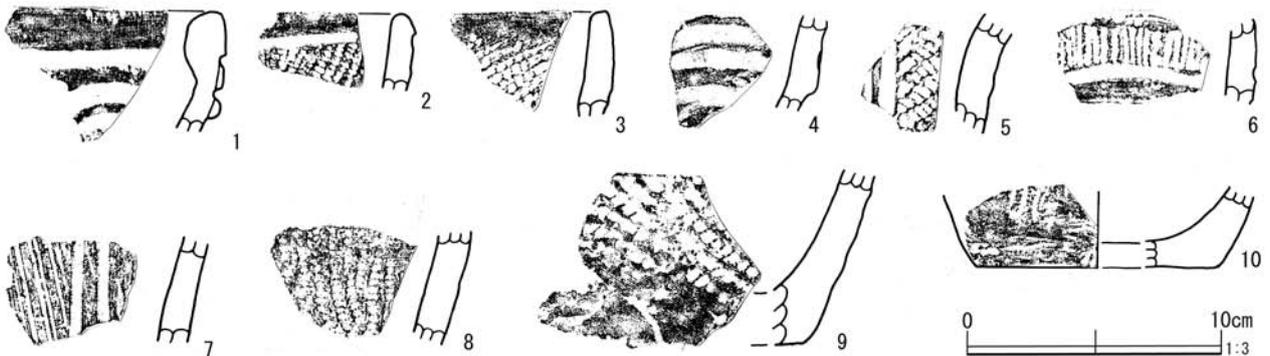
F1グリッドに位置し、調査区の隅で一部のみ検出された。検出部分のみで長径約2.5m、短径約1mを測る。確認面から床面までの深さは約0.3mであった。柱穴を5基検出したが、炉跡の痕跡は認められなかった。

出土遺物 (第28図)

土器 1は、キャリパー形深鉢の口縁部資料である。太目の隆帯とこれをなぞるような沈線とで渦巻文を描出すると思われるものである。2は、口縁部に1条の沈線を引く平縁深鉢である。沈線以下は単節縄文が施される。3は、単節LR縄文を施す平縁土器である。4は、指でなぞったような太目の浅い沈線3条が観察される資料である。沈線間は隆带状に盛り上がる。5は、2条の沈線に縁取られた磨消文帯が垂下する胴部資料である。地文は単節RL縄文縦位施文である。6は、深鉢形土器の口縁部資料と思われ、上下を沈線で区画した細長い横長区画内に縦位の集合沈線が充填されるものである。7は、2条の沈線に縁取られた磨消文帯が垂下する胴部資料で、地文には櫛状施文具による条線文が施される。8は、単節縄文の施された胴部資料である。9・10は、本址出土の底部資料である。9は、大振りの底部で地文に単節LR縄文を縦位に施文している。底面直上は横位の撫で整形である。10は、推定底径10cm、残存高4cmほどの平底の資料で、横位成形された器面に縦位の沈線3本が観察できる。



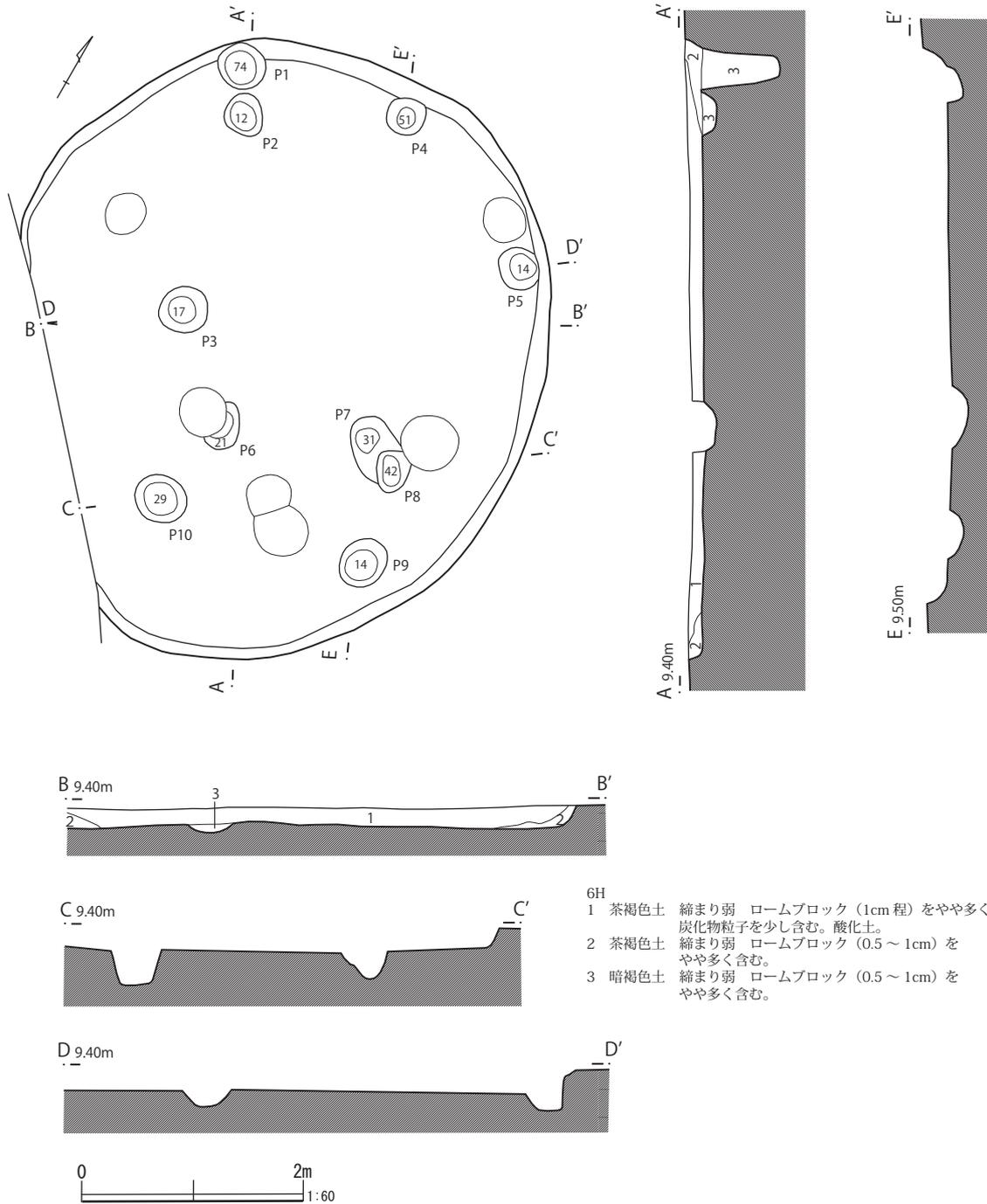
第27図 第5号住居跡



第28図 第5号住居跡出土遺物

●第6号住居跡 (第29・30図)

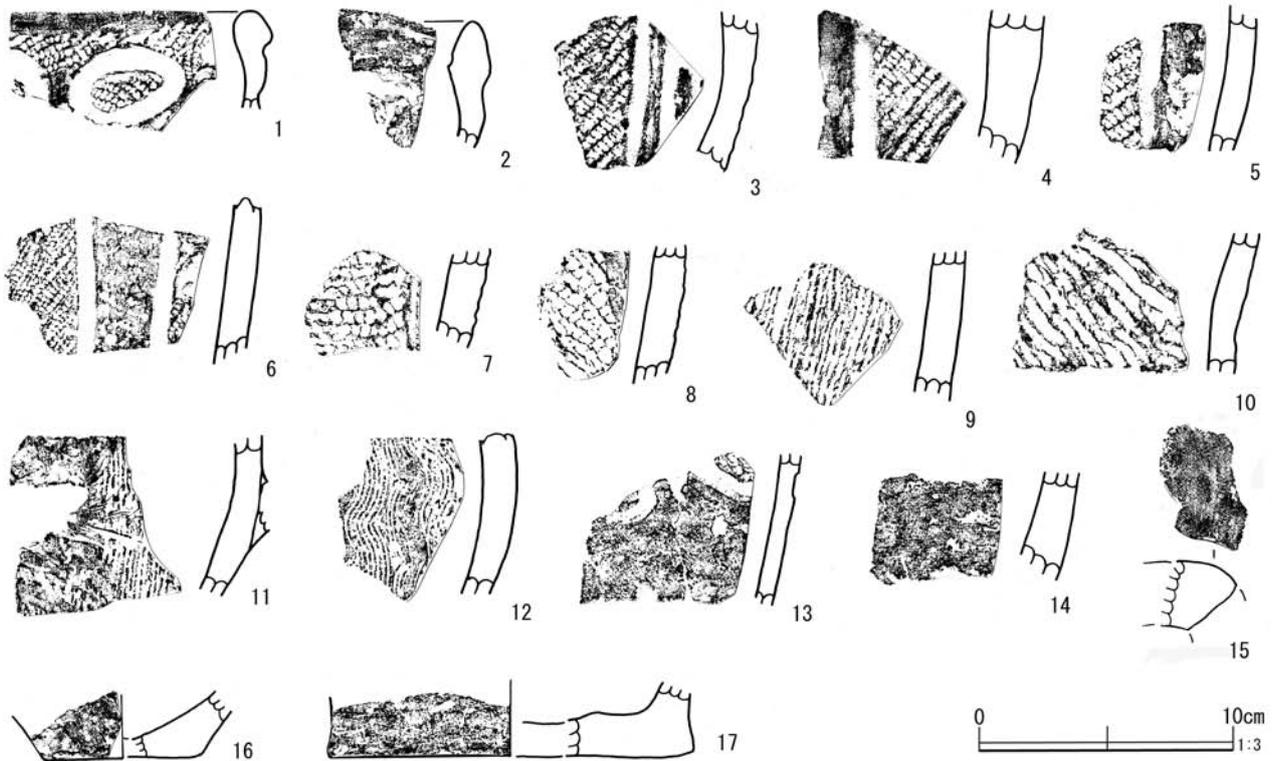
F3・4・G3・4グリッドに位置し、南隅は調査区外である。南隅を切られているため不確定な部分もあるが、検出部分から平面形は長径約5.5m、短径約5mの不整形形を呈すものと推定される。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。柱穴を10基検出したが、炉跡の痕跡は認められなかった。



第29図 第6号住居跡

出土遺物 (第30図)

土器 1・2は、キャリパー形深鉢の口縁部資料で、前者は、縄文の充填された楕円文がうかがわれる。左側に長楕円区画が連なるものと思われる。2は、低い山状突起が付されるものと思われる。3～7は、2条の沈線に縁取られた磨消文帯が垂下する胴部資料である。8も類似の資料と思われる。9は、条線文の施された胴部資料で、破片左側にやや左傾した沈線が垂下するようである。10は、撚り戻し縄文の施された胴部資料である。11は、櫛状施文具による条線文の施される資料で、橋状把手の痕跡が認められる。12は、蛇行する条線文の施された胴部資料である。13は、縄文の充填された楕円区画となんらかのモチーフを描くと思われる鉤の手状の沈線が観察される資料である。14は、無文の胴部資料、15は、無文の器台形土器の一部であろう。16は、推定底径6cm、残存高3cmを測る無文の底部資料である。17は、推定底径14.5cm、残存高3cmを測る大振り無文の底部資料である。

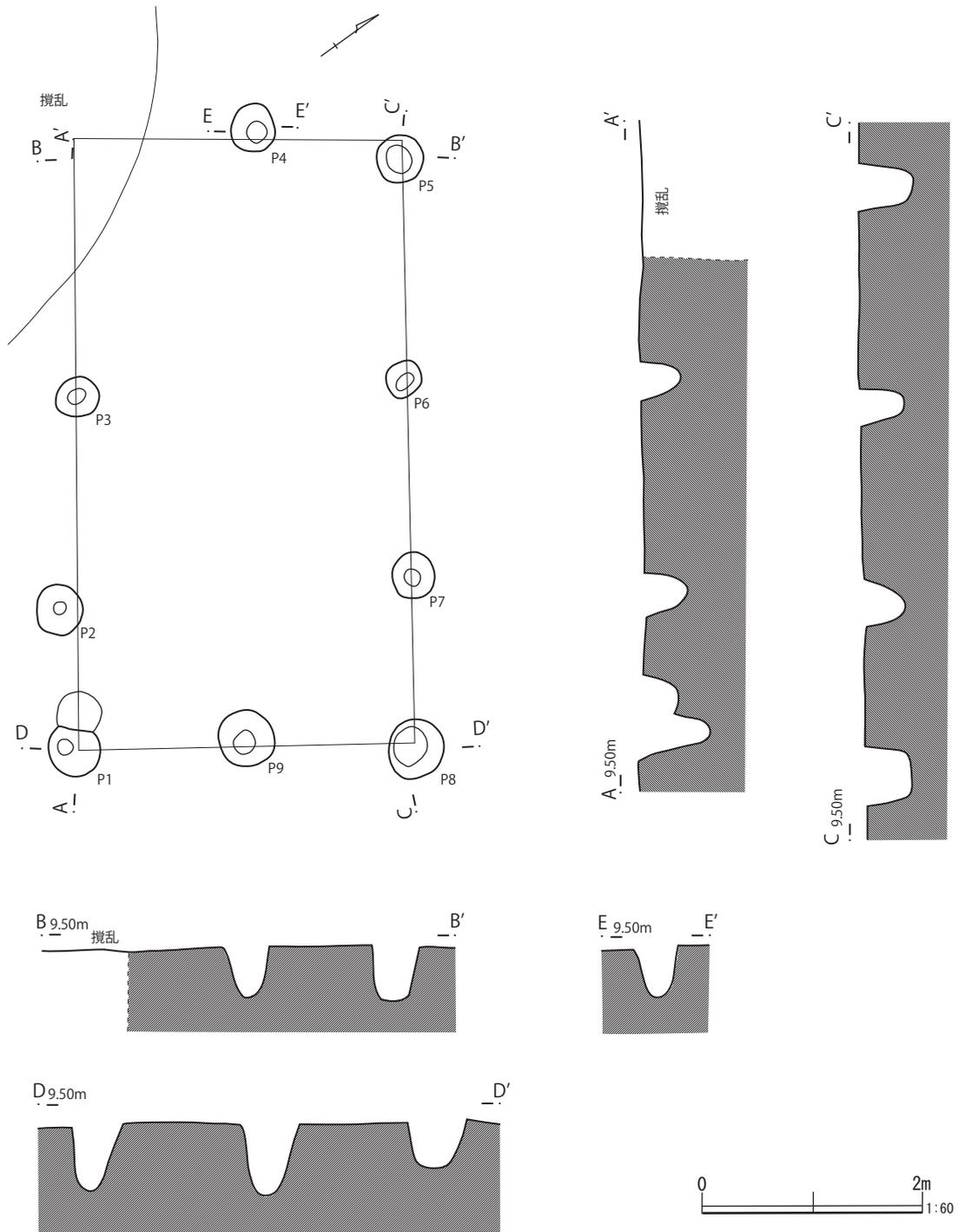


第30図 第6号住居跡出土遺物

(2) 掘立柱建物跡

●第1号掘立柱建物跡 (第31図)

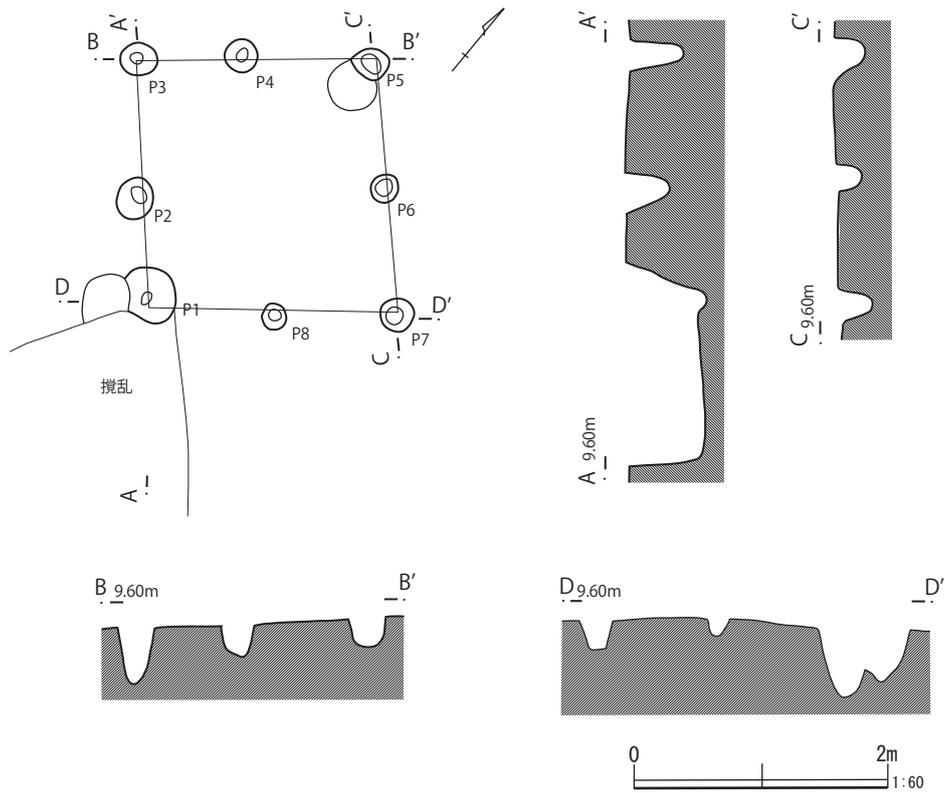
F3・4・G3・4グリッドに位置する。西隅の攪乱を受けた位置に、もう1基の柱穴が存在していた可能性が高い。桁行3間、梁行2間の側柱建物で、主軸方位はN—55°—Wを指す。桁行約5.5m、梁行約3.2mを測る。柱穴の規模は第8表のとおりである。



第31図 第1号掘立柱建物跡

●第2号掘立柱建物跡 (第32図)

E3・F2・3グリッドに位置する。建物南寄りの部分は攪乱を受ける。桁行2間、梁行2間の側柱建物で、主軸方位はN—45°—Wを指す。桁行約2m、梁行約1.9mを測る。柱穴の規模は第8表のとおりである。



第32図 第2号掘立柱建物跡

第8表 赤砂利遺跡（第5地点）掘立柱建物跡ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
SB1 P1	48	(42)	62	SB2 P1	70	(54)	91
SB1 P2	44	42	37	SB2 P2	52	40	51
SB1 P3	40	36	36	SB2 P3	44	38	57
SB1 P4	44	40	46	SB2 P4	40	38	38
SB1 P5	44	42	50	SB2 P5	(36)	28	37
SB1 P6	36	30	41	SB2 P6	34	32	27
SB1 P7	42	36	37	SB2 P7	40	40	34
SB1 P8	56	48	42	SB2 P8	32	28	22
SB1 P9	52	50	66				

※単位は全てcm

(3) 土坑

●第1号土坑（第33・34図）

F1・2グリッドに位置し、第1号住居跡を切り、攪乱に切られる。平面形は長径約2.3m、短径約1.1mの長方形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第34図1・2）

土器 1・2は、加曾利E式土器の胴部資料で、前者は磨消文帯と縄文帯とを画す垂下沈線が観察されるもの、後者は、2条の垂下沈線の末端が看取されるものである。

●第2号土坑（第33・34図）

F1グリッドに位置する。平面形は長径約1m、短径約0.9mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mであるが、遺構の底面中央付近に円形の掘り込みが認められ、その底面までの深さは約0.4mを測る。

出土遺物（第34図3～9）

土器 3は、キャリパー形深鉢の口縁部資料である。口縁外縁に幅のある隆帯を貼り下端を沈線で撫でつけている。以下が剥落しているが、隆帯による杵状区画等が描かれたものであろう。4は、無文の平縁土器、5は、隆帯の上下をよく撫で断面が三角形になるよう仕上げられたものである。6～9は胴部資料で、6は、無節縄文が施された破片右端に垂下沈線を見ることができるもの、7は、磨消文帯と縄文帯とを画す垂下沈線が観察されるもの、8は、縦位の条線文が観察されるもの、9は無文となるものである。

●第3号土坑（第33図）

G2グリッドに位置し、第4号溝跡を切る。平面形は長径約1m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第4号土坑（第33・34図）

G2・3グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第34図10～15）

土器 10・11は、内湾傾向を示す平縁深鉢の口縁部資料で、前者は、太目の沈線で楕円形の杵状区画となる弧線が認められるもの、後者は、隆帯とこれを撫で付ける太目の沈線で杵状区画などが描かれる大振りの資料である。12～15は胴部資料である。12・13は、垂下磨消文帯と単節縄文の施された縄文帯とが見られるもの、14は、縦位の集合沈線の観察されるもの、15は、櫛状施文具による蛇行条線文の描かれるものである。

●第5号土坑（第33図）

D4グリッドに位置し、第1号溝跡を切る。西隅は調査区外であるが、検出部分から平面形は長径約1.1m、短径約1mの不整円形を呈すものと推定される。確認面からの深さは約1mを測り、底面は中央付近が浅く窪む。

●第6号土坑（第33・34・36図）

グリッドに位置する。平面形は長径約1.8m、短径約1.3mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.6mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第34図16・第36図22・23）

土器 第34図16は、無文の浅鉢形土器で、頸部内面に稜を持ち外反する口縁部を持つものである。

石器 第36図22は、ガラス質黒色安山岩製の平基無茎の石鏃である。やや横長の剥片を素材としたものと見られ、正面中央に素材剥片の主剥離を残す。整形剥離は両側縁を中心に規則的で丁寧な押圧剥離で行われる。裏面には基部を整形した二つの大きな剥離が残される。23は、黒曜石製の剥片である。正面には加撃方向の異なる大きな剥離面が2面観察される。裏面は上部に打点を持つ主剥離面で打瘤が残される。

●第7号土坑（第33・34図）

G2グリッドに位置する。平面形は長径約1.5m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第34図17・18）

土器 17・18は、深鉢形土器の胴部資料と思われる、前者は単節縄文が施されたもの、後者は無文となるものである。

●第8号土坑（第33・34・36図）

E1・2グリッドに位置し、第2号住居跡を切る。北側は調査区外であるため長径は不明であるが、短径約1.8mの長楕円形を呈す。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

出土遺物（第34図19～42・第36図24・25）

土器 第34図19～25は、平縁の深鉢形土器の口縁部資料である。19・20・22・23は、口縁部文様帯を隆帯で区画したり、杵状区画を隆帯と沈線で形成したりするものである。22では、しっかりと巻いた渦巻文を観察できる。21・24・25は、口縁部文様帯の区画に沈線を用いないもので、21では2条の沈線が、24では円形刺突列が、25では、交互刺突列が区画文となる。25では連弧文もうかがわれる。26は、内湾する無文の平縁土器で、浅鉢形を呈するものと思われる。27は、直立する口縁部を欠くが、水平に張り出した鏝に穿孔するタイプの有孔鏝付土器である。28～37は、胴部資料である。28～33・35は、垂下する磨消文帯と縄文帯の施される一群である。34は、単節縄文の施された資料、36・38・39は、条線文の施された資料である。37は、無文の資料である。40～42は、底部資料である。40は、推定底径9cm、残存高10.5cmを測る資料で、垂下する磨消文帯と撫で消されているが単節縄文を観察できる。41は、底径8cmを測る無文の資料である。42は、単節縄文と垂下沈線を観察することができる。

土製品 第34図43は、土器片錘である。無文の胴部破片を素材とし、長軸に沿って縄掛け刻みがつけられている。

石器 第36図24は、安山岩製の石皿残欠である。正面が石皿としての使用面、裏面は凹石としての使用面である。凹みは少なくとも3箇所確認できる。25は、石皿残欠と思われる盤状の安山岩の断片である。被熱し細かく破碎している。

●第9号土坑（第33図）

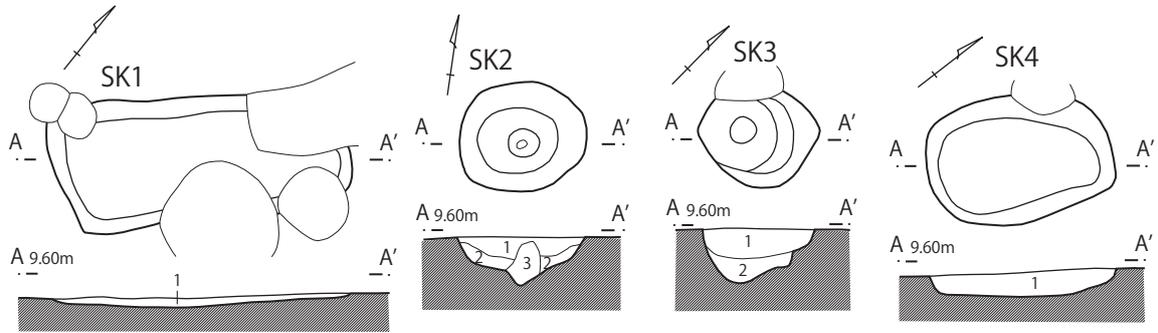
C3・4グリッドに位置し、第1号溝跡を切る。南側は調査区外であるため長径は不明であるが、短径約1.9mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.7mを測り、底面は中央付近が浅く窪む。北側壁面がややハングしている。

●第10号土坑（第33・36図）

G4・5グリッドに位置し、第11号土坑に切られる。平面形は長径約1.7m、短径約1.4mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第36図1～4）

土器 1は、諸磯c式の貝殻状貼付を持つ一群の口縁部資料である。細い半截竹管による半肉彫状の沈線

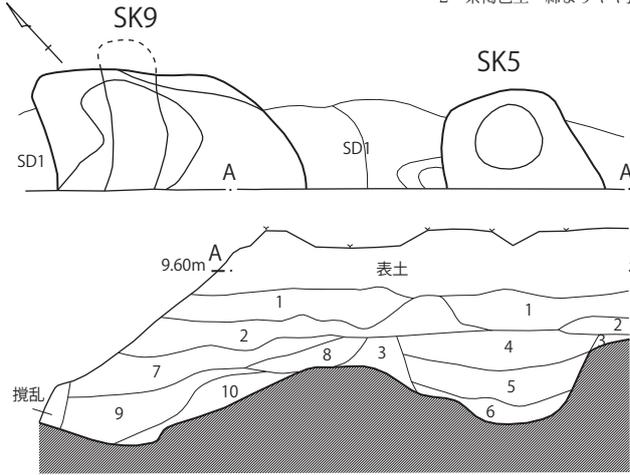


SK1
1 黒褐色土 締まり弱 ロームブロック (0.5~3cm) を多く、焼土粒子を少し含む。

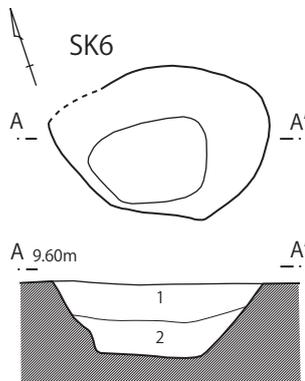
SK2
1 暗褐色土 締まりやや強 ロームブロック (0.2~0.5cm) をやや多く含む。
2 褐色土 締まり強 ロームブロック (0.1~0.5cm) を多く含む。
3 褐灰色土 締まりやや弱 ロームブロック (0.2~1cm) を多く含む。

SK4
1 褐色土 締まりやや強 ロームブロック (0.5~1cm) を多く含む。

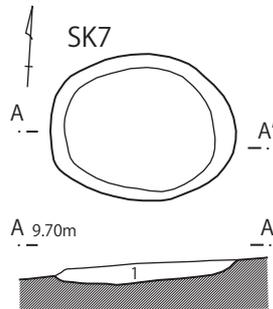
SK3
1 茶褐色土 締まりやや強 ロームブロック (0.5~1cm) を多く含む。
2 茶褐色土 締まりやや強 ロームブロック (0.5~1cm) を少し含む。



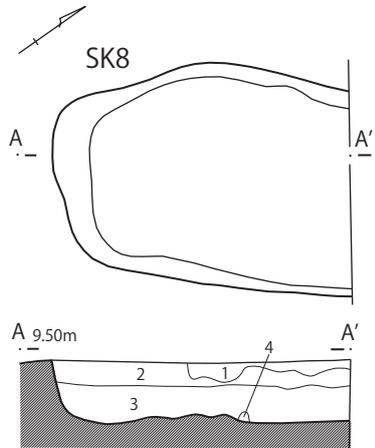
SK5
1 暗褐色土 締まり弱 ローム粒子を多く含む。
2 暗褐色土 締まり弱 ロームブロック (0.5cm程) を多く含む。
3 黒褐色土 締まりやや弱 粘性やや有 ロームブロック (0.5cm程) をやや多く含む。やや酸化している。
4 暗褐色土 締まり弱 ロームブロック (0.5cm程) をやや多く、炭化物 (0.2~0.5cm) を少し含む。
5 暗褐色土 締まり弱 白灰色粘土 (0.5cm程) をやや多く、炭化物 (0.2~0.5cm) を少し含む。
6 黄褐色土 ロームブロックからなる層。
SK9
7 暗褐色土 締まり弱 暗褐色土ブロック (1~2cm) をやや多く、ロームブロック (0.5~1cm) を少し含む。
8 暗褐色土 締まり弱 ロームブロック (0.5cm程) を少し含む。
9 暗褐色土 締まり弱 ロームブロック (0.5~0.7cm) をやや多く、黒褐色土ブロック (1cm程) を少し含む。
10 暗褐色土 締まりやや強 ロームブロック (0.5~1cm) をやや多く含む。



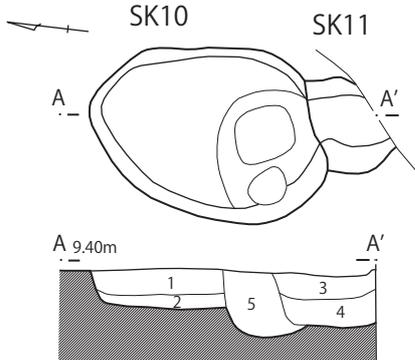
SK6
1 灰褐色土 締まり弱 ロームブロック (0.5~3cm) を多く含む。
2 灰褐色土 締まりやや強 ロームブロック (1~3cm) を少し、焼土粒子を僅かに含む。



SK7
1 茶褐色土 締まり弱 ロームブロック (0.5~0.7cm) を多く含む。



SK8
1 黒褐色土 締まり強 ロームブロック (0.5~2cm) と炭化物 (0.5~2cm) を多く含む。
2 黒褐色土 締まり強 ロームブロック (0.5~2cm) を多く、と炭化物粒子をやや多く含む。
3 暗褐色土 締まり強 ローム粒子を多く、炭化物粒子をやや多く含む。
4 黒褐色土 締まりやや強 ロームブロック (1~3cm) と炭化物 (0.5~2cm) を多く含む。

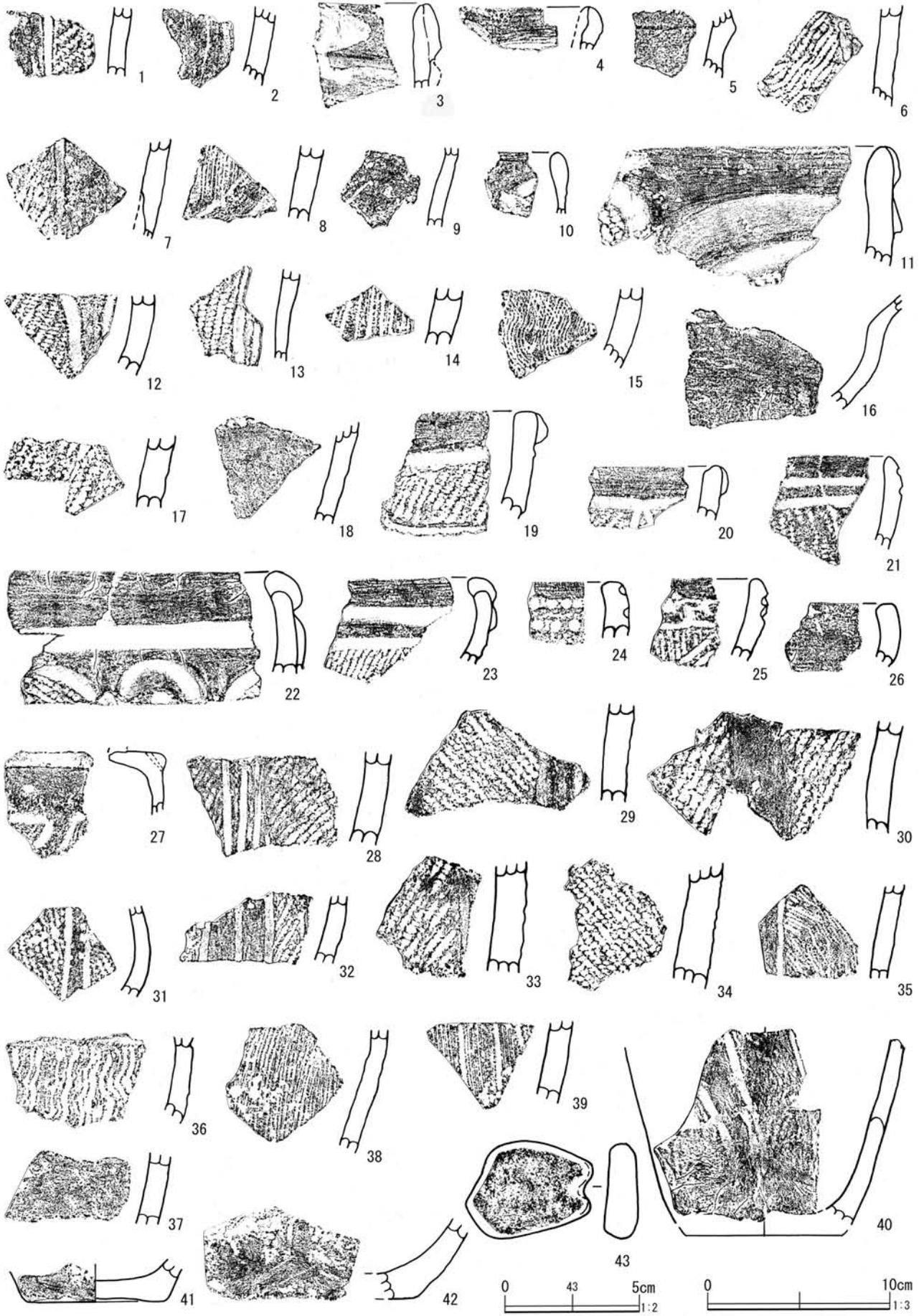


SK10
1 褐色土 締まりやや強 ロームブロック (1~2cm) と暗褐色土ブロック (1~3cm) をやや多く、炭化物粒子を少し含む。
2 褐色土 締まりやや強 ロームブロック (1~3cm) と暗褐色土ブロック (1~4cm) をやや多く、炭化物粒子を少し含む。

SK11
3 茶褐色土 締まり弱 ロームブロック (1~3cm) をやや多く、焼土粒子と炭化物粒子を少し含む。
4 茶褐色土 締まりやや強 ロームブロック (1cm程) を多く、炭化物粒子を少し含む。
GP
5 暗褐色土 締まりやや弱 ロームブロック (1~2cm) をやや多く、鉄分を少し含む。

第33図 第1~11号土坑





第34图 土坑出土遺物 (1)

文の上にボタン状の円形貼付が見られる。2は、有孔罫付き土器の罫部の資料である。残存部には孔は観察されない。3は、口縁部外縁に単節RL縄文による横帯施文部を持ち以下に「∩」状磨消文帯を垂下させる資料である。4は、単節縄文と垂下沈線の観察される胴部資料である。

●第11号土坑（第33図）

G4・5グリッドに位置し、第10号土坑を切る。南側は調査区外であるため長径は不明であるが、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

●第12号土坑（第35図）

G3・H3グリッドに位置し、第13号土坑を切る。平面形は長径約1.1m、短径約0.7mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第13号土坑（第35・36図）

G3・H3グリッドに位置し、第12号土坑に切られる。平面形は長径約2.3m、短径約1.6mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第36図5～10）

土器 5は、緩波状を呈する口縁部資料で、隆帯とこれに沿った沈線とで楕円区画が形成される。6・8・9は内湾傾向を示す無文の口縁部資料である。6・8では口縁部無文帯の下端を画す沈線がうかがわれる。7は、内湾傾向を示す平縁土器で、地文には撚糸文が観察される。10は、櫛状施文具による条線文の施された胴部資料である。

●第14号土坑（第35・36図）

H3・4グリッドに位置し、第4号住居跡と第15号土坑を切る。平面形は長径約1.3m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第36図11～16）

土器 11は、内湾する口縁部に2列の円形刺突列を施す平縁深鉢で、地文には条線文が施される。12は、緩波状を呈する口縁部資料で、口縁に沿うように複節縄文2条分だけ施文し、以下に同じ原体を斜位回転させ縦位の条方向を獲得している。13・14は、縄文の施された胴部資料である。15・16は底部資料で、15は推定底径12cm、残存高4cmを測る外反する資料である。16は、底径6cm、残存高6cmの小型の深鉢と思われる。器面は横位から斜位の粗い撫でが施される。

●第15号土坑（第35図）

H4グリッドに位置し、第4号住居跡を切り、第14号土坑に切られる。平面形は長径約1.1m、短径約1mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面は平坦である。

●第16号土坑（第35図）

H3・4グリッドに位置する。南側は調査区外であるため長径は不明であるが、短径約0.9mの不整円形

を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第17号土坑（第35図）

D2グリッドに位置する。北隅は調査区外であるが、検出部分から平面形は長径約1.1m、短径約1mの不整円形を呈すものと推定される。確認面からの深さは浅く約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第18号土坑（第35図）

D4グリッドに位置する。平面形は長径約0.9m、短径約0.7mの不整円形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第19号土坑（第35図）

D3・4グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約0.7mの不整円形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第20号土坑（第35図）

D3グリッドに位置し、第9号溝跡を切る。平面形は長径約1.1m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.1mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

●第21号土坑（第35図）

E4グリッドに位置し、第3号住居跡に切られる。北側が切られているため長径は不明であるが、短径約1.8mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第22号土坑（第35図）

D3グリッドに位置する。北隅は攪乱に切られるが、検出部分から平面形は長径約0.9m、短径約0.7mの不整円形を呈すものと推定される。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第23号土坑（第35図）

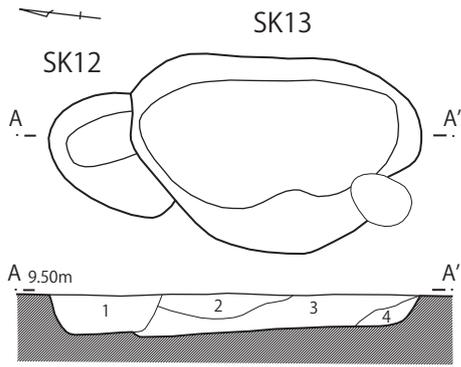
E4グリッドに位置する。東隅は攪乱に切られるが、検出部分から平面形は長径約1m、短径約0.7mの不整円形を呈すものと推定される。確認面からの深さは浅く約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第24号土坑（第35・36図）

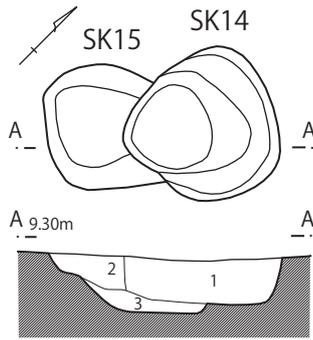
G3グリッドに位置する。平面形は長径約1.7m、短径約1mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。中央やや西寄りに円形のピットが認められるとともに、東端にテラス状の張り出しが認められた。

出土遺物（第36図17～21）

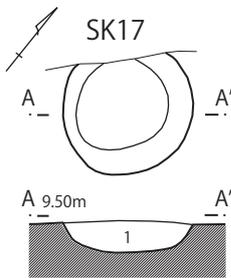
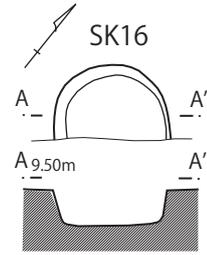
土器 17は、口縁部文様帯下端区画となる幅広の沈線と垂下沈線の一端を見ることができる。18～21は胴部資料で、18～20では、単節縄文の地文と垂下する磨消文帯とが観察される。21は、縄文が施文される。



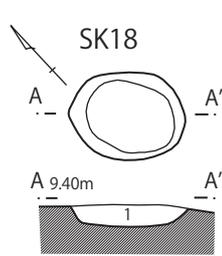
- SK12
1 暗褐色土 締まり弱 ロームブロック (1~5cm) を多く含む。
SK13
2 暗褐色土 締まり弱 ロームブロック (1cm 程) を少し含む。
3 茶褐色土 締まりやや弱 ロームブロック (0.5~1.5cm) を多く、
焼土粒子と炭化物粒子少し含む。
4 暗褐色土 締まりやや弱 ロームブロック (1cm 程) を少し含む。



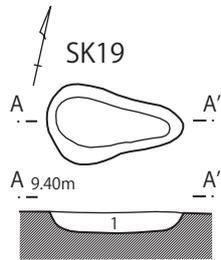
- SK14
1 暗褐色土 締まりやや強 ロームブロック (1~2cm) をやや多く、
炭化物粒子を少し含む。
SK15
2 茶褐色土 締まりやや強 ロームブロック (2cm 程) をやや多く、
炭化物粒子を少し含む。
3 茶褐色土 締まりやや強 ロームブロックを多く、炭化物粒子少し含む。



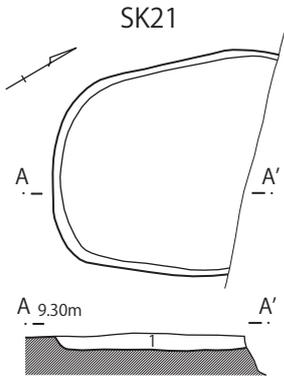
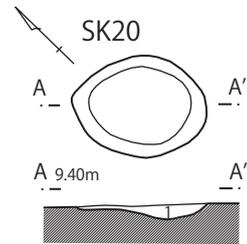
- SK17
1 褐色土 締まりやや弱 暗褐色土ブロック (1cm 程) をやや多く、
炭化物粒子を少し含む。



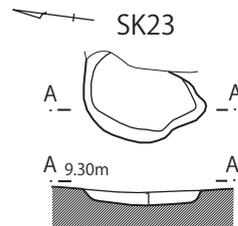
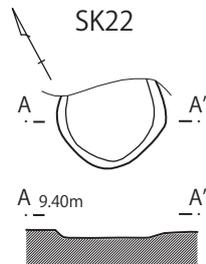
- SK18
1 茶褐色土 締まり弱 焼土粒子と炭化物粒子を少し含む。



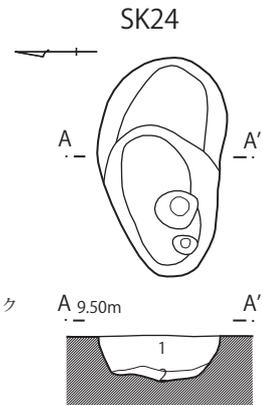
- SK19
1 茶褐色土 締まり弱 ローム粒子をやや多く、炭化物粒子を少し含む。
SK20
1 褐色土 締まり弱 焼土粒子を多く、炭化物粒子を少し含む。



- SK21
1 褐色土 締まり弱 ローム粒子と
炭化物粒子を少し含む。



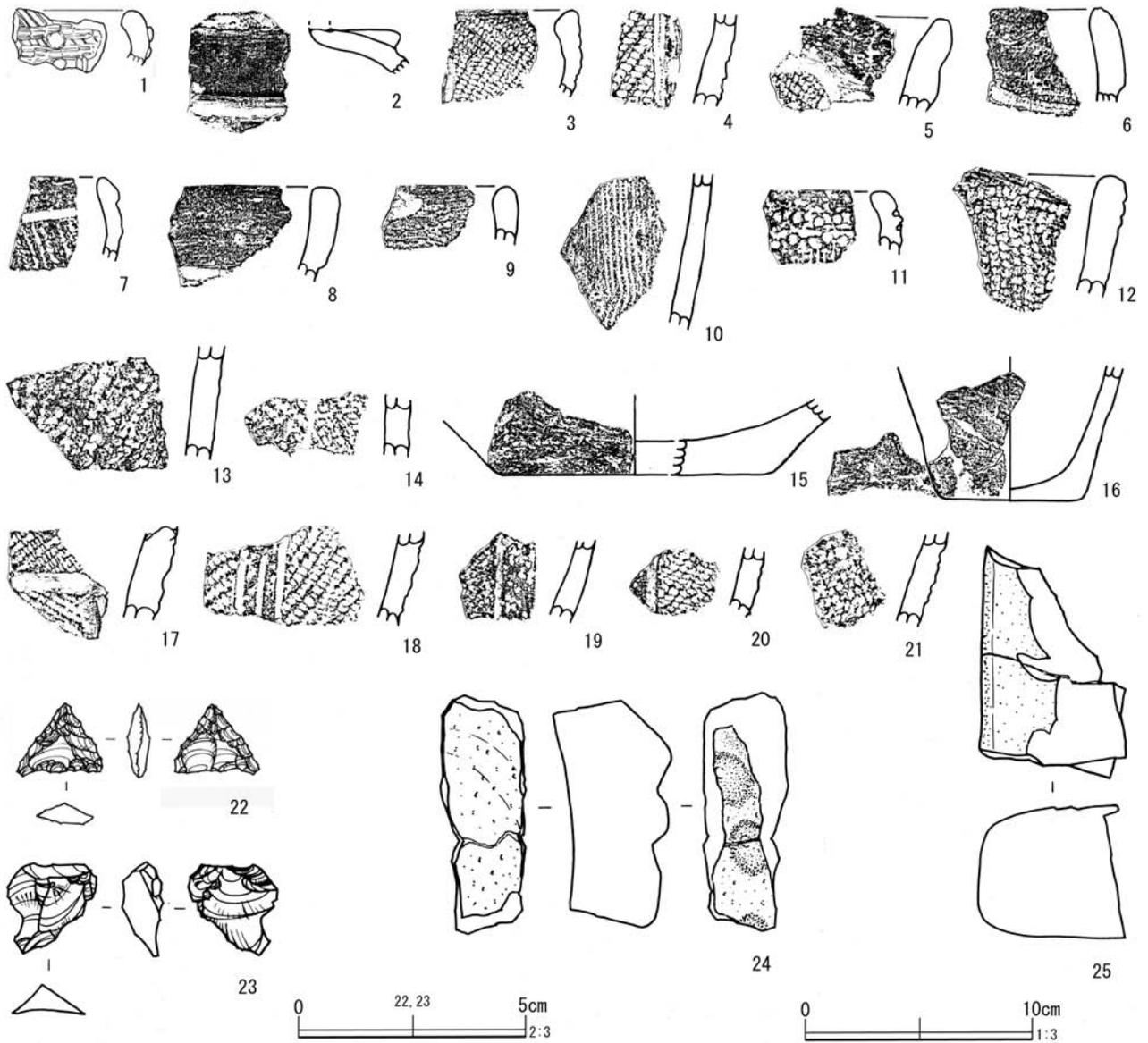
- SK23
1 褐色土 締まりやや弱 ロームブロック
(0.5cm 程) と炭化物粒子を
少し含む。



- SK24
1 褐色土 締まりやや強 ロームブロック
(0.5~3cm) を多く含む。
2 褐色土 締まりやや強 焼土ブロック
(0.2~0.5cm) やや多く、
ロームブロック (0.5~1cm)
を少し含む。



第35図 第12~24号土坑

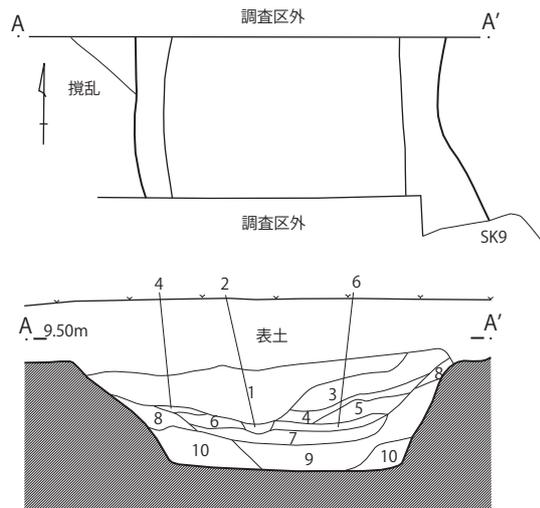


第36図 土坑出土遺物 (2)

第9表 土坑出土石器計測表

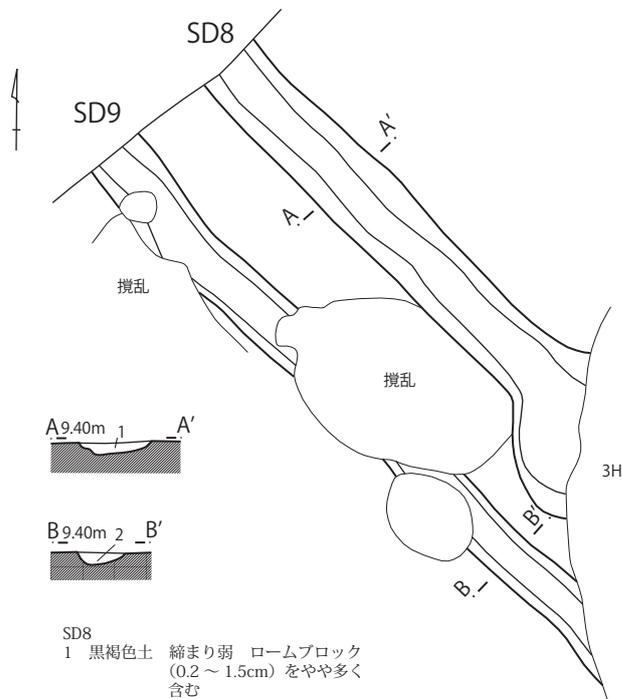
図版	番号	遺構	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
36	22	SK6	石鎌	ガラス質黒色安山岩	1.5	1.8	0.6	1.0	
36	23	SK6	フレイク	黒耀石	2.1	1.9	0.9	1.7	
36	24	SK8	石皿	安山岩	(10.5)	(3.7)	4.3	(193.0)	残欠
36	25	SK8	石皿	安山岩	(10.3)	(6.4)	(5.8)	(405.0)	残欠

SD1



SD1

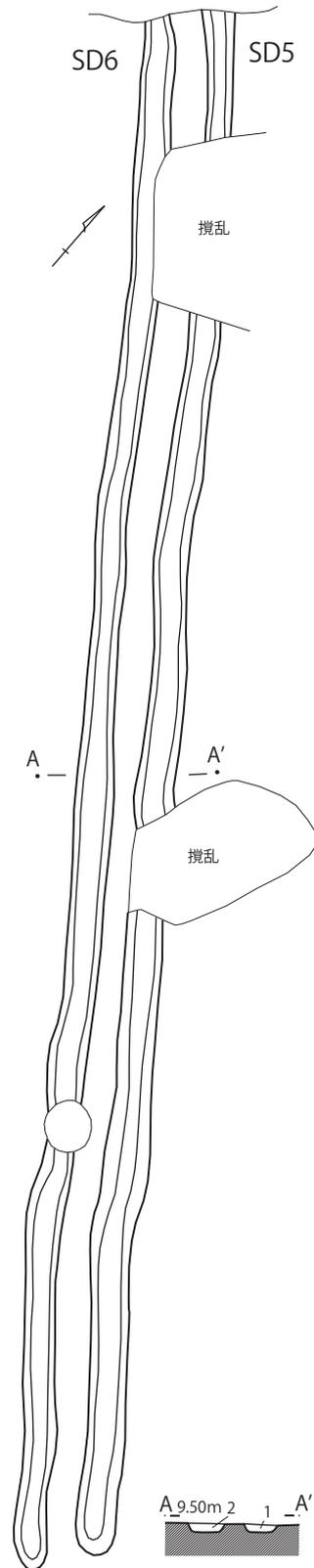
- 1 暗褐色土 締まり弱 ローム粒子を多く含む。
- 2 暗褐色土 締まり弱 粘性やや有 ロームブロック (0.5cm 程) を少し含む。
- 3 茶褐色土 締まり弱 ロームブロック (0.5cm 程) を少し含む。
- 4 黒褐色土 締まり弱 炭化物粒子をやや多く含む。
- 5 暗褐色土 締まり弱 ロームブロック (0.5cm 程) と鉄分をやや多く含む
- 6 暗灰色土 締まり弱 粘性強 ロームブロック (0.5-5cm) を多く含む。
ややグライ化した粘土層。
- 7 茶褐色土 締まりやや弱 粘性やや有 ロームブロック (0.5 ~ 1cm) をやや多く含む。
やや酸化している。
- 8 黒褐色土 締まりやや強 粘性やや有 ロームブロック (0.5 ~ 2cm) と暗褐色土ブロック
(1cm 程)、酸化土を多く含む。
- 9 黒褐色土 締まりやや弱 粘性やや有 ロームブロック (0.5cm 程) と炭化物粒子をやや多く含む。
やや酸化している。
- 10 暗褐色土 締まりやや弱 粘性やや有 ロームブロック (0.5 ~ 8cm) を多く含む。



SD8

- 1 黒褐色土 締まり弱 ロームブロック (0.2 ~ 1.5cm) をやや多く含む
- SD9
- 2 黒褐色土 締まり弱 ロームブロック (1cm 程) を少し含む。

SD6 SD5

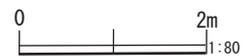


SD5

- 1 黒褐色土 締まり弱 ロームブロック (0.5 ~ 0.8cm) をやや多く含む

SD6

- 2 黒褐色土 締まり弱 ローム粒子を少し含む。



第37図 第1・5・6・8・9号溝跡

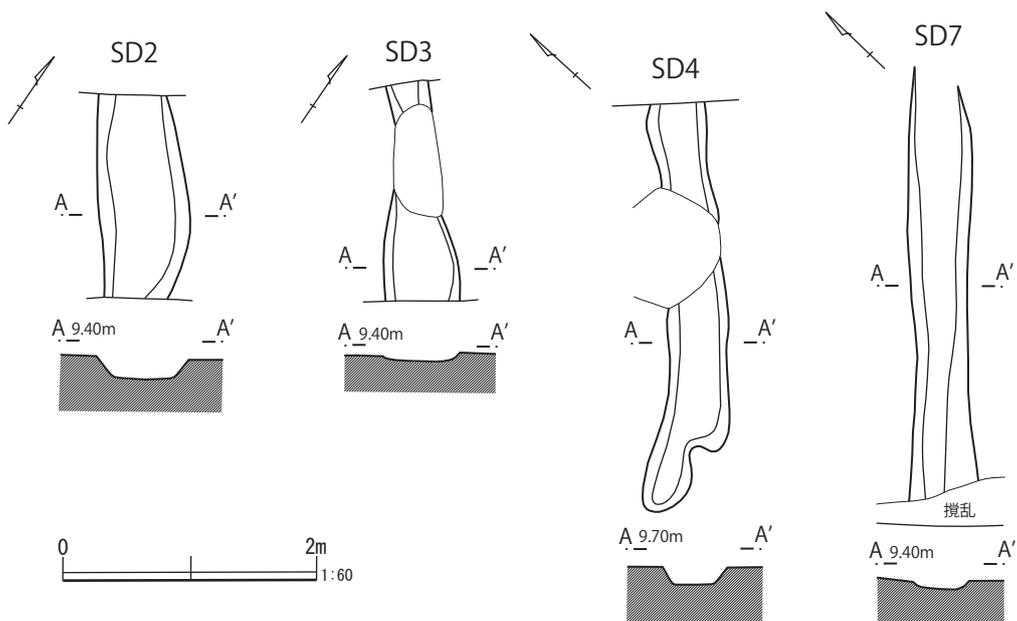
(4) 溝跡

●第1号溝跡 (第37・39図)

C3・4・D4グリッドに位置し、第5・9号土坑に切られる。調査区内で確認できる部分では、北西から南東へ約2.2m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は3.4mを測り、確認面からの深さは約1.2mを測る。調査区内で検出された9条の溝跡の中では、飛び抜けて幅広で深い。調査区の東側と西側を区画するため掘削されものである。また、調査時に水が溜まり、水中ポンプによる排水が必要とされた。溝跡の性格としては、用排水を目的とした可能性も考えられる。

出土遺物 (第39図1~16)

土器 1は勝坂式土器の口縁部付近の資料である。内湾する口縁部下端を沈線で画し、膨らむ口縁部には半截竹管で集合沈線や「C」字状刺突、刻み目などを施す。2は、大きく外反する浅鉢形土器の口縁部資料で、緩やかな波状を描く口縁部内面に渦巻文が配される。第3号住居跡の第22図19の浅鉢と接合関係を持つ。3は、キャリパー形深鉢の口縁部資料である。口唇部は玉縁を呈し丈のある隆帯で口縁部文様帯の上端を区画する。4は、平縁を呈すると思われる深鉢形土器の口縁部資料で、口唇外縁に幅の狭い単節縄文横位施文の施文帯を持ち、口縁部から胴部を縦貫する「∩」状モチーフや蕨手文の施される一群と思われる。5・6は、口縁部文様帯下端区画から胴部を垂下する磨消文帯に掛けての資料である。5では、磨消文帯の中に刺突文が見られる。7は、胴部に垂下する磨消文帯を微隆帯で縁取る資料、8は、縄文帯と磨消文帯を画する垂下沈線の見られる資料である。9は、単節縄文の施された胴部資料。10~13は、縦位の集合沈線や条線文の施された胴部資料である。14は、加曾利B式に該当する小型の壘形土器と思われ、口縁部を飾ると思われる横位の沈線帯と、細かな縄文の充填される「の」の字状モチーフが看取される。器面は内外とも極めて丁寧に磨かれる。15は、口径11.5cm、器高2.5cmを測る灯明皿と思われる陶器である。16は、播鉢の胴部上半の資料である。



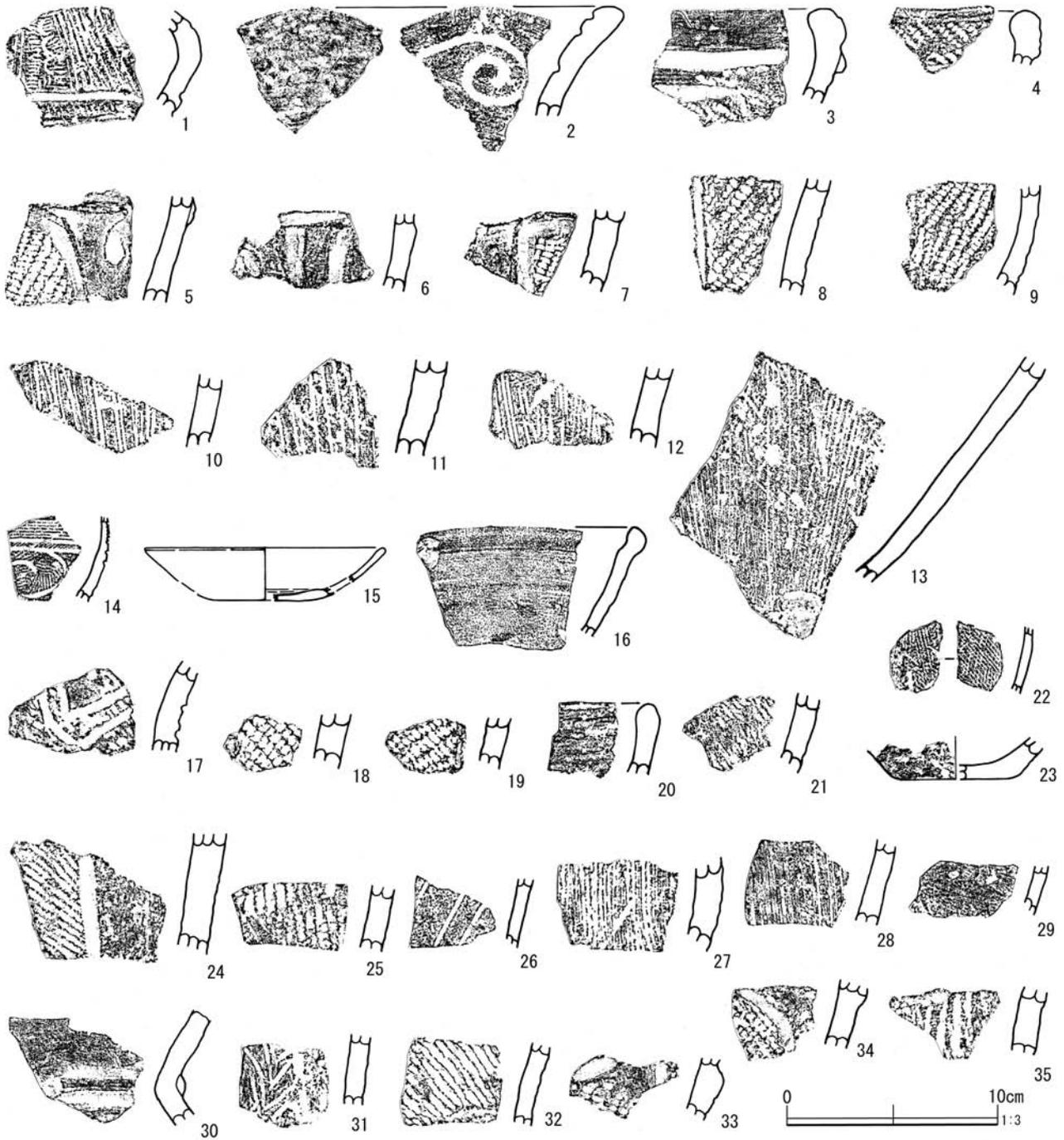
第38図 第2~4・7号溝跡

●第2号溝跡（第38図）

B4・5グリッドに位置する。調査区内を北西から南東へ約1.6m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は0.7mを測り、確認面からの深さは浅く約0.2mを測る。

●第3号溝跡（第38図）

B4・5グリッドに位置する。調査区内を北西から南東へ約1.7m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は0.6mを測り、確認面からの深さは浅く約0.1mを測る。



第39図 溝跡出土遺物

●第4号溝跡（第38・39図）

B4・5グリッドに位置する。調査区内を西北から東南へ約3.2m延伸し、西端は調査区内で認められるが、東側は調査区外へ延びる。調査区での最大幅は0.5mを測り、確認面からの深さは浅く約0.2mを測る。

出土遺物（第39図17～20・24）

土器 17は、単節縄文の地文上に2本1組の沈線文の見られる資料、18・19は、単節縄文の施された胴部資料である。20は、無文の口縁部資料である。24は、磨消文帯の垂下する胴部資料である。地文は無節縄文である。

●第5号溝跡（第37・39図）

F2・3・G3・4・H4グリッドに位置する。調査区内を北西から南東へ約8.8m延伸し、南端は調査区内で認められるが、北側は調査区外へ延びる。調査区での最大幅は0.5mを測り、確認面からの深さは浅く約0.1mを測る。

出土遺物（第39図21～23）

土器 21は、無節縄文の施された胴部資料、22は、表裏に刷毛目の見られる五領式土器である。23は、推定底径6cmを測る無文の底部資料である。

●第6号溝跡（第37・39図）

F2・3・G3・4・H4グリッドに位置する。調査区内を北西から南東へ約8.9m延伸し、南端は調査区内で認められるが、北側は調査区外へ延びる。調査区での最大幅は0.4mを測り、確認面からの深さは浅く約0.1mを測る。

出土遺物（第39図25～29）

土器 25は、単節縄文を縦位施文する胴部資料、26は、斜行する3条の沈線の見られる胴部資料、27・28は、条線文の施された胴部資料、29は無文の胴部資料である。

●第7号溝跡（第38図）

D4グリッドに位置する。調査区内を西北から東南へ約3.4m延伸し、東端は調査区内で途切れ、西側は調査区外へ延びる。調査区での最大幅は0.6mを測り、確認面からの深さは浅く約0.1mを測る。

●第8号溝跡（第37・39図）

D2・3・E3グリッドに位置する。調査区内を北西から南東へ約4m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。南寄り大きく溝幅が広がり最大幅は1.1mを測る。確認面からの深さは浅く約0.1mを測る。

出土遺物（第39図30～32）

土器 30は、「く」の字に屈曲する頸部資料で、屈曲点に沿って隆帯を貼るものである。31は、縦位の矢羽状の沈線が観察される資料、32は、無節縄文の施された胴部資料である。

●第9号溝跡（第37・39図）

D2・3・E3グリッドに位置し、第20号土坑に切られる。調査区内を北西から南東へ約5.4m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は0.5mを測り、確認面からの深さは浅く約0.1mを測る。

出土遺物（第39図33～35）

土器 33・34は、口縁部文様帯下端から胴部文様帯上半に掛けての破片資料で、前者では、杵状区画の下端と垂下沈線が看取される。後者は、弧線を描きながら垂下する沈線が見られる。35は、縦位の集合沈線の描出された胴部資料である。

(5) ピット（第9図）

検出されたピットは44基を数える。遺物の出土は僅かに認められるが帰属時期は判然としない。ピットの計測値は第10表に示した通りである。

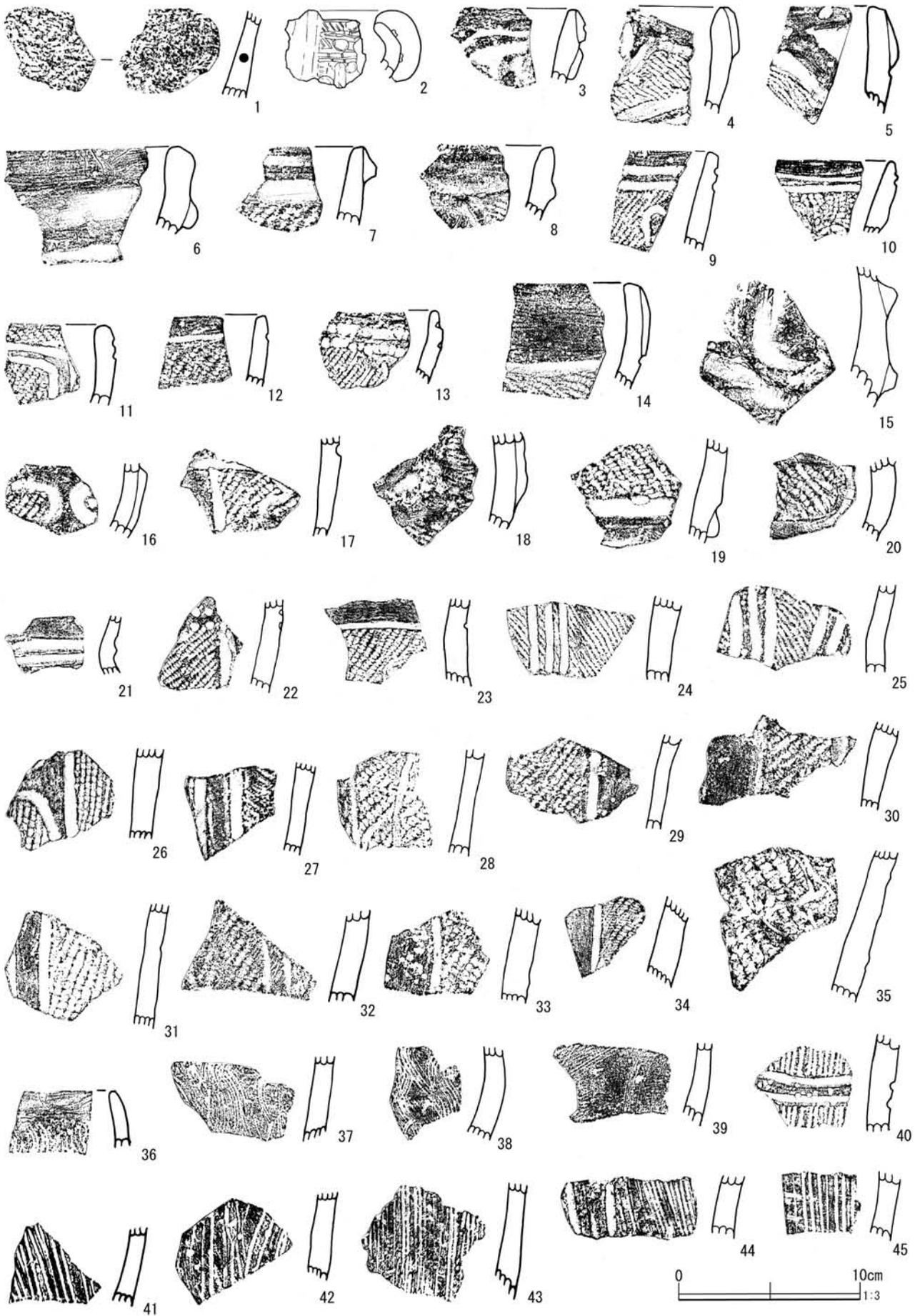
第10表 赤砂利遺跡（第5地点）ピット計測表

グリッド	番号	長径	短径	深さ	グリッド	番号	長径	短径	深さ	グリッド	番号	長径	短径	深さ
B5	1	88	36	23	E3	2	26	22	7	G2	8	38	25	88
D2	1	36	36	18	F1	1	18	(8)	21	9	(56)	(30)	31	
	2	44	44	18		2	60	(54)	24	10	54	(32)	19	
D3	1	54	46	43		3	38	36	54	11	56	46	23	
	2	40	34	42	F2	1	60	(48)	44	12	52	48	24	
	3	58	52	22		2	36	34	30	13	62	60	18	
	4	50	44	32	F3	1	(46)	56	65	14	50	39	18	
D4	1	34	24	29		2	48	40	36	G3	1	46	44	22
	2	46	42	23	G2	1	38	34	16		2	32	27	23
E2	1	54	46	19		2	32	30	17		3	50	38	31
	2	36	34	12		3	(82)	(66)	47	G4	1	(34)	40	35
	3	(46)	50	17		4	40	(25)	32		H3	1	56	52
	4	(52)	58	25		5	44	(24)	16	2		54	46	11
	5	66	62	21		6	(36)	(24)	42	3		52	40	12
E3	1	56	56	32	7	(36)	32	39						

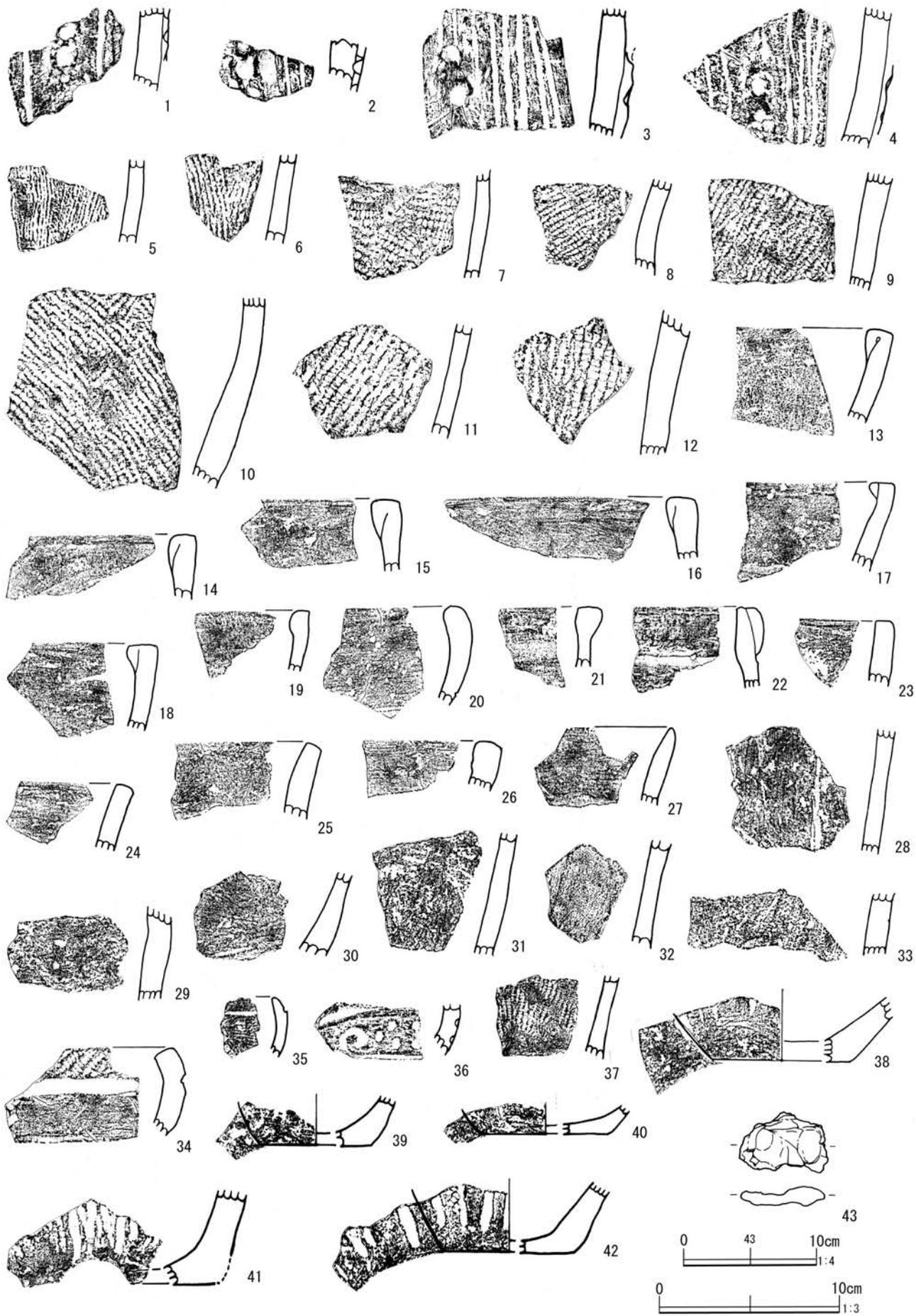
※単位は全てcm

(6) グリッド出土遺物（第40・41・42図）

土器 第40図1は、胎土に繊維を含む資料で、表面に縄文が観察される。器面は荒れている。2は、貝殻状の貼付文の見られる諸磯c式の口縁部資料である。3～8・15～20は、口縁部文様帯を隆帯で区画したり、杵状区画を隆帯と沈線で形成したりする一群である。4は波状縁となるもので、波頂下に渦巻文等が配されるものであろう。杵状の区画内には無節縄文が充填される。5は、幅のあるしっかりとした隆帯が口縁部の杵状区画内を斜めに分割するもの、6は、太く丈の高い隆帯で杵状区画の上端を区画するもの、8は、口縁部無文帯下端を微隆帯で区画するものである。15は、太い隆帯で巻き切らない渦巻文を形成するもの、16は、縄文の充填される長楕円区画と円形区画が看取されるものである。9～14・22は、口縁部文様帯の区画に隆帯を用いない一群である。9・10は、口縁部に並行する2条の沈線を配し以下に単節縄文の地文を施すもので、「∩」状の磨消文帯や蕨手文が垂下するもの、11は、やや角張った「∩」状の磨消文帯が観察されるもの、13は、2列の円形刺突列が観察されるもの、14は、幅のある口縁部無文帯の下端を沈線で区画するものである。22では、円形刺突列と垂下磨消文帯が観察される。23は、磨消文帯下端を沈線で区画した胴部資料である。24～35は、縄文を地文に持つ胴部資料である。いずれも垂下磨消文帯や垂下沈線が観察される。26は、「H」状磨消となるもので、地文は撚糸文である。35では細い蛇行沈線が垂下する。36～38は、櫛状施文具による蛇行条線文の施される資料で、36は、内湾傾向のある口縁部資料



第40図 グリッド出土遺物 (1)

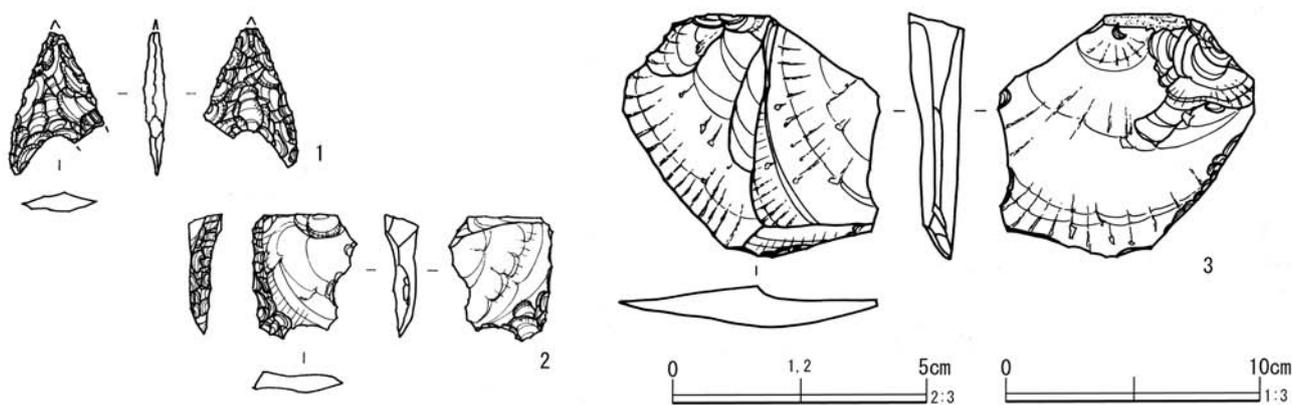


第41図 グリッド出土遺物 (2)

である。39は、斜方向の条線文が見られるものである。40は、集合沈線の地文上に磨消となる連弧文が施されたものである。41～45は、縦位の条線文ないし集合沈線の見られる胴部資料である。

第41図1～4は、鎖状隆帯の垂下する胴部資料で同一個体である可能性が高い。隆帯の両側には縦位の集合沈線が施される。曾利式土器の系譜を引くものであろう。5・6は、撚糸文を地文に持つ胴部資料、7～12は、単節縄文の施された胴部資料である。13～27は、無文の口縁部資料である。13～18は、口縁部を内側に折り口唇端面を平らに整形するものである。19もこれに類する。20は、内湾する平縁資料で、浅鉢となるものと思われる。21は、口縁外縁を肥厚させたもの、22は口縁外面に幅広の隆帯を貼ったものである。23～26は、口唇部を角頭状に整形した平縁資料、27は、口唇部内面を削ぎ落とすように仕上げたものである。28～33は、無文の胴部資料である。28では1条の垂下沈線が観察される。34は、後期初頭の称名寺式に位置付けられるもので、口縁部外縁の幅の狭い縄文帯の下に無文帯が観察される。35は、加曾利B式に該当する小型の塊形土器の口縁部資料である。36は、円形刺突の施される横帯の中にステッキ状の沈線が見られる胴部資料である。37は、細かな単節縄文の施された胴下半部の資料である。38～42は底部資料である。38は、推定底径8cmを測るもので、垂下沈線の末端が観察される。39は、推定底径6cm、40は、推定底径7cmでいずれも無文の資料である。42は推定底径7cmを測るもので、垂下する縄文帯と磨消文帯が看取される。

石器 第42図1は、赤色チャート製の石鎌である。凹基無茎で、先端部と左脚部を欠損する。全体に薄く整形される。整形加工は両側縁を中心に両面からの押圧剥離で丁寧な施される。基部の抉りは深く、表裏両側に足の長い剥離の痕跡を留めている。2は、チャート製のスクレイパーである。横長の不整形剥片を素材とし、表裏両面に素材剥片の主剥離を残す。正面にはネガティブな打瘤、裏面にはポジティブな打瘤を見ることができる。刃部は正面左側に、主に裏面からの丁寧な押圧剥離を加えて整形している。3は、ガラス質黒色安山岩製の二次加工剥片である。貝殻状の不整形剥片を素材としたもので、正面には左斜め



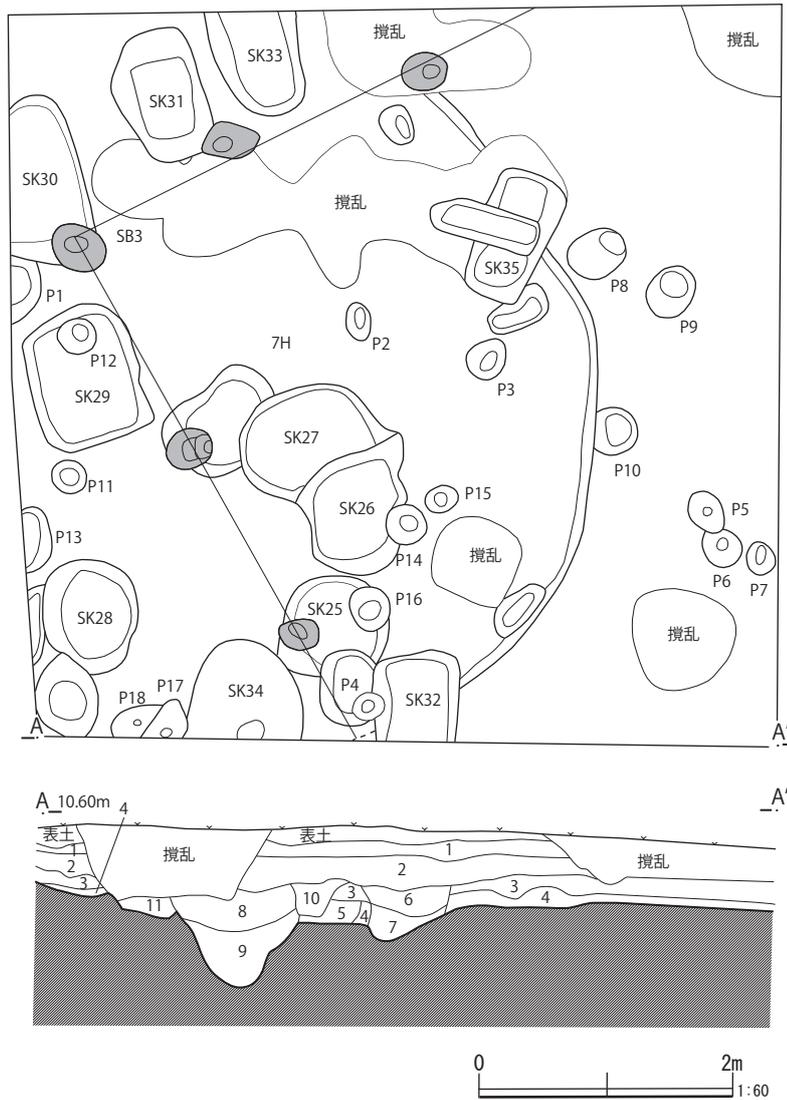
第42図 グリッド出土遺物 (3)

第11表 グリッド出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
42	1	D4	石鎌	赤チャート	(2.8)	1.8	0.4	(1.5)	
42	2	F3	スクレイパー	チャート	2.5	2.0	0.6	2.7	
42	3	D1	二次加工剥片	ガラス質黒色安山岩	5.7	4.3	1.1	19.1	

上方に打点を持つ大きな剥離面が2面観察され、刃部は、正面左側縁から下端にかけて細かな剥離が施されている。裏面は上部を打面とする主剥離が残され、打点、打瘤、打瘤裂痕が観察される。

鉄滓 第41図43は炉内滓と考えられる鉄滓である。長さ6.5cm、幅4.0cm、厚さ1.5cm、重量は50.9gを測る。メタルが多く遺存しており、磁着度は4であった。



- 基本土層
- 1 灰褐色土 白色粒子と灰色粒子を多く含む。
 - 2 暗褐色土 焼土ブロックと炭化物粒子を多く含む。転圧のため締まりが強い。
 - 3 暗褐色土 炭化物粒子を少し含む。
 - 4 褐色土 ロームへの漸移層。
 - 7H
 - 5 褐色土 締まり弱 ロームブロック (0.5 ~ 1cm) と焼土粒子、炭化物粒子を少し含む。
 - SK32
 - 6 暗褐色土 締まり弱 ローム粒子を多く、炭化物粒子を少し含む。
 - 7 暗褐色土 締まり弱 ローム粒子とロームブロック (0.5 ~ 1cm) を多く、焼土粒子を少し含む。
 - SK34
 - 8 黒褐色土 締まりやや弱 ローム粒子やや多く、ロームブロック (1cm 程) を少し含む。
 - 9 黒褐色土 締まりやや弱 ローム粒子とロームブロック (0.5cm 程) を少し含む。
 - P
 - 10 暗褐色土 締まりやや強 ロームブロック (0.5 ~ 1cm) をやや多く、ローム粒子を少し含む。
 - 11 暗褐色土 締まり弱 ロームブロック (1 ~ 2cm) をやや多く含む。

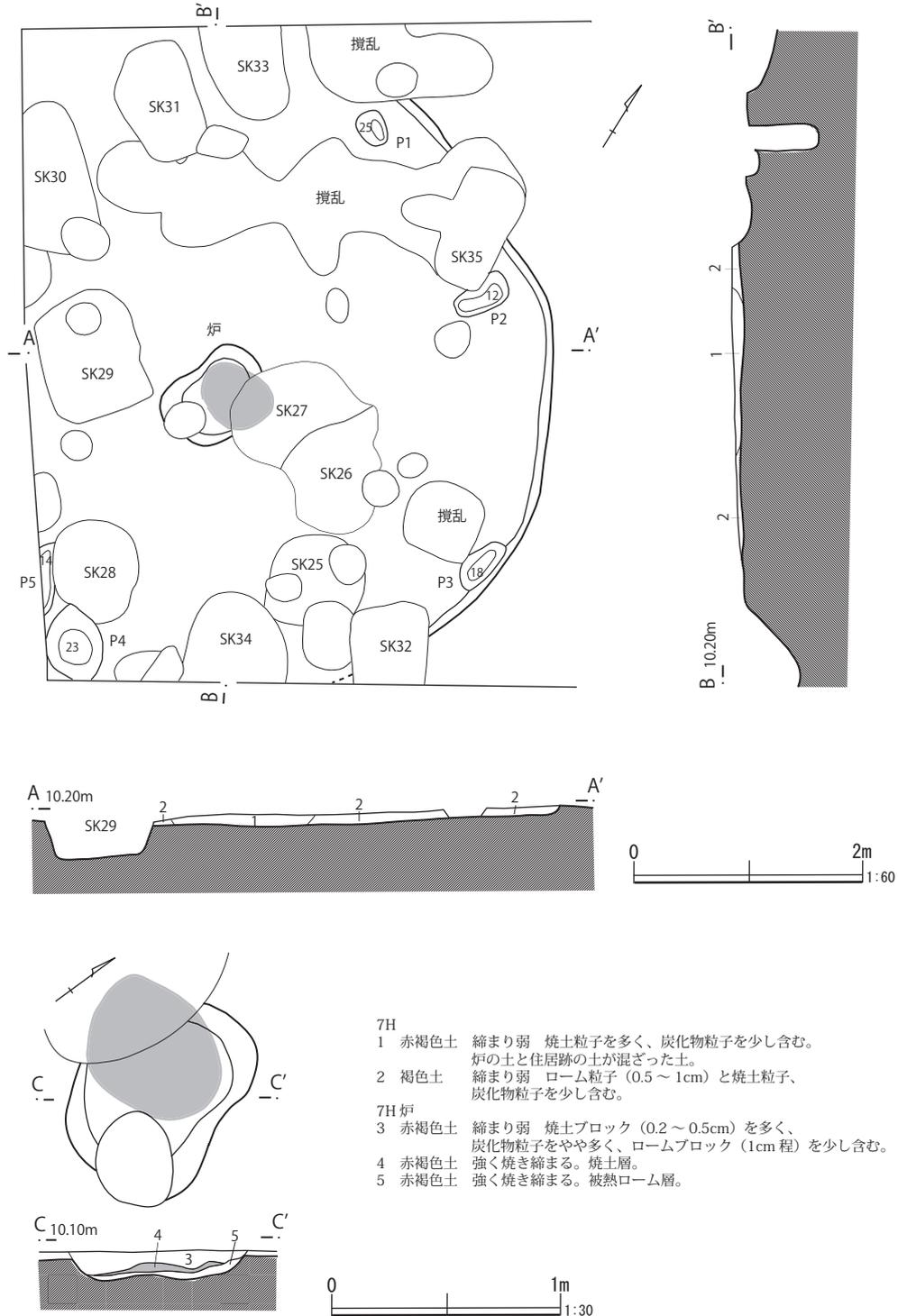
第43図 赤砂利遺跡 (第7地点) 全測図

3 第7地点の遺構と遺物

(1) 住居跡

●第7号住居跡 (第44・45図)

調査区内で住居の全容がほぼ分かるものの、西寄りの一部は調査区外に広がるようである。第25～35



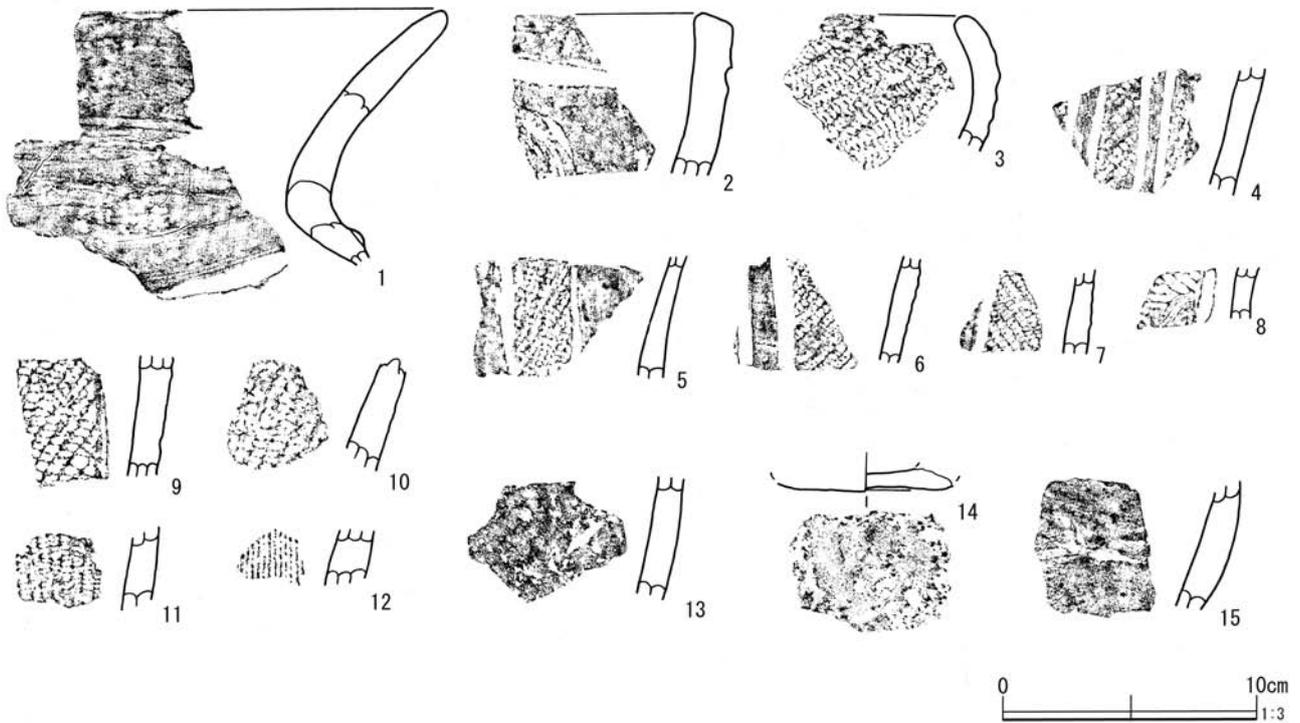
第44図 第7号住居跡

号土坑に切られる。一部が調査区外であるため不確定な部分もあるが、検出部分から平面形は直径約6mの円形を呈すものと推定される。確認面から床面までの深さは浅く約0.1mであった。住居の外寄りに柱穴を5基検出した。支柱穴のほとんどは土坑によって壊されていると考えられる。

炉跡は長径約1.5m、短径約1.2mの不整円形を呈し、住居内中央部に位置している。炉跡の中央部より北寄りには長径約1.3m、短径約1.1mの発達した焼土の広がり認められた。

出土遺物 (第45図)

土器 1~3は口縁部片である。1は無文で下位に隆帯が貼り付けられる。2は無文で横位に1条の沈線が引かれる。3は口縁部片で口唇部が弱く内湾する。地文は単節LR縄文を横位回転させたものである。4~13は胴部片で、4~9は縦位の沈線の引かれる磨消文帯と縄文帯が認められる。9~11は縄文のみが認められ、12は櫛状施文具による縦位の条線文が施される。13は無文である。14は底部片で文様等は認められなかった。15は焙烙の体部片である。



第45図 第7号住居跡出土遺物

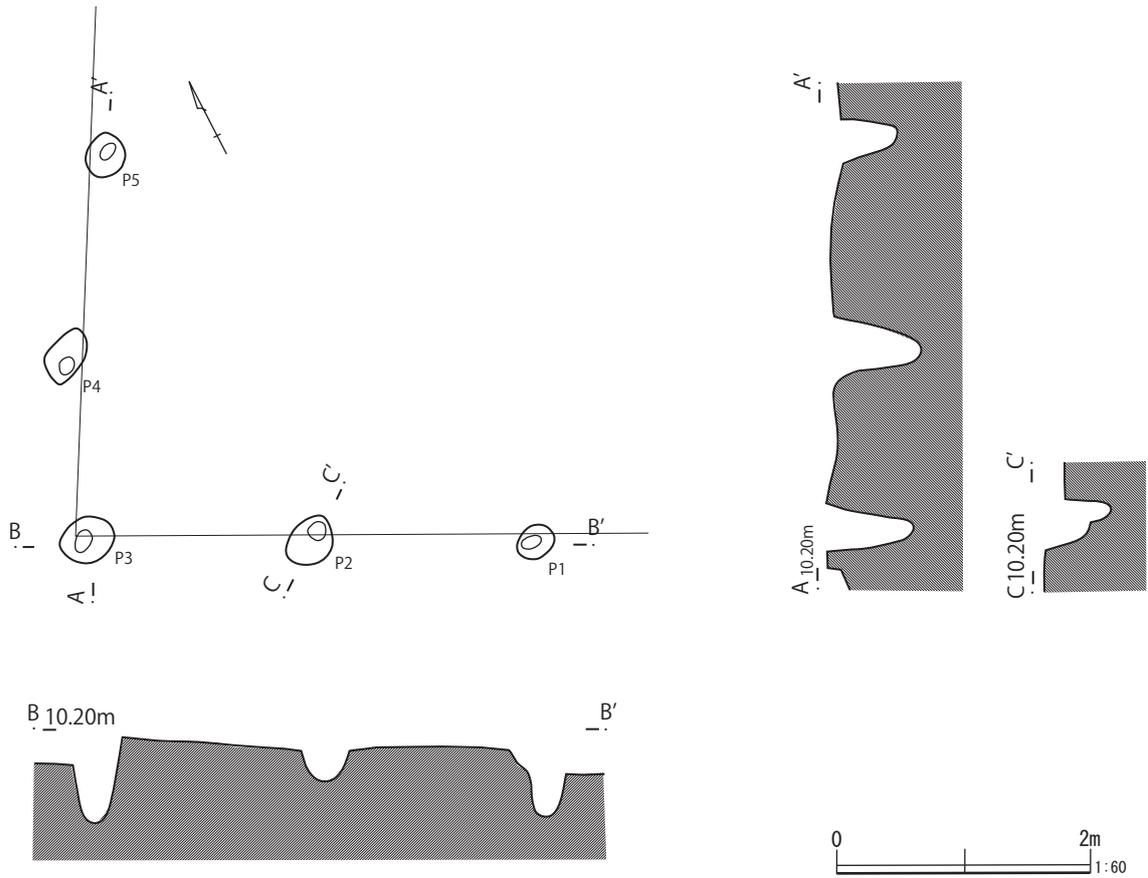
(2) 掘立柱建物跡

●第3号掘立柱建物跡 (第46・49図)

調査区内で4基の柱穴を検出したが、さらに調査区外にも建物を構成する柱穴が展開するようである。桁行3間以上、梁行2間以上の側柱建物で、主軸方位はN-63°-Wを指す。検出部分のみで桁行約4.5m、梁行約4.2mを測る。柱穴の規模は第12表のとおりである。

出土遺物 (第49図1)

土器 1はP1出土で胴部片である。櫛状施文具による縦位の条線文が施される。



第46図 第3号掘立柱建物跡

第12表 赤砂利遺跡（第7地点）掘立柱建物跡ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
SB3 P1	30	26	55	SB3 P4	40	26	70
SB3 P2	36	30	48	SB3 P5	36	32	10
SB3 P3	44	36	72				

※単位は全てcm

(3) 土坑

●第25号土坑（第47・48図）

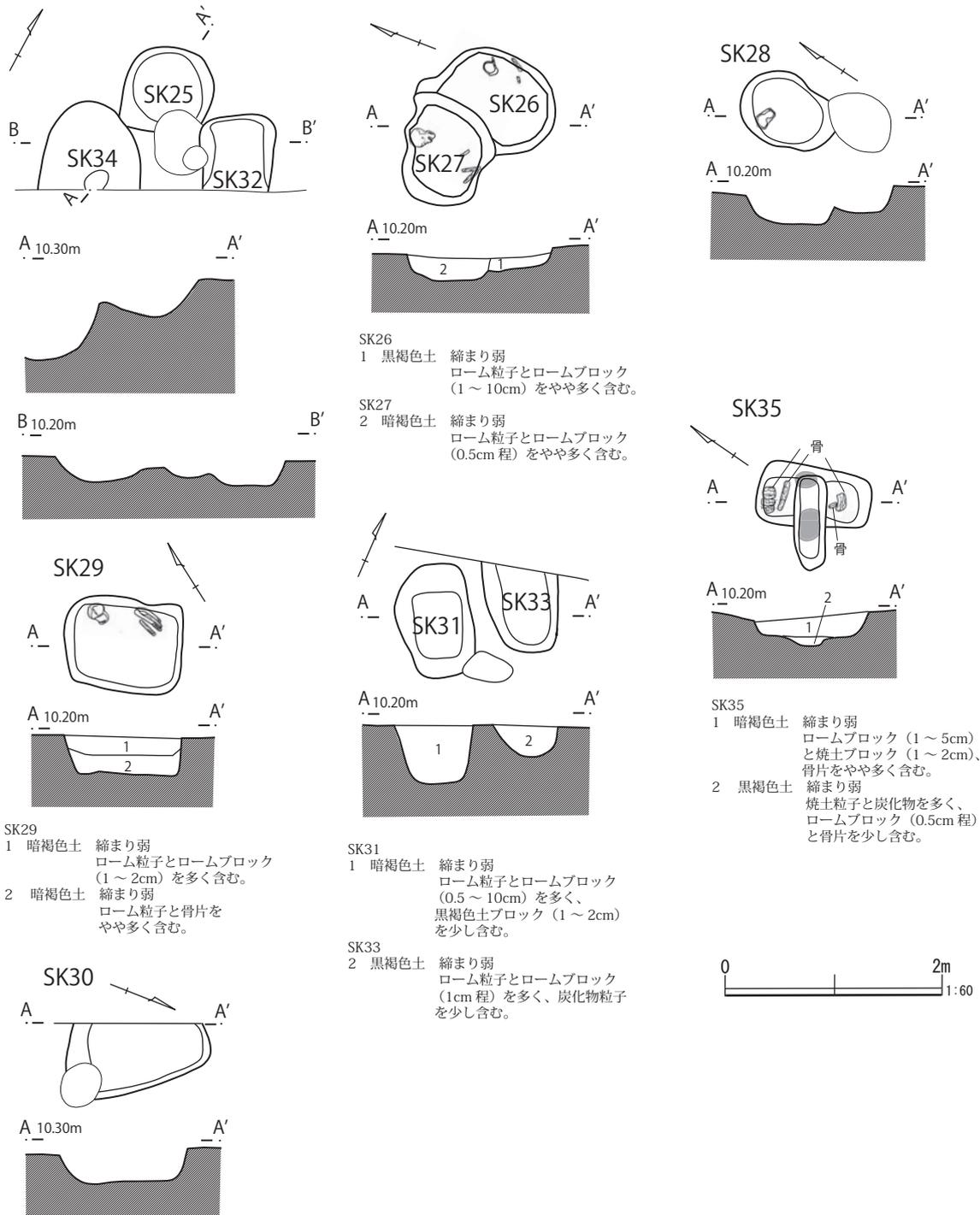
調査区南寄りに位置し、第7号住居跡を切り、第34号土坑に切られる。平面形は直径約0.8mの円形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は中央付近が浅く窪む。

出土遺物（第48図1）

土器 1は須恵器杯の底部片である。高台部は貼り付けによるもので、内面にはわずかに自然釉の付着が認められる。

●第26号土坑（第47図）

調査区中央よりやや南寄りに位置し、第7号住居跡を切り、第27号土坑に切られる。平面形は長径約1.1m、短径約0.8mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.1mを測り、底面は平坦である。頭蓋骨を含む人骨の出土が認められた。近世以降の墓壙と考えられる。



第47図 第25～35号土坑

●第27号土坑（第47・48図）

調査区中央よりやや西寄りに位置し、第7号住居跡と第26号土坑を切る。平面形は長径約1m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.2mを測り、底面は平坦である。頭蓋骨を含む人骨の出土が認められた。出土遺物として、銅銭も出土しており、近世以降の墓壙と考えられる。

出土遺物（第48図2～6）

土器 2～4は胴部片である。2は丈の低い隆帯に沿うように太い沈線が施される。杵状区画文を形成するものと考えられる。3は縦位の沈線と縄文、4は横位の沈線と縄文が認められる。

銭貨 5は元祐通宝である。初鑄年は元祐元年（1086年）の北宋銭であるが、本資料は銭径がやや小さいため、中世末期から近世初頭に流通していた模鑄銭の可能性が高い。文字の書体は篆書である。6は銅銭であるが、表面の摩耗が著しく文字等は判読不能である。5枚が重なった状態で出土しており、本来は銭差によって束ねられていたものと考えられる。

●第28号土坑（第47・48図）

調査区南西隅に位置し、第7号住居跡を切る。平面形は長径約0.9m、短径約0.7mの不整円形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.2mを測り、底面は平坦である。頭蓋骨を含む人骨の出土が認められた。出土遺物として、銅銭も出土しており、近世以降の墓壙と考えられる。

出土遺物（第48図7～10）

銭貨 7～10は永楽通宝である。初鑄年は永楽9年（1411年）の明銭であるが、16世紀後半から17世紀前半まで小型軽量の模鑄銭も出回っている。9は2枚が重なって出土した。

●第29号土坑（第47・48図）

調査区西寄りに位置し、第7号住居跡を切る。平面形は長径約1.1m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。頭蓋骨を含む人骨の出土が認められた。近世以降の墓壙と考えられる。

出土遺物（第48図11）

土器 11は胴部片で、縦位の沈線と櫛状施文具による縦位の条線文が認められる。

●第30号土坑（第47・48図）

調査区西寄りに位置し、第7号住居跡を切る。西側は調査区外であるため長径は不明であるが、短径約0.7mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。図化されていないが、人骨の出土が記録されている。出土遺物として、銅銭も出土しており、近世以降の墓壙と考えられる。

出土遺物（第48図12～15）

銭貨 12～14は永楽通宝である。初鑄年は永楽9年（1411年）の明銭であるが、16世紀後半から17世紀前半まで小型軽量の模鑄銭も出回っている。15は銅銭であるが、表面の摩耗が著しく文字等は判読不能である。あるいは無文銭の可能性もある。

●第31号土坑（第47・48図）

調査区北西寄りに位置し、第7号住居跡を切る。平面形は長径約1m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.6mを測り、底面は平坦である。図化されていないが、人骨の出土が記録されている。出土遺物として、銅銭も出土しており、近世以降の墓壙と考えられる。

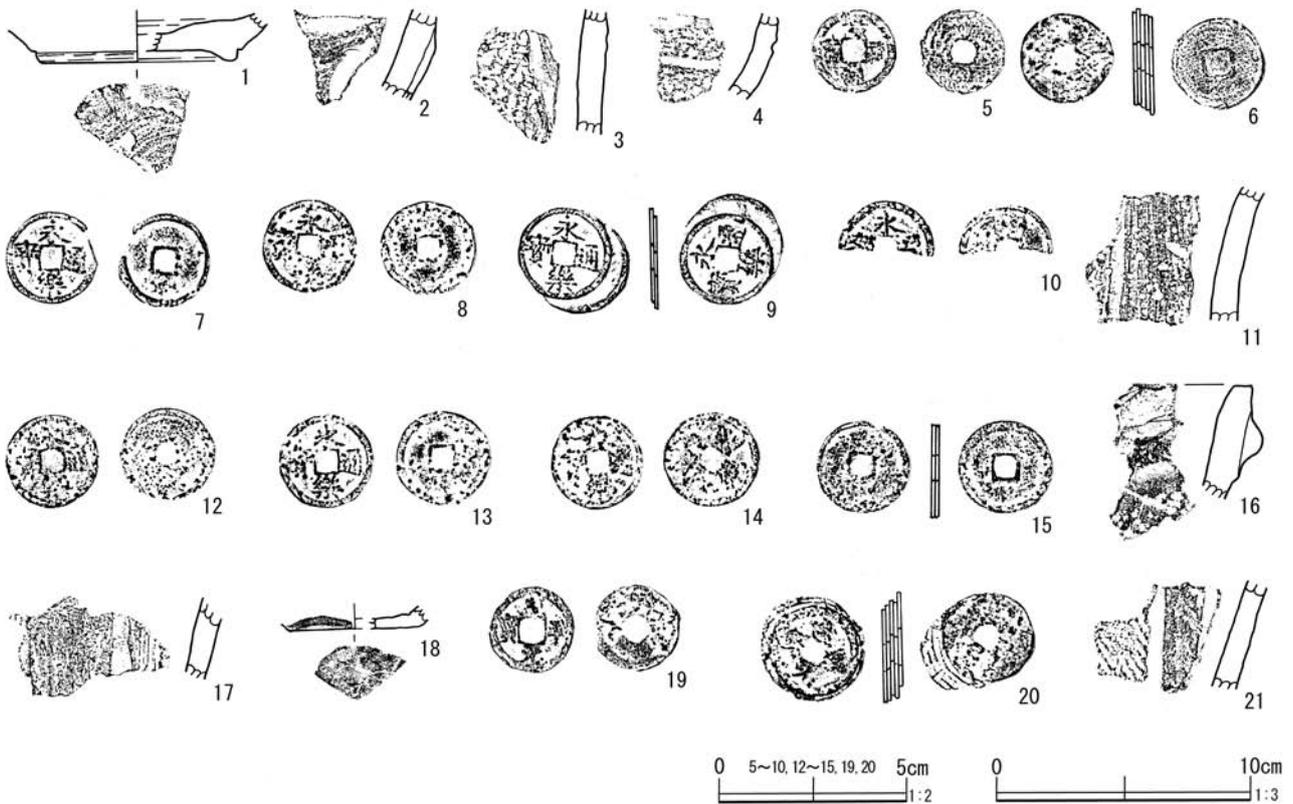
出土遺物（第48図16～19）

土器 16は口縁部片で太めの隆帯が貼り付けられる。下位には縄文が認められる。17は胴部片で、縦位の沈線と櫛状施文具による縦位の条線文が認められる。18はかわらけの底部片である。

銭貨 19は咸平元宝である。初鑄年は咸平元年（998年）の北宋銭である。20は景德元宝である。初鑄年は景德元年（1004年）の北宋銭である。5枚が重なった状態で出土しており、本来は銭差紐によって束ねられていたものと考えられる。銭差紐自体も出土している。

●第32号土坑（第47図）

調査区南隅に位置し、第7号住居跡を切る。南側は調査区外であるため長径は不明であるが、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。



第48図 土坑出土遺物（3）

●第33号土坑（第47・48図）

調査区北隅に位置し、第7号住居跡を切る。南側は調査区外であるため長径は不明であるが、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第48図21）

土器 21は胴部片で、縦位2条の沈線の引かれる磨消文帯と縄文帯が認められる。

●第34号土坑（第47図）

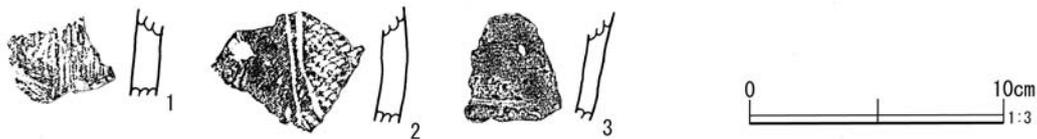
調査区南隅に位置し、第7号住居跡と第25号土坑を切る。南側は調査区外であるため長径は不明であるが、短径約0.9mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.6mを測り、底面は中央付近が浅く窪む。

●第35号土坑（第47図）

調査区中央よりやや北東寄りに位置し、第7号住居跡を切る。平面形は長径約1.1m、短径約0.9mのT字形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。長方形土坑が2基重なったような平面形をしており、長径約1.1m、短径約0.6mの東西方向の掘り込みには、人骨が認められた。中世のT字状火葬墓と考えられる。南北方向の掘り込みは長径約0.9m、短径約0.5mで、2箇所焼土の広がり認められた。南北方向の底面が東西方向の底面よりも下がるので、東西方向の掘り込みは墓本体へ空気供給用と考えられる。

(4) ピット（第43図）

検出されたピットは18基を数えるが、遺物の出土は僅かに認められるが帰属時期は判然としない。ピットの計測値は第13表に示した通りである。



第49図 ピット出土遺物

第13表 赤砂利遺跡（第7地点）ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
1	74	(22)	15	7	26	24	33	13	52	(20)	11
2	30	20	24	8	46	36	68	14	32	30	36
3	38	30	49	9	44	34	56	15	26	20	36
4	60	(42)	8	10	(34)	36	21	16	32	32	24
5	36	28	17	11	26	24	15	17	(38)	(28)	36
6	(28)	28	13	12	30	26	59	18	(34)	(24)	35

※単位は全てcm

出土遺物 (第49図2・3)

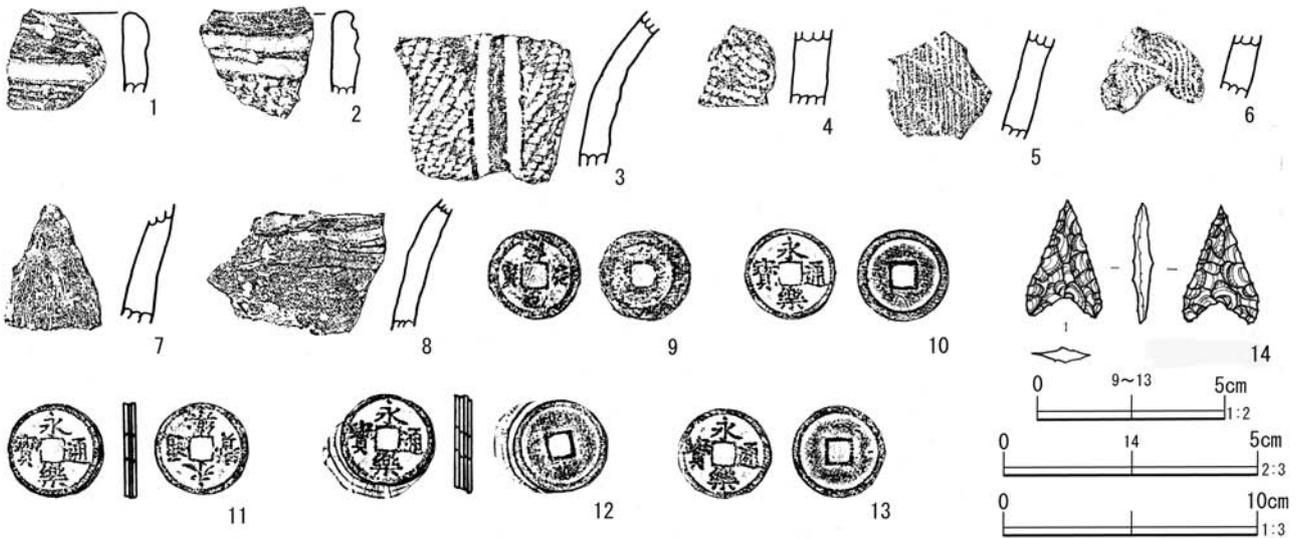
土器 2はP8出土で胴部片である。縦位2条の沈線の引かれる磨消文帯と単節LR縄文を縦位回転させた縄文帯が観察される。3はP9出土で焙烙の体部片である。

(5) 調査区出土遺物 (第50図)

土器 1・2は口縁部片である。1は横位に1条の沈線が引かれ、2は横位に引かれた2条の沈線と縄文が認められる。3・4は縄文が施される胴部片である。3は縦位2条の沈線の引かれる磨消文帯と単節RL縄文を縦位回転させた縄文帯が観察される。5・6は櫛状施文具による条線文が施される胴部片である。5は縦位の条線文が施される。6の条線文は、櫛状施文具をコンパス状にローリングさせながら施文している。7・8は無文の胴部片である。

石器 14は凹基無茎の石鏃で、両側縁に規則的な剥離が施される。

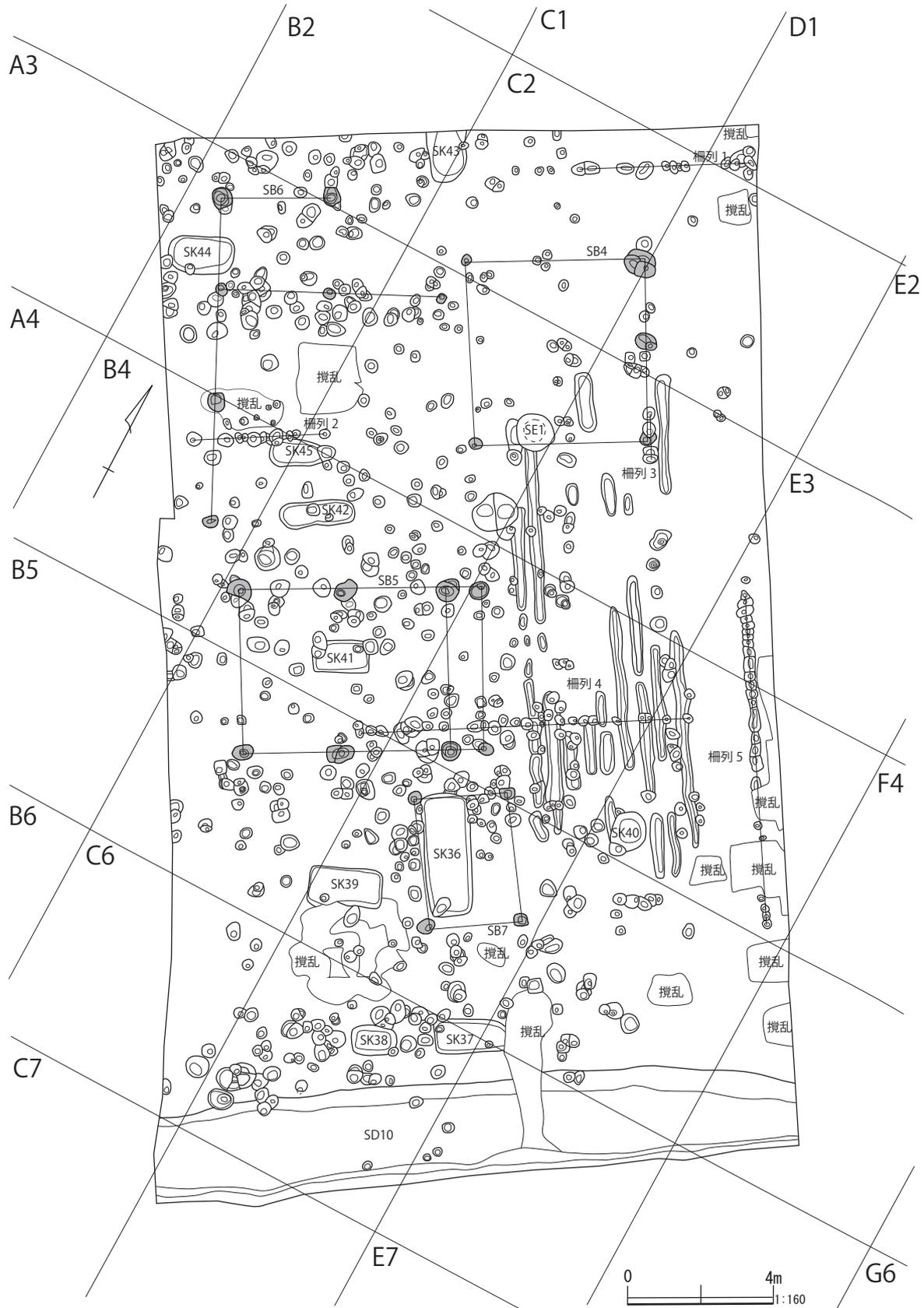
銭貨 9は祥符通宝である。初鑄年は大中祥符2年(1009年)の北宋銭であるが、16世紀後半から17世紀前半まで小型軽量の模鑄銭も出回っている。10~13は永楽通宝である。初鑄年は永楽9年(1411年)の明銭であるが、16世紀後半から17世紀前半まで小型軽量の模鑄銭も出回っている。11は3枚、12は4枚が重なった状態で出土しており、本来は銭差紐によって束ねられていたものと考えられる。



第50図 調査区出土遺物 (1)

第14表 赤砂利遺跡 (第7地点) 出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
50	14	調査区	石鏃	チャート	2.3	1.5	0.4	0.8	



第51図 赤砂利遺跡（第10地点）全測図

4 第10地点の遺構と遺物

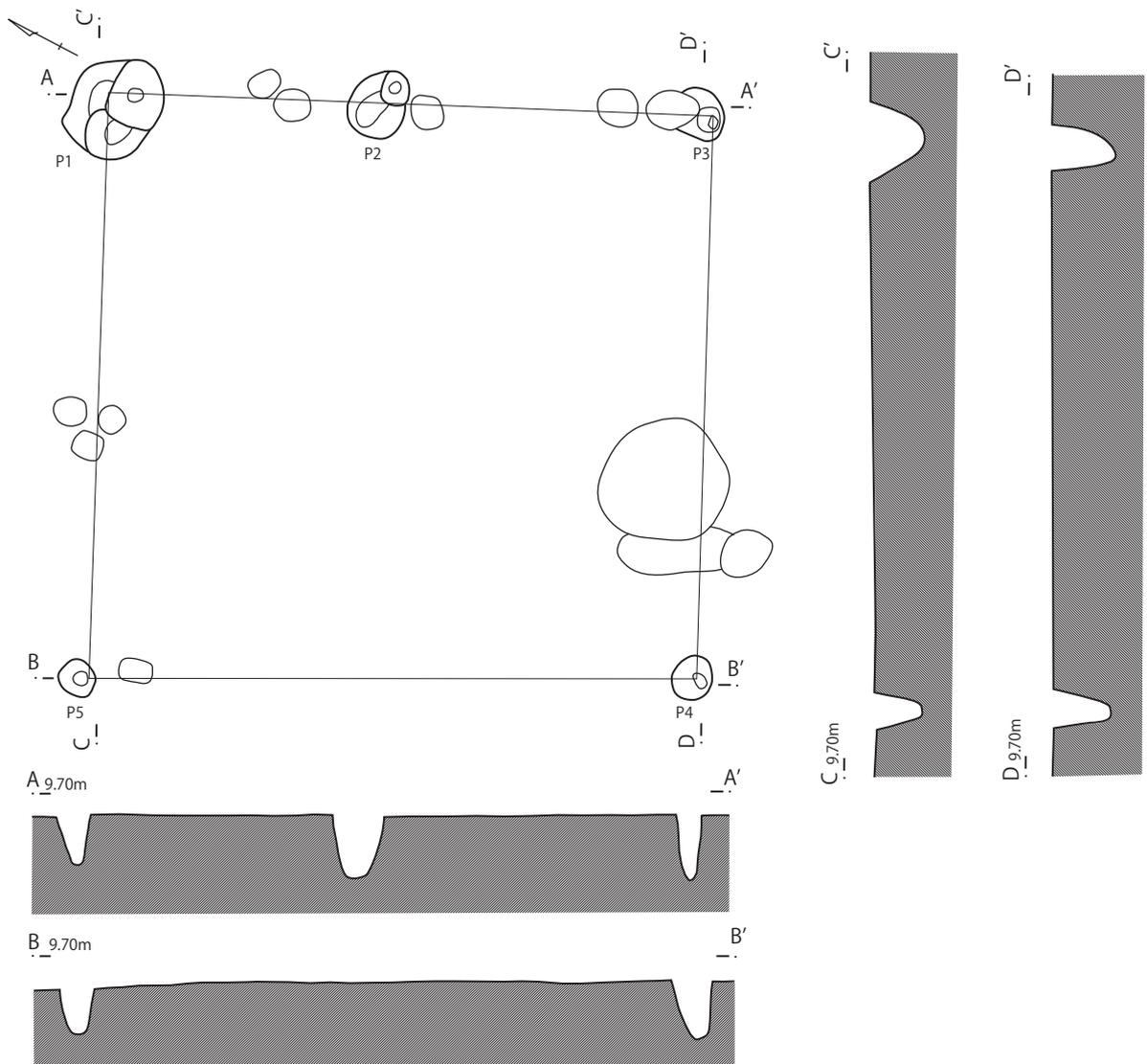
(1) 掘立柱建物跡

●第4号掘立柱建物跡 (第52図)

C2・3・D2・3グリッドに位置する。桁行1間、梁行1間の側柱建物であるが、東桁行のP1・3間にもみ間柱(P2)の痕跡が認められる。主軸方位はN-35°-Wを指す。桁行約5m、梁行約4.7mを測る。柱穴の規模は第15表のとおりである。

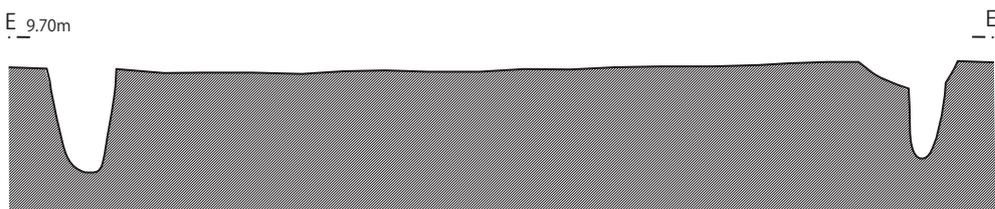
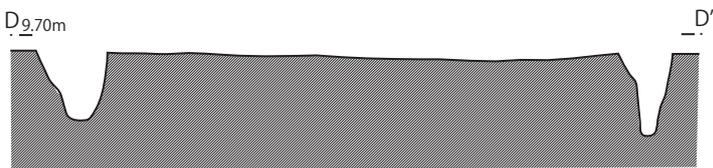
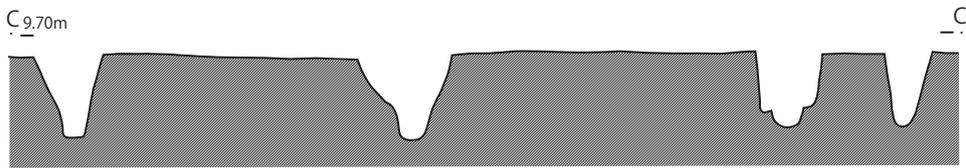
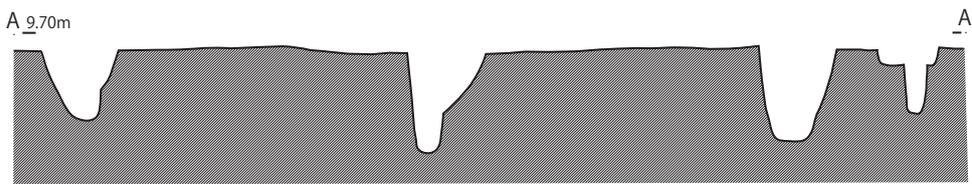
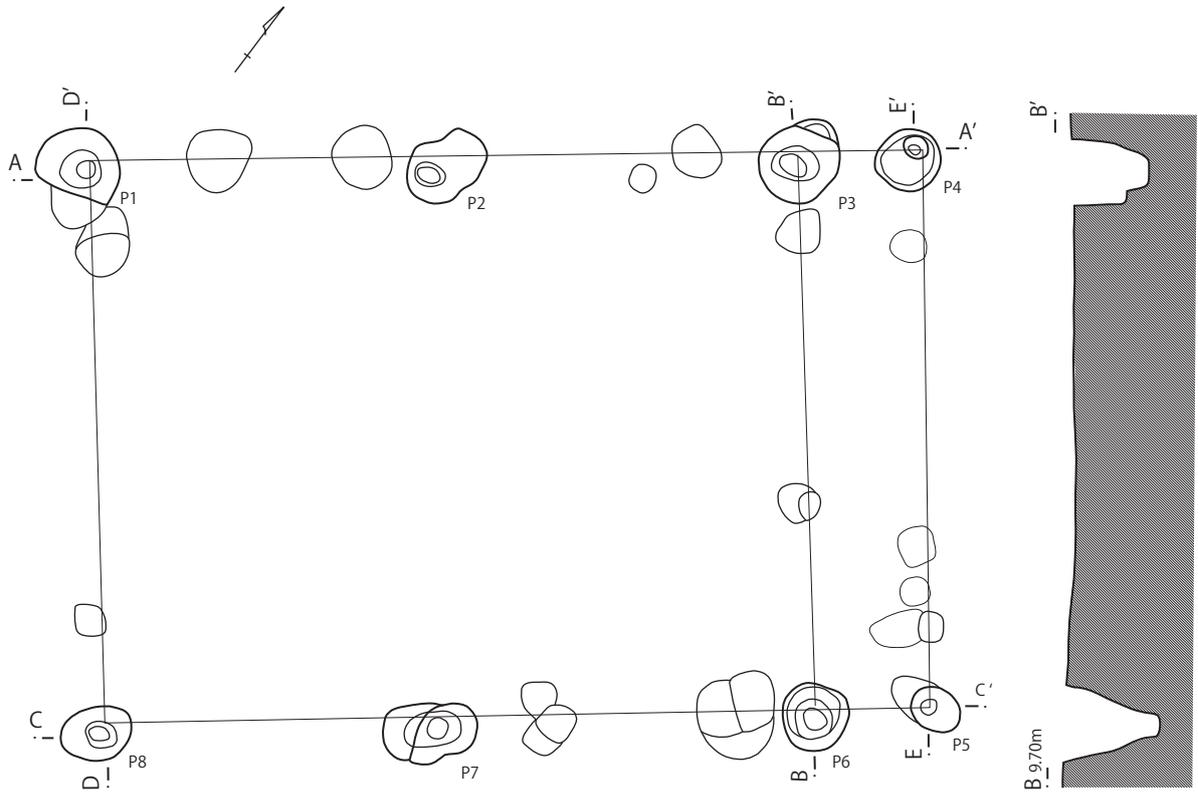
●第5号掘立柱建物跡 (第53図)

C4・5・D4・5グリッドに位置する。桁行2間、梁行1間の側柱建物であるが、東側に庇が付く。主軸方位はN-53°-Eを指す。桁行約5.6m、梁行約4.5mを測り、庇と母屋との間(P3・4間、P5・6間)は、約1m離れる。柱穴の規模は第15表のとおりである。



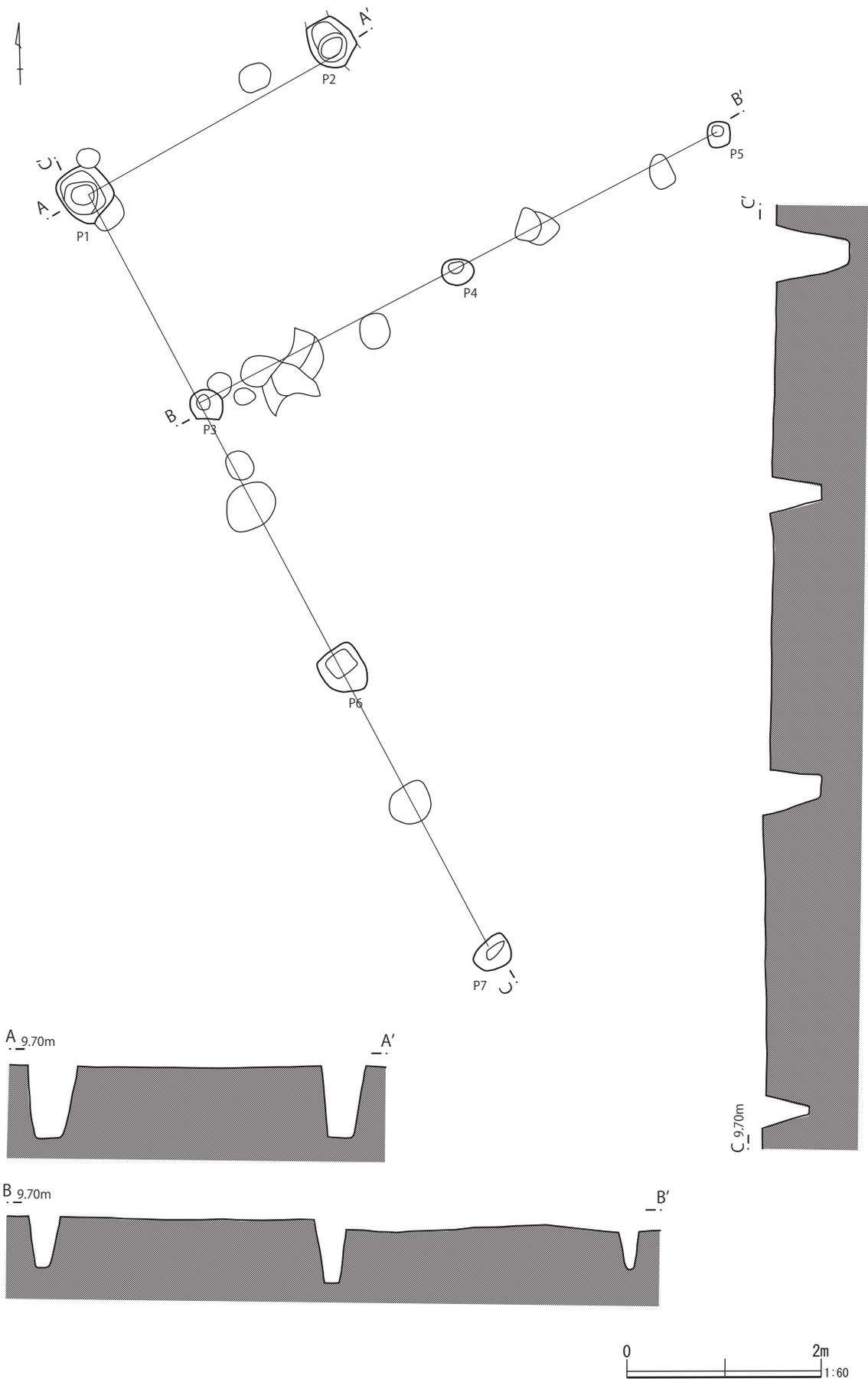
第52図 第4号掘立柱建物跡



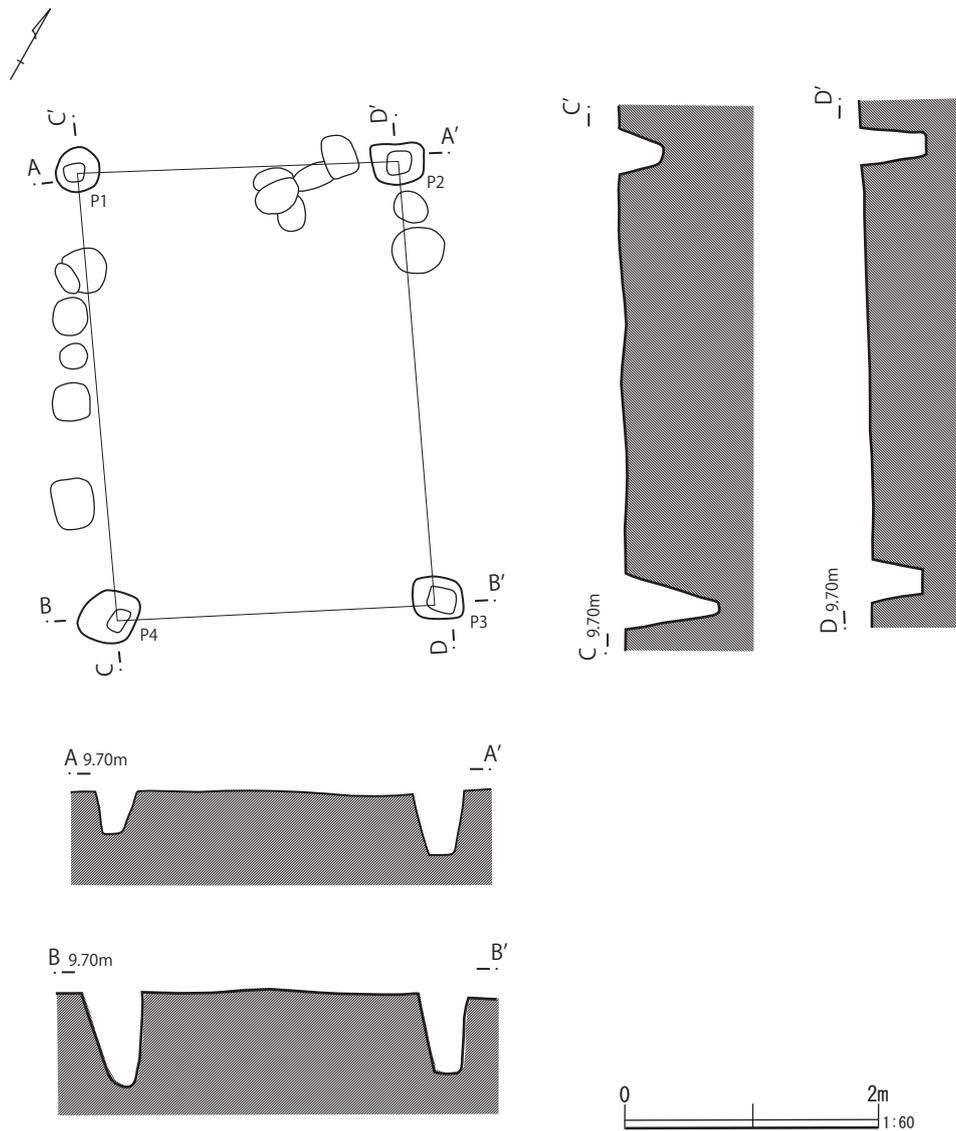


第53图 第5号掘立柱建物跡





第54图 第6号掘立柱建物跡



第55図 第7号掘立柱建物跡

第15表 赤砂利遺跡（第10地点）掘立柱建物跡ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
SB1 P1	89	70	78	SB2 P8	58	41	65
SB1 P2	60	47	51	SB3 P1	55	50	76
SB1 P3	36	34	47	SB3 P2	31	28	75
SB1 P4	38	32	46	SB3 P3	35	(28)	53
SB1 P5	30	27	37	SB3 P4	32	26	66
SB2 P1	65	50	56	SB3 P5	26	23	40
SB2 P2	69	50	77	SB3 P6	50	45	58
SB2 P3	70	58	75	SB3 P7	40	32	49
SB2 P4	50	48	50	SB4 P1	36	33	54
SB2 P5	40	31	57	SB4 P2	40	30	71
SB2 P6	56	52	61	SB4 P3	40	33	61
SB2 P7	73	50	66	SB4 P4	44	40	74

※単位は全てcm

●第6号掘立柱建物跡（第54図）

B2・3・4・C3グリッドに位置する。F字形に7基の柱穴が認められる。桁行3間、梁行2間の側柱建物で、主軸方位はN—33°—Wを指す。桁行約9m（P1・3・6・7間）、梁行約6m（P3・4・5間）を測る。柱穴の規模は第15表のとおりである。塀や柵などの遮蔽物の可能性も想定される。

●第7号掘立柱建物跡（第55図）

D4・5グリッドに位置する。桁行1間、梁行1間の側柱建物で、主軸方位はN—55°—Wを指す。桁行約3.5m、梁行約2.5mを測る。柱穴の規模は第15表のとおりである。平面形態から門等の構造物である可能性が高い。

(2) 土坑

●第36号土坑（第56・62図）

D5グリッドに位置する。平面形は長径約3.4m、短径約1.3mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第62図1～3）

土器 1はかわらけで、口径6.6cm、底径3.6cmを測る。口唇部にタールの付着が認められ、灯明皿として用いられたものと考えられる。2は縁釉小皿の口縁部片である。3は播鉢の口縁部片である。

●第37号土坑（第56図）

D5・6・E5・6グリッドに位置する。東端を攪乱に切られるが、検出部分から平面形は長径約2m、短径約1mの長方形を呈すものと推定される。確認面からの深さは浅く約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第38号土坑（第56図）

D6グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第39号土坑（第56図）

C5・D5グリッドに位置する。平面形は長径約2m、短径約1.1mの長方形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第40号土坑（第56図）

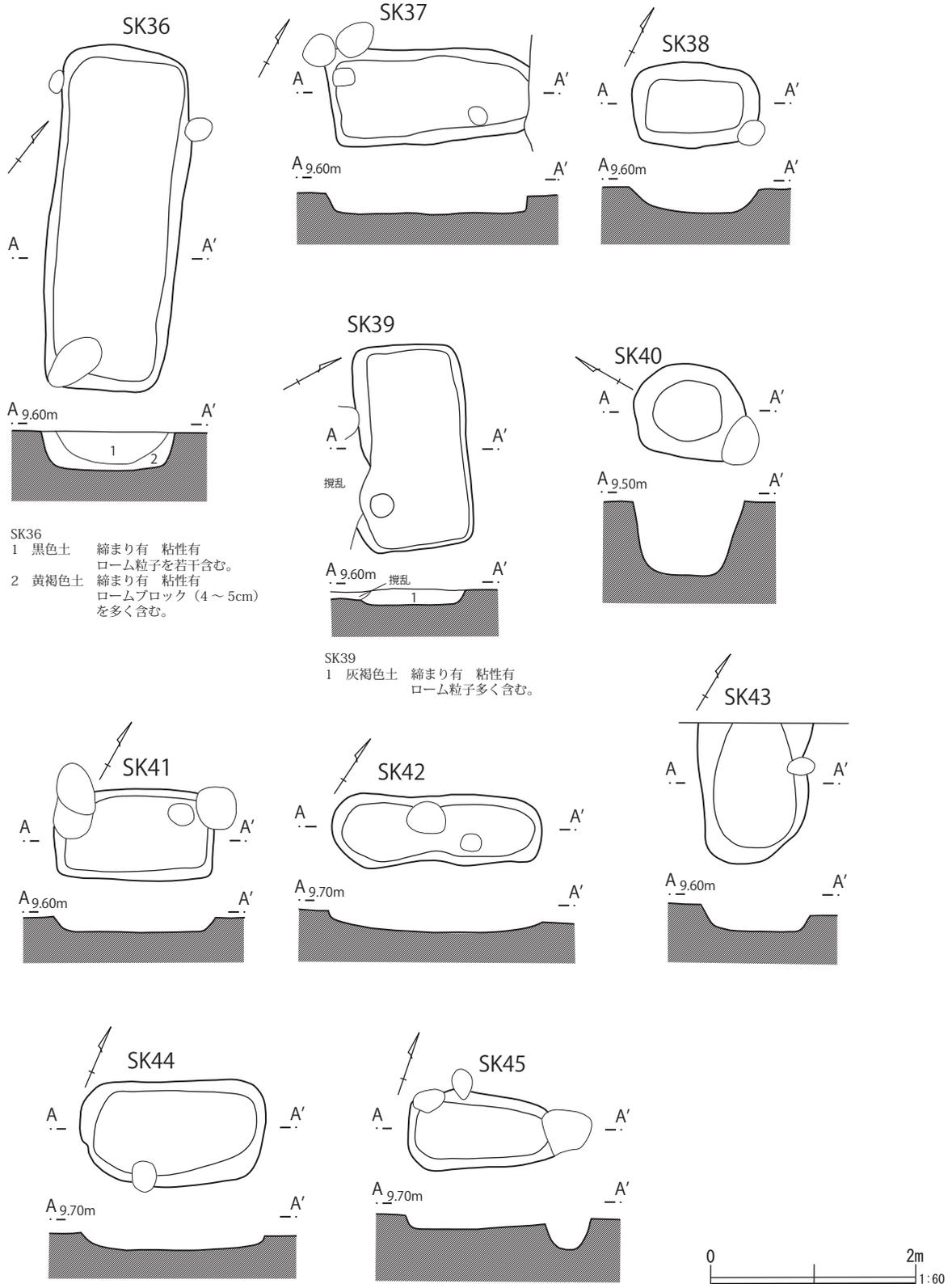
E4グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約0.9mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.7mを測り、底面は平坦である。

●第41号土坑（第56図）

C4グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第42号土坑（第56図）

C4グリッドに位置する。平面形は長径約2m、短径約0.7mの長楕円形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.2mを測り、底面は平坦である。



第56図 第36～45号土坑

●第43号土坑（第56図）

B2・C2グリッドに位置する。北側は調査区外であるため長径は不明であるが、短径約1.1mの長楕円形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第44号土坑（第56図）

B2グリッドに位置する。平面形は長径約1.8m、短径約1.1mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.1mを測り、底面は平坦である。

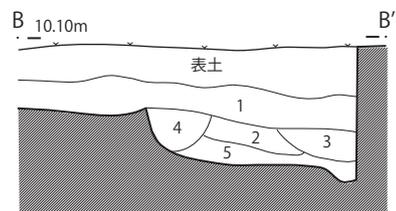
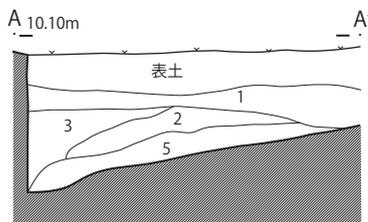
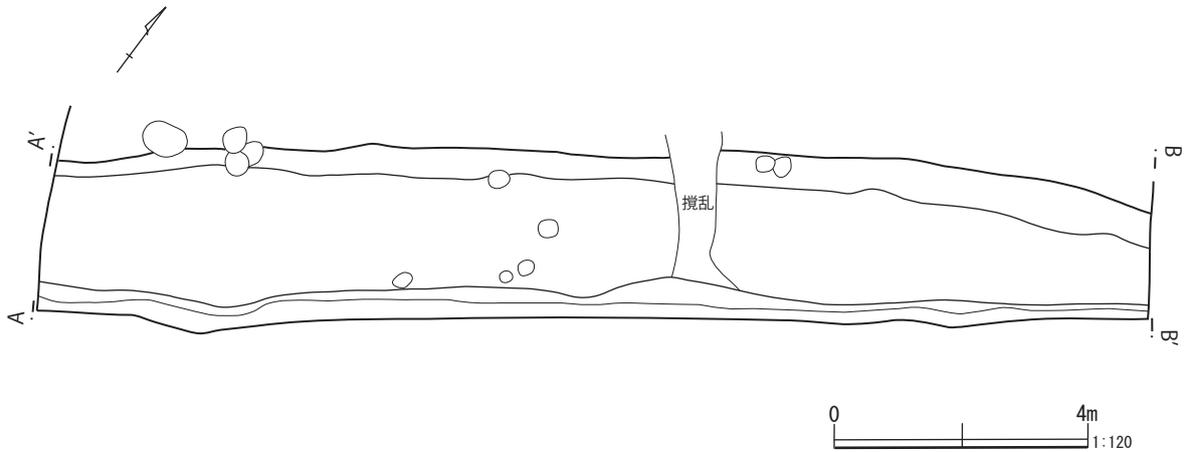
●第45号土坑（第56図）

B4・C3・4グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面からの深さは浅く約0.2mを測り、底面は平坦である。

(3) 溝跡

●第10号溝跡（第57・62図）

C6・7・D6・7・E5・6・F5・6グリッドに位置する。調査区内で確認できる部分では、西から東へ約8.2m延伸し、西・東側とも調査区外へ延びる。第2地点で確認された第1号溝跡と同一のものと考えられる。



SD10

- 1 黒褐色土 縮まりやや有 粘性有 ロームブロック粒子を若干含む。
- 2 褐色土 縮まり有 粘性有 ロームブロックを若干含む。鉄分が微量に沈着する。
- 3 黒色土 縮まり有 粘性有 ローム粒子を少し含む。
- 4 灰褐色土 縮まり有 粘性有 ローム粒子を多く含む。
- 5 黄褐色土 縮まり有 粘性有 ロームブロック（4～5cm程度）を多く含む。



第57図 第10号溝跡

調査区での最大幅は1.5mを測るが、溝跡の南隅の上端が調査区内で検出されておらず、南側は調査区外へ若干延びるようである。確認面からの深さは約0.8mを測る。本調査地点での出土遺物は陶器塚のみであるが、第2地点においては、遺構内から古瀬戸後期の陶器のほか内耳土器が出土しており、溝跡の廃絶時期は17世紀以降と推定されている。

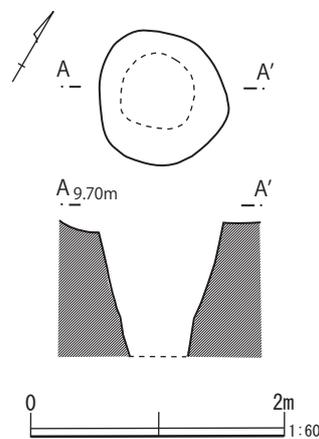
出土遺物（第62図4）

土器 4は陶器塚の底部片である。

（4）井戸跡

●第1号井戸跡（第58図）

C3・D3グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約1mの不整形円形を呈す。開口部が狭く直線的に落ち込む。近世以降の所産と考えられる。



第58図 第1号井戸跡

（5）柵列

●第1号柵列（第59図）

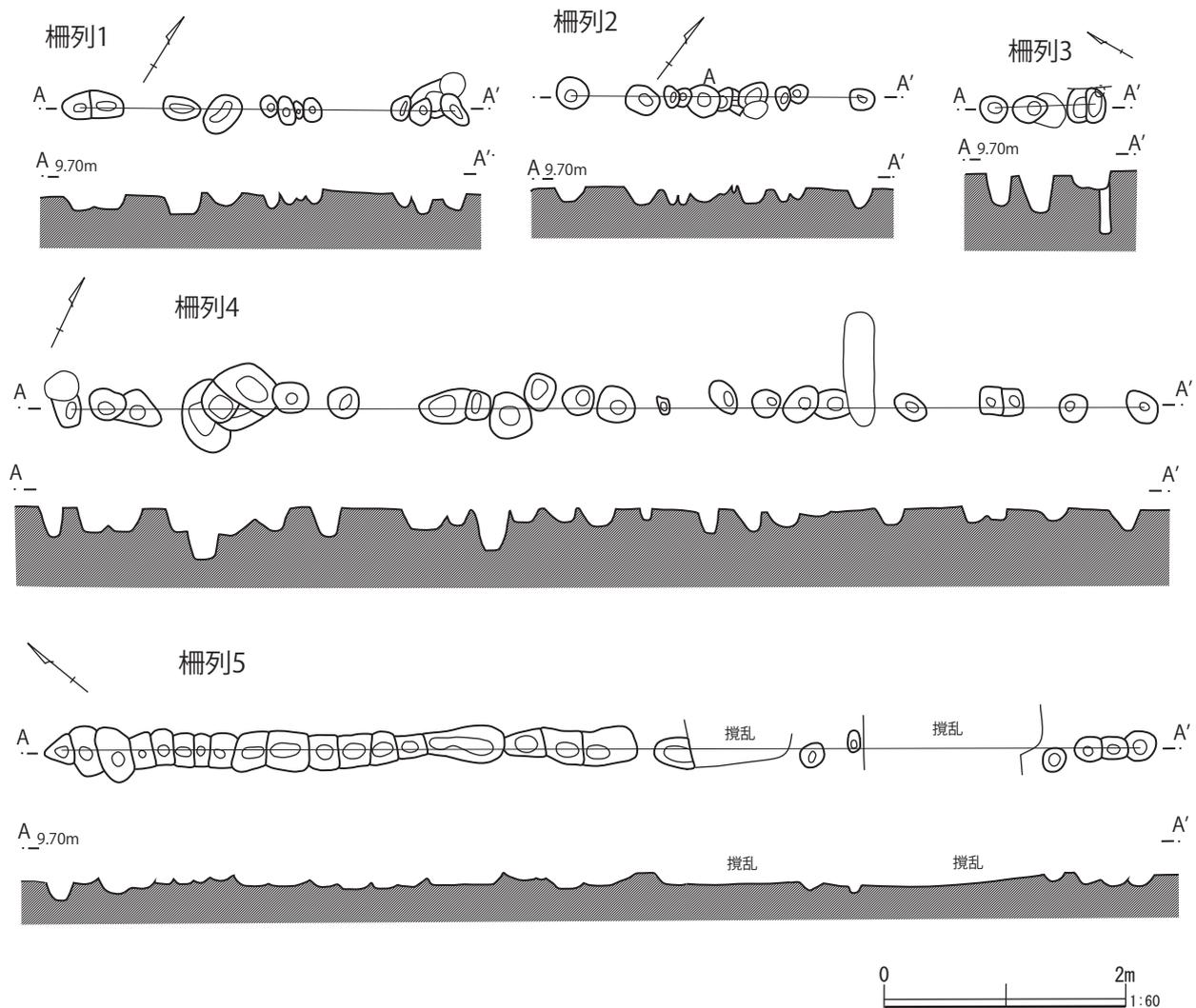
C2・D1・2グリッドに位置する。延長約3.3mを測る。主軸方位はN—60°—Eを指す。柱穴の並びは、調査区南端の第10号溝跡の走行方向と平行する。

●第2号柵列（第59図）

B3・4・D3グリッドに位置する。延長約2.6mを測る。主軸方位はN—55°—Eを指す。柱穴の並びは、調査区南端の第10号溝跡の走行方向と平行する。

●第3号柵列（第59図）

D3グリッドに位置する。延長約1.1mを測る。主軸方位はN—30°—Wを指す。柱穴の並びは、調査区南端の第10号溝跡の走行方向と直交する。



第59図 第1～5号柵列

●第4号柵列（第59図）

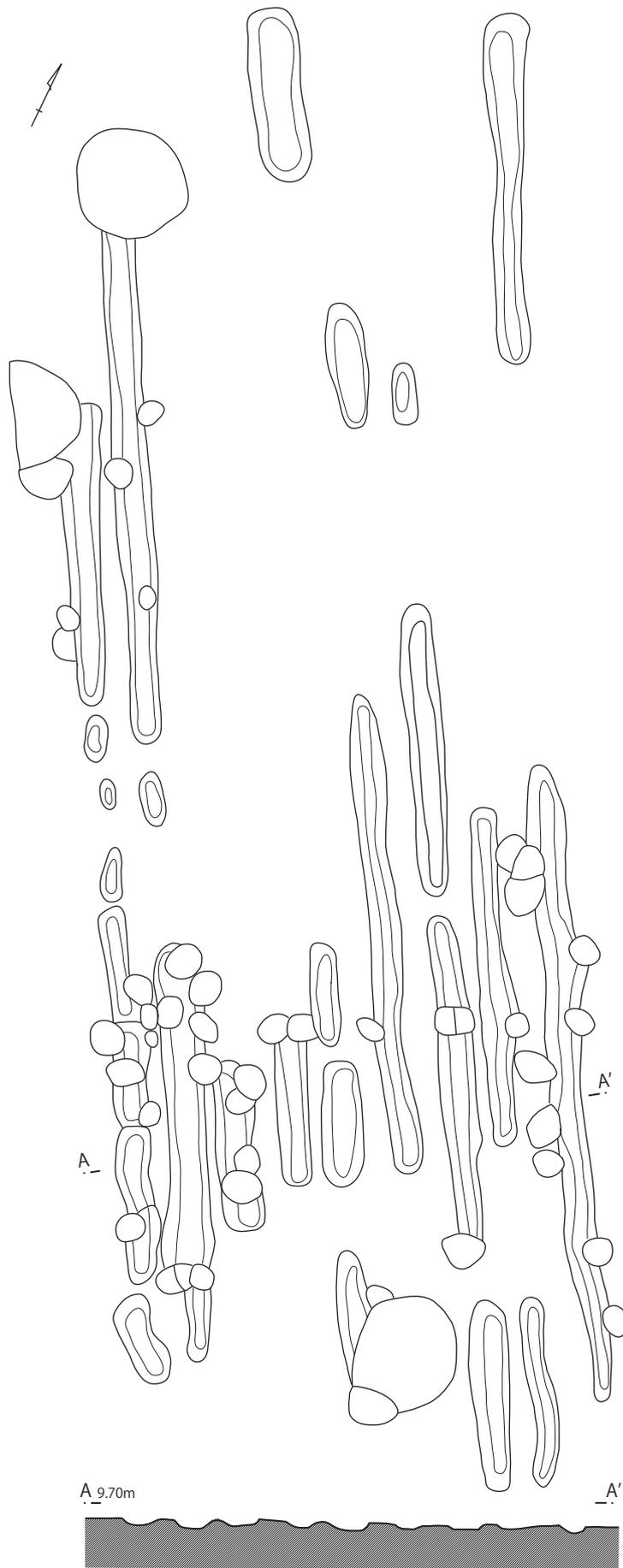
C4・D4・D1・E4グリッドに位置する。延長約9.1mを測る。主軸方位はN—66°—Eを指す。柱穴の並びは、調査区南端の第10号溝跡の走行方向と平行する。

●第5号柵列（第59図）

E3・4グリッドに位置する。延長約9.2mを測る。主軸方位はN—50°—Wを指す。柱穴の並びは、調査区南端の第10号溝跡の走行方向と直交する。

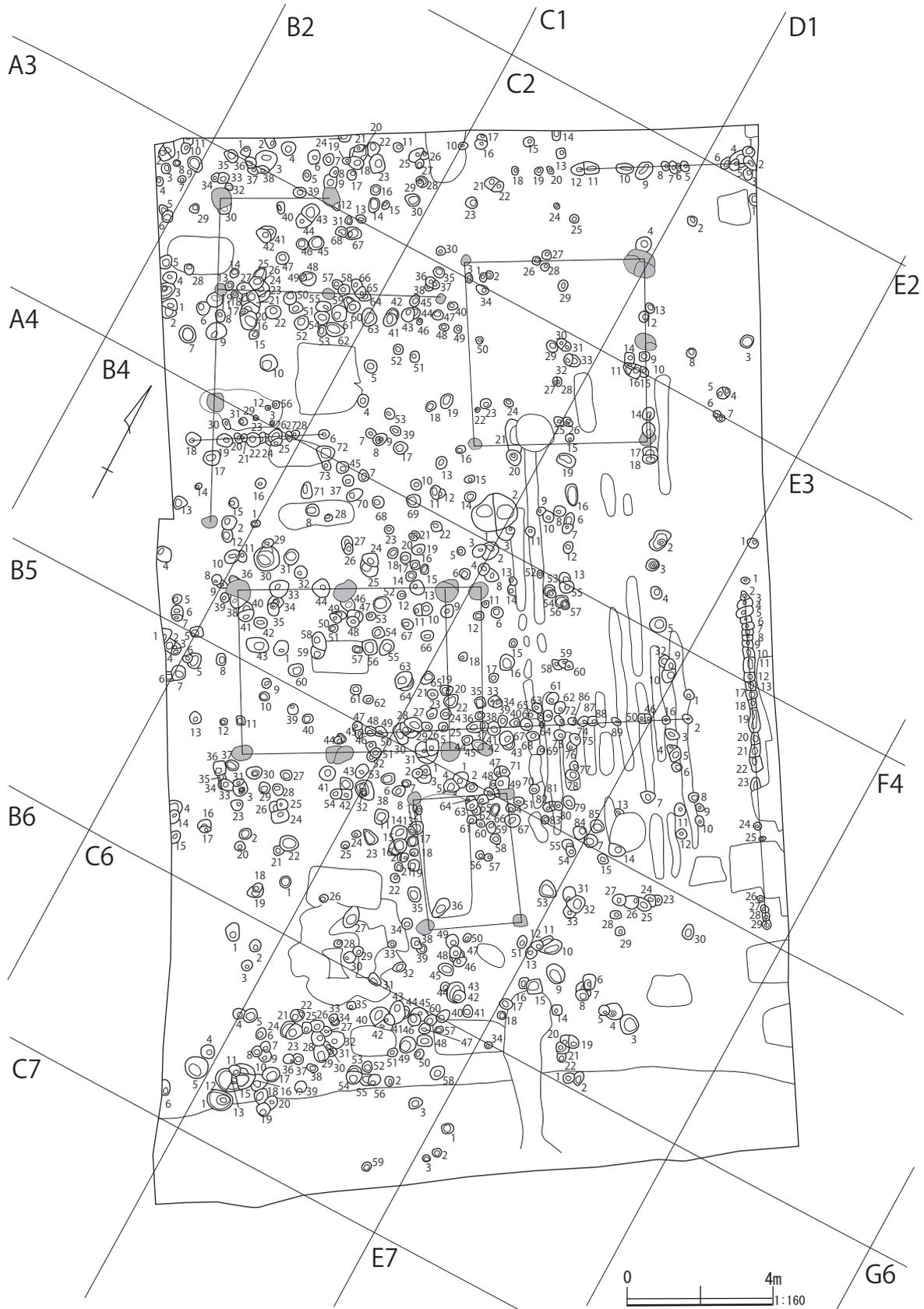
(6) 畝跡（第60図）

畑作による畝跡をC3・D2・3・4・5・E4グリッドで確認した。調査区内の南北約13.7m、東西4.5mの範囲で南北方向に9条が延伸するのが認められた。調査区での最大幅は0.5mを測り、確認面からの深さは浅く約0.1mを測る。畝の間隔は0.1～0.4mと狭いものの、延伸する方位は概ねN—30°—Wを指し、揃っている。畑の作り直しが行われたどうかは、現状では不明である。



第60図 畝跡

0 2m 1:60



第61図 ピット配置図

(7) ピット (第61・62図)

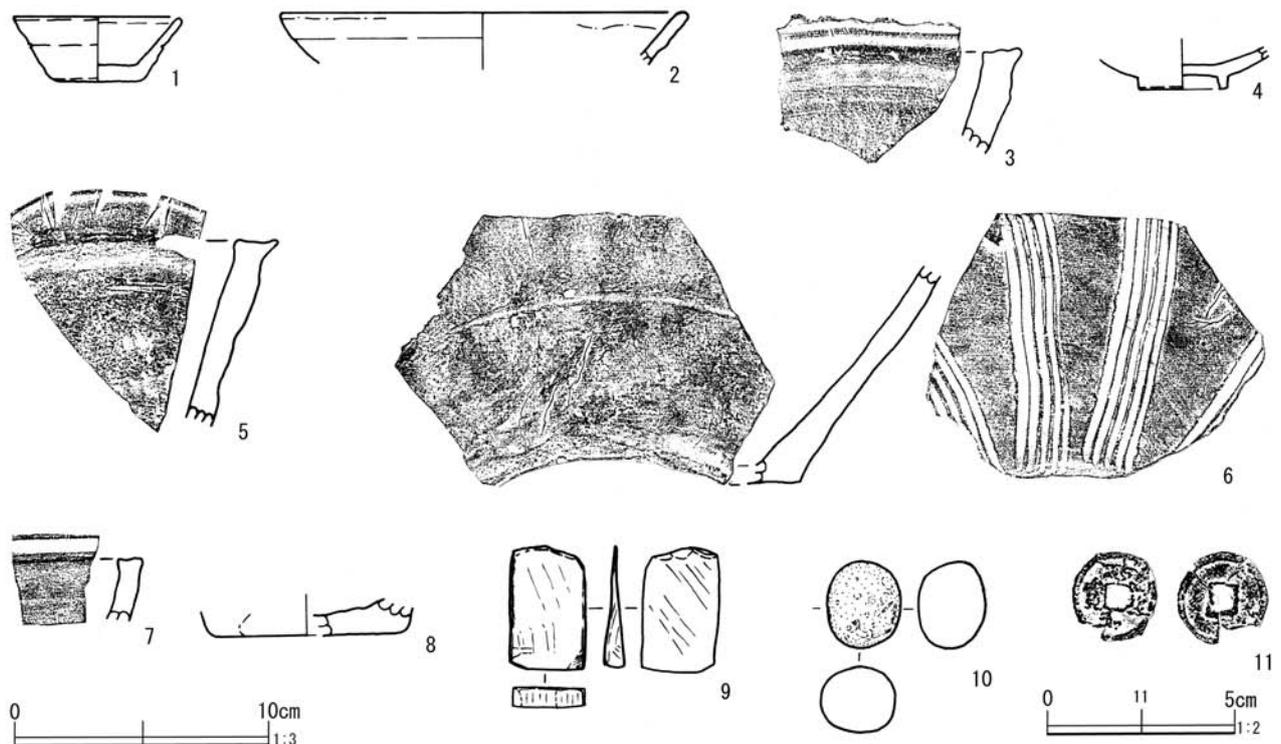
検出されたピットは696基を数える。遺物の出土は僅かに認められるが帰属時期は判然としない。ピットの計測値は第16表に示した通りである。

出土遺物 (第62図5~11)

土器 5はB3グリッドP1出土、6はC4グリッドP1出土、7はC5グリッドP1出土で、いずれも播鉢である。5・7は口縁部片、6は胴部下半から底部片である。胴部内面に播面が認められる。8はD2グリッドP2出土で陶器壺の底部片である。外面に自然釉の付着が認められる。

石器 9はD4グリッドP4出土で砥石である。全面に使用痕が認められ、よく使い込まれている。上半の磨滅が著しい。10はD4グリッドP5出土で軽石である。

銭貨 11はD6グリッドP29出土で政和通宝である。初鑄年は政和元年(1111年)の北宋銭である。文字の書体は分楷である。



第62図 土坑・溝跡・ピット出土遺物

(8) グリッド出土遺物 (第63図)

土器 1はD2グリッド出土、2はD3グリッド出土で、いずれも播鉢の口縁部片である。3はC4グリッド出土で土師器の底部片である。内面に刷毛目の痕跡が認められる。4は調査区内出土で磁器碗の底部片である。染付が施される。5は調査区内出土で陶器碗の底部片である。

土製品 6はD5グリッド出土で鬼面を模した泥面子である。

石器 7はD2グリッド出土で砥石である。全面に使用痕が認められ、よく使い込まれている。

第16表 赤砂利遺跡（第10地点）ピット計測表

グリッド	番号	長径	短径	深さ	グリッド	番号	長径	短径	深さ	グリッド	番号	長径	短径	深さ
A3	1	40	(28)	26	B3	16	50	45	51	B4	5	30	24	12
	2	38	(25)	38		17	26	(14)	42		6	(22)	34	21
	3	26	26	50		18	(30)	(14)	11		7	30	20	20
	4	25	(15)	24		19	21	18	9		8	30	27	31
	5	24	(18)	12		20	(50)	(22)	30		9	(22)	21	13
	6	32	28	45		21	55	(32)	25		10	46	31	17
	7	22	20	10		22	40	36	67		11	31	26	15
	8	18	18	8		23	(37)	(18)	16		12	(32)	27	11
	9	46	38	17		24	(38)	(19)	34		13	39	36	17
	10	32	26	32		25	(28)	(32)	19		14	20	17	13
	11	26	(14)	26		26	(38)	(32)	41		15	30	24	21
B2	1	28	24	23		27	(44)	32	41		16	30	28	26
	2	(30)	23	13		28	28	24	38		17	44	39	20
	3	57	52	54		29	25	22	31		18	40	37	18
	4	40	38	31		30	36	(19)	26		19	40	33	22
	5	28	20	35		31	24	20	12		20	27	19	22
	6	40	33	27		32	24	17	15		21	22	(15)	17
	7	32	28	29		33	32	28	45		22	(36)	40	18
	8	30	22	44		34	26	(16)	18		23	39	(15)	9
	9	(36)	36	36		35	40	30	38		24	30	(8)	10
	10	(50)	44	55		36	31	28	37		25	31	21	36
	11	27	26	24		37	32	26	29		26	(22)	33	25
	12	(20)	21	39		38	(31)	10	43		27	30	20	18
	13	26	24	14		39	35	26	28		28	23	21	15
	14	40	29	13		40	30	21	33		29	15	13	6
	15	27	18	7		41	(51)	(45)	19		30	30	17	13
	16	30	26	21		42	45	30	41		31	24	22	22
	17	28	26	42		43	(47)	42	30		26	(30)	(30)	23
	18	(36)	32	42		44	39	(32)	28		27	36	(23)	38
	19	20	16	36		45	40	36	7		28	(21)	(12)	44
	20	(36)	50	17		46	32	30	35		25	33	16	55
21	29	17	35	47	36	34	13	25	36	29	25			
22	41	35	19	48	42	37	34	25	46	38	25			
23	50	37	28	49	19	16	13	25	C2	1	22	18	10	
24	33	(17)	36	50	36	30	46	26		2	22	18	12	
25	50	(30)	22	51	36	(30)	23	26		3	26	18	9	
26	22	20	15	52	40	35	34	42		4	42	41	55	
27	26	22	37	53	30	22	11	30		5	30	22	19	
28	31	30	16	54	39	38	34	23		6	23	10	12	
29	19	19	46	55	40	28	30	34		7	36	20	18	
30	40	31	17	56	20	19	15	30		8	26	20	21	
31	28	18	23	57	26	(20)	18	15		9	53	36	19	
B3	1	38	28	42	58	36	30	53		10	46	28	27	
	2	(27)	(32)	20	59	(18)	30	22		11	(40)	34	16	
	3	(34)	38	27	60	38	32	42		12	(36)	31	21	
	4	36	30	41	61	46	38	39		13	27	26	28	
	5	37	21	21	62	50	38	31		14	(26)	23	28	
	6	38	35	20	63	50	40	17	15	30	27	15		
	7	50	44	20	64	(32)	(19)	17	16	(26)	31	37		
	8	32	28	25	65	32	25	27	17	28	14	33		
	9	57	47	30	66	(28)	29	20	18	22	19	13		
	10	48	46	50	67	(40)	34	42	19	22	22	9		
	11	40	38	29	68	29	26	37	20	26	14	15		
	12	14	14	22	B4	1	22	18	8	21	34	26	37	
	13	26	23	22		2	40	38	23	22	36	25	35	
	14	26	25	26		3	13	12	14	23	31	30	12	
	15	27	22	39		4	40	(37)	15	24	17	16	27	

グリッド	番号	長径	短径	深さ
C2	25	24	23	19
	26	24	22	24
	27	26	24	19
	28	22	21	25
	29	28	26	27
	30	28	26	22
C3	1	(60)	(54)	31
	2	(50)	(60)	37
	3	(47)	(32)	38
	4	35	31	42
	5	38	32	25
	6	30	26	21
	7	(27)	24	14
	8	16	10	40
	9	40	31	35
	10	32	28	12
	11	38	(24)	20
	12	(26)	(15)	15
	13	37	29	19
	14	32	27	10
	15	28	21	25
	16	28	23	17
	17	34	34	12
	18	30	24	9
	19	41	31	26
	20	44	17	45
	21	(85)	(30)	13
	22	13	12	23
	23	23	24	24
	24	24	20	14
	25	26	26	32
	26	(28)	24	24
	27	23	12	24
	28	26	(10)	14
	29	34	28	17
	30	25	(22)	11
	31	28	(20)	10
	32	33	23	54
	33	(20)	32	29
34	34	24	13	
35	30	28	15	
36	(26)	(23)	22	
37	(14)	(24)	16	
38	(24)	(14)	12	
39	32	20	6	
40	24	22	23	
41	40	36	40	
42	(13)	35	18	
43	42	32	52	
44	(14)	(28)	13	
45	34	24	38	
46	18	14	—	
47	30	27	26	
48	26	20	10	
49	22	21	10	
50	22	20	15	
51	30	26	22	
52	28	26	25	
53	32	24	16	

グリッド	番号	長径	短径	深さ
C4	1	41	39	66
	2	50	45	27
	3	39	30	18
	4	32	28	14
	5	26	22	12
	6	30	29	30
	7	30	25	13
	8	38	30	38
	9	39	32	37
	10	34	28	16
	11	32	23	22
	12	23	20	13
	13	42	36	66
	14	28	25	14
	15	28	20	6
	16	26	24	21
	17	31	25	17
	18	32	24	27
	19	40	28	23
	20	26	14	21
	21	30	(10)	7
	22	34	30	45
	23	25	24	20
	24	49	38	39
	25	(30)	45	36
	26	30	22	36
	27	(40)	30	18
	28	20	16	24
	29	34	25	31
	30	70	64	66
	31	42	36	56
	32	33	32	25
	33	52	48	35
	34	42	18	23
	35	(30)	30	22
	36	(30)	(12)	4
	37	30	30	23
	38	(42)	(28)	48
	39	26	25	42
	40	(21)	40	20
	41	42	32	31
	42	40	30	12
	43	60	40	23
	44	50	46	54
	45	38	30	26
	46	(27)	34	25
	47	(20)	44	40
	48	33	22	32
	49	(20)	(23)	10
	50	34	20	—
	51	26	20	16
	52	44	44	59
	53	23	22	17
	54	31	30	9
	55	46	34	49
	56	42	38	17
	57	25	20	26
	58	56	45	25
	59	(38)	(37)	41

グリッド	番号	長径	短径	深さ
C4	60	42	33	63
	61	27	23	15
	62	24	20	31
	63	54	40	65
	64	(46)	(12)	58
	65	48	30	24
	66	32	27	39
	67	36	26	17
	68	32	32	15
	69	38	32	27
	70	49	30	20
	71	44	30	24
	72	45	40	28
73	27	22	8	
C5	1	32	30	32
	2	36	29	18
	3	40	(28)	61
	4	(26)	(32)	52
	5	44	(26)	7
	6	28	24	27
	7	40	37	62
	8	34	25	46
	9	28	22	16
	10	26	24	12
	11	27	24	29
	12	20	18	9
	13	34	30	33
	14	37	(22)	57
	15	33	(20)	64
	16	38	(17)	19
	17	33	20	37
	18	26	22	39
	19	40	(16)	22
	20	28	25	25
	21	26	24	28
	22	50	46	61
	23	33	32	43
	24	48	(33)	56
	25	(24)	(19)	49
	26	(26)	(21)	—
	27	30	28	32
	28	32	29	36
	29	32	30	15
	30	43	35	32
	31	32	18	45
	32	24	17	53
33	(34)	31	61	
34	(23)	(10)	—	
35	(16)	(20)	18	
36	34	30	(20)	
37	38	24	26	
38	62	46	56	
39	28	28	33	
40	28	24	26	
41	41	40	16	
42	31	28	38	
43	(32)	34	41	
44	23	23	44	
45	27	(10)	4	

グリッド	番号	長径	短径	深さ
C5	46	(24)	20	24
	47	28	24	20
	48	28	26	21
	49	(34)	30	22
	50	28	22	10
	51	30	26	33
	52	28	16	17
	53	42	31	39
54	30	28	58	
C6	1	49	36	58
	2	32	31	26
	3	30	26	18
	4	38	36	36
	5	60	57	28
	6	42	(20)	53
D1	1	32	30	9
	2	45	24	22
	3	28	22	13
	4	(40)	(42)	12
	5	35	27	32
	6	34	22	20
D2	1	34	(26)	9
	2	28	25	43
	3	35	30	6
	4	28	15	7
	5	30	(20)	11
	6	20	18	9
	7	20	(16)	9
	8	24	24	36
	9	28	25	24
	10	26	(23)	14
	11	(32)	(15)	11
	12	30	26	45
	13	30	22	10
	14	(25)	26	25
	15	(26)	16	23
	16	36	26	25
D3	1	28	28	15
	2	63	40	51
	3	38	30	43
	4	34	30	28
	5	45	40	30
	6	(32)	(24)	17
	7	(25)	26	16
	8	31	28	25
	9	26	18	26
	10	32	27	16
	11	26	24	23
	12	30	26	22
	13	(28)	32	16
	14	32	32	40
	15	22	21	33
	16	60	32	7
	17	(27)	40	18
	18	41	24	76
	19	50	35	12
D4	1	46	38	29
	2	29	25	39
	3	34	26	11

グリッド	番号	長径	短径	深さ
D4	4	28	23	22
	5	44	32	65
	6	32	32	33
	7	36	34	15
	8	35	34	19
	9	(24)	(24)	40
	10	(36)	35	43
	11	20	18	12
	12	28	26	26
	13	24	17	8
	14	(30)	(26)	19
	15	24	20	6
	16	42	39	26
	17	26	24	30
	18	26	23	27
	19	30	(16)	11
	20	22	18	17
	21	30	30	20
	22	42	35	11
	23	32	26	11
	24	31	26	12
	25	27	24	25
	26	30	26	19
	27	52	34	33
	28	31	(22)	41
	29	(23)	(40)	20
	30	57	(22)	20
	31	(42)	(30)	63
	32	(18)	27	18
	33	33	(18)	16
	34	31	20	17
	35	30	28	13
	36	24	21	5
	37	(40)	27	18
	38	24	20	15
	39	30	26	11
	40	26	23	13
	41	38	34	35
	42	36	36	21
	43	36	(17)	7
	44	30	22	22
	45	(20)	30	19
	46	23	17	9
	47	27	(18)	27
	48	23	(14)	24
	49	(36)	38	36
	50	23	20	12
	51	26	23	17
	52	23	15	13
	53	36	32	9
	54	22	22	21
	55	38	30	38
	56	34	34	3
	57	21	16	33
	58	23	(18)	9
	59	(20)	21	31
	60	(18)	22	28
	61	32	30	23
	62	30	28	28

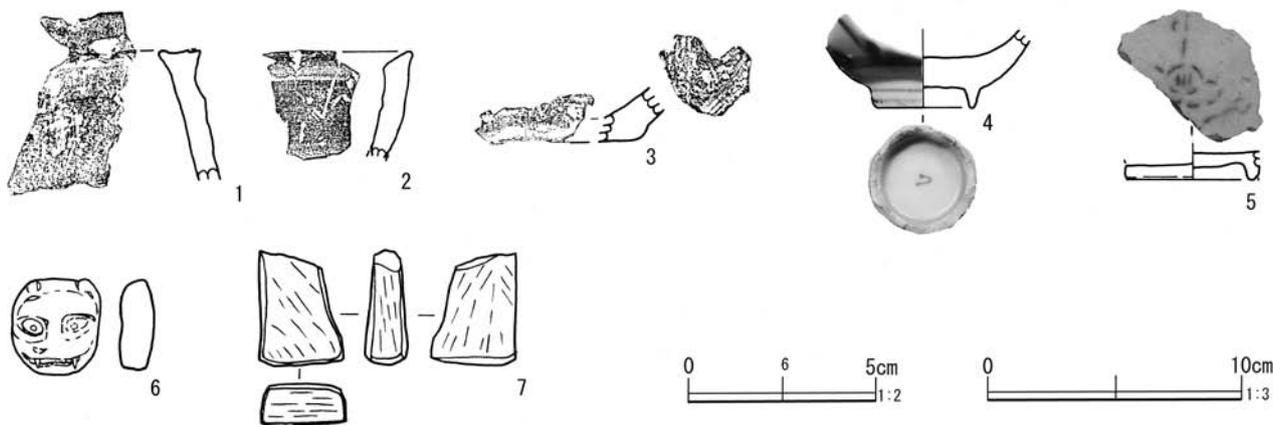
グリッド	番号	長径	短径	深さ	
D4	63	32	26	11	
	64	29	21	19	
	65	(25)	16	10	
	66	(28)	9	9	
	67	33	30	13	
	68	32	25	17	
	69	24	18	10	
	70	26	24	15	
	71	(28)	(26)	25	
	72	32	20	20	
	73	32	28	26	
	74	35	27	23	
	75	(21)	22	15	
	76	24	22	34	
	77	(32)	36	49	
	78	(26)	(39)	4	
	79	38	31	18	
	80	24	(20)	16	
	81	24	(13)	14	
	82	24	(18)	14	
	83	24	20	15	
	84	36	36	31	
	85	35	34	5	
	86	24	22	19	
	87	32	23	15	
	88	(26)	24	8	
	89	28	18	13	
	D5	1	28	21	53
		2	27	22	55
3		42	(23)	41	
4		(37)	36	38	
5		34	(6)	16	
6		38	30	25	
7		23	20	12	
8		30	30	49	
9		42	36	26	
10		22	14	12	
11		42	38	45	
12		36	(26)	7	
13		26	14	30	
14	(38)	42	12		
15	36	34	60		
16	(16)	38	26		
17	30	26	26		
18	22	20	10		
19	30	29	66		
20	24	21	32		
21	24	24	16		
22	24	24	11		
23	46	30	9		
24	24	21	17		
25	23	22	31		
26	25	24	24		
27	62	38	37		
28	22	20	21		
29	27	27	42		
30	32	30	18		
31	40	25	11		
32	38	24	28		

グリッド	番号	長径	短径	深さ
D5	33	23	18	31
	34	30	28	35
	35	40	32	13
	36	62	36	59
	37	34	22	6
	38	30	23	44
	39	24	24	24
	40	40	30	33
	41	32	27	24
	42	36	31	51
	43	57	44	30
	44	24	22	25
	45	42	30	15
	46	34	21	17
	47	(22)	42	8
	48	32	30	22
	49	36	33	25
	50	26	18	9
	51	32	24	16
	52	(26)	20	8
	53	46	42	9
	54	28	24	31
	55	28	22	11
	56	26	22	8
	57	23	22	21
	58	28	26	7
	59	30	23	20
	60	24	18	20
	61	27	23	12
	62	(26)	20	16
	63	27	25	27
	64	30	12	26
	D6	1	68	50
2		24	23	25
3		37	28	34
4		(30)	27	19
5		40	34	20
6		30	26	32
7		28	26	16
8		30	27	22
9		(36)	33	25
10		(23)	(60)	25
11		32	28	51
12		(43)	60	36
13		(20)	(14)	31
14		(24)	(34)	38
15		(50)	(40)	31
16		42	34	36
17		47	40	57
18		46	36	36
19		(38)	36	39
20		(40)	33	36
21		(26)	33	44
22		(12)	(28)	10
23		50	36	44
24		(16)	50	18
25		32	26	24

グリッド	番号	長径	短径	深さ
D6	26	(34)	33	12
	27	(26)	21	10
	28	(38)	34	25
	29	(44)	40	47
	30	(30)	(17)	21
	31	(27)	(26)	9
	32	(56)	48	51
	33	27	19	22
	34	(11)	26	8
	35	26	23	14
	36	29	26	41
	37	32	(26)	32
	38	31	20	(3)
	39	36	32	54
	40	(36)	54	38
	41	(30)	26	31
	42	(40)	(24)	25
	43	(64)	40	30
	44	(36)	(14)	10
	45	(44)	(22)	51
	46	34	32	48
	47	29	26	43
	48	40	30	38
	49	47	42	39
	50	28	21	34
	51	27	22	24
	52	33	26	19
	53	(16)	40	16
	54	44	36	40
	55	(20)	(32)	33
	56	33	30	61
	57	21	17	28
	58	40	35	42
59	24	22	64	
60	32	30	41	
E3	1	26	17	7.2
	2	24	24	5.0
	3	43	(20)	9.6
	4	47	(26)	16.2
	5	30	(18)	13.5
	6	30	(17)	7.4
	7	28	(17)	8.6
	8	28	(12)	4.6
	9	30	(20)	5.0
	10	32	(27)	10.6
	11	(36)	(32)	10.5
	12	28	(22)	9.5
	13	(28)	26	11.4
E4	1	28	24	26.9
	2	30	22	16.6
	3	40	30	5.7
	4	(20)	34	35.3
	5	36	28	37.4
	6	28	26	25.8
	7	40	34	11.0
	8	28	23	10.4
	9	22	22	14.9

グリッド	番号	長径	短径	深さ	
E4	10	28	22	21.7	
	11	32	29	19.8	
	12	32	26	25.6	
	13	(26)	(17)	11.6	
	14	50	34	74.3	
	15	28	26	30.5	
	16	22	22	—	
	17	(26)	22	10.7	
	18	25	(19)	9.8	
	19	(64)	30	10.8	
	20	(32)	20	5.4	
	21	(33)	28	13.3	
	22	(42)	30	12.4	
	23	(30)	30	8.5	
	24	20	19	9.0	
	25	17	10	6.1	
	26	20	18	6.6	
	27	(22)	20	8.6	
	28	(23)	18	9.7	
	29	(24)	24	9.6	
	E5	1	30	27	22.2
		2	35	26	20.9
		3	52	48	13.0
		4	(38)	43	26.0
		5	28	28	19.3
		6	42	33	48.7
		7	(38)	44	16.5
		8	30	30	26.7
		9	56	45	28.0
10		66	33	13.3	
11		(30)	(16)	5.5	
12		32	26	21.5	
13		32	28	20.7	
14		28	25	28.0	
15		42	37	33.2	
16		29	22	24.7	
17	30	26	26.1		
18	22	20	19.2		
19	36	26	13.9		
20	(34)	(24)	15.4		
21	35	(30)	31.7		
22	(20)	22	10.4		
23	31	(18)	14.4		
24	36	(25)	19.7		
25	(36)	30	15.4		
26	(35)	37	25.2		
27	34	31	17.3		
28	30	22	66.0		
29	26	24	13.4		
30	40	30	19.4		
31	(34)	36	23.3		
32	45	(38)	42.9		
33	(26)	34	26.5		
34	19	16	30.3		
E6	1	31	30	39.8	
	2	24	24	42.4	
	3	20	16	45.3	

※単位は全てcm



第63図 グリッド出土遺物 (4)

第17表 赤砂利遺跡 (第10地点) 出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
62	9	D4 P4	砥石	砂岩	4.7	2.9	0.8	14.1	
62	10	D4 P5	軽石製品	軽石	3.5	2.9	2.4	10.7	
63	7	D2	砥石	砂岩	4.2	3.1	1.6	29.6	

5 第11地点の遺構と遺物

(1) 住居跡

●第8号住居跡 (第65・66・67・68・70図)

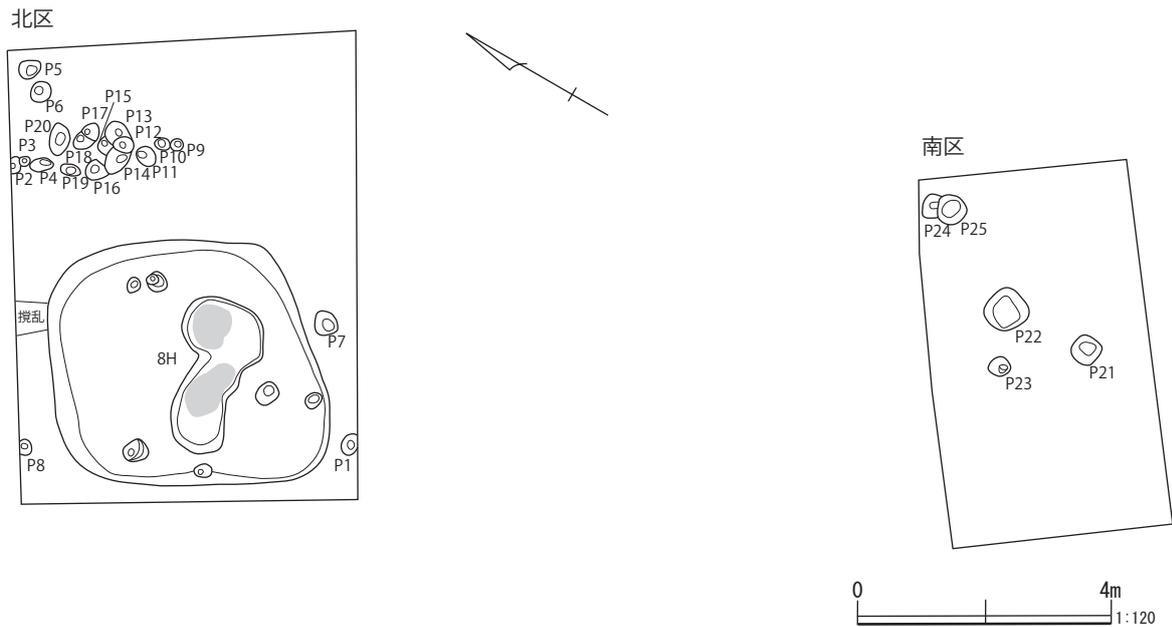
北区の西寄りに位置する。平面形は長径約4.2m、短径約4mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mであった。住居の外寄りに柱穴を5基検出した。P2は床面から底面までが深く、掘り直されたような痕跡が認められた。柱の付け替えが行われた可能性が考えられる。

炉跡は長径約2.5m、短径約1.3mの不整円形を呈し、住居内のほぼ中央部に位置している。円形と楕円形を組み合わせたような形態を呈しており、5層と7層付近でそれぞれ焼土の範囲が認められた。5層は7層よりも高い位置で被熱の痕跡が認められており、このことから住居内で炉を作り直していた可能性が高い。5層を覆土にもつ、円形の炉が構築、機能した後に、7層を覆土にもつ楕円形の炉が構築されたものと考えられる。円形の炉の北寄りに長径約0.7m、短径約0.6mの焼土の広がり認められる。楕円形の炉の東寄りに長径約1m、短径約0.6mの焼土の広がり認められる。2つの炉がどのくらいの時間差で機能したのかは、現状では不明である。

第66図のように、住居の内側を中心に遺物が出土した。出土遺物は縄文時代中期の土器片や石器であるが、住居の規模に対して石鏃や二次加工剥片の出土数の多さが特筆される。

出土遺物 (第62・68・70図1~16)

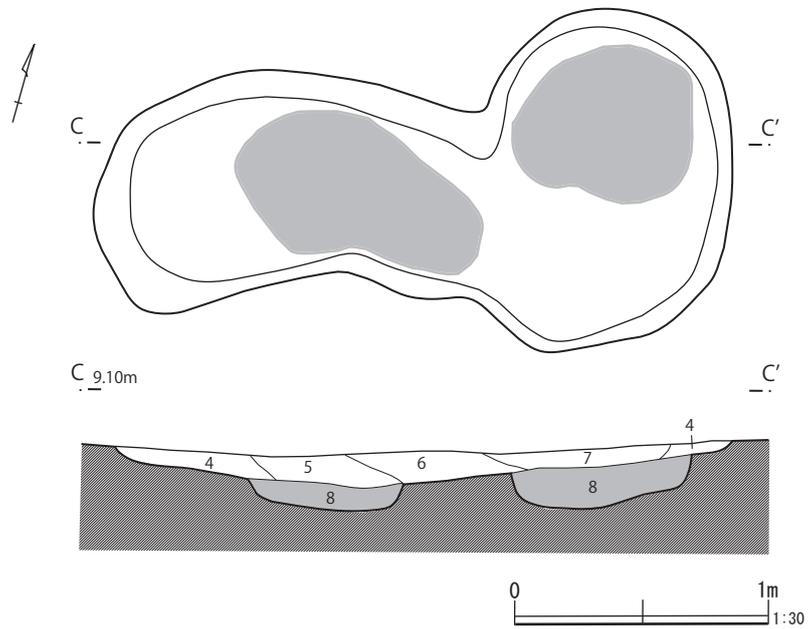
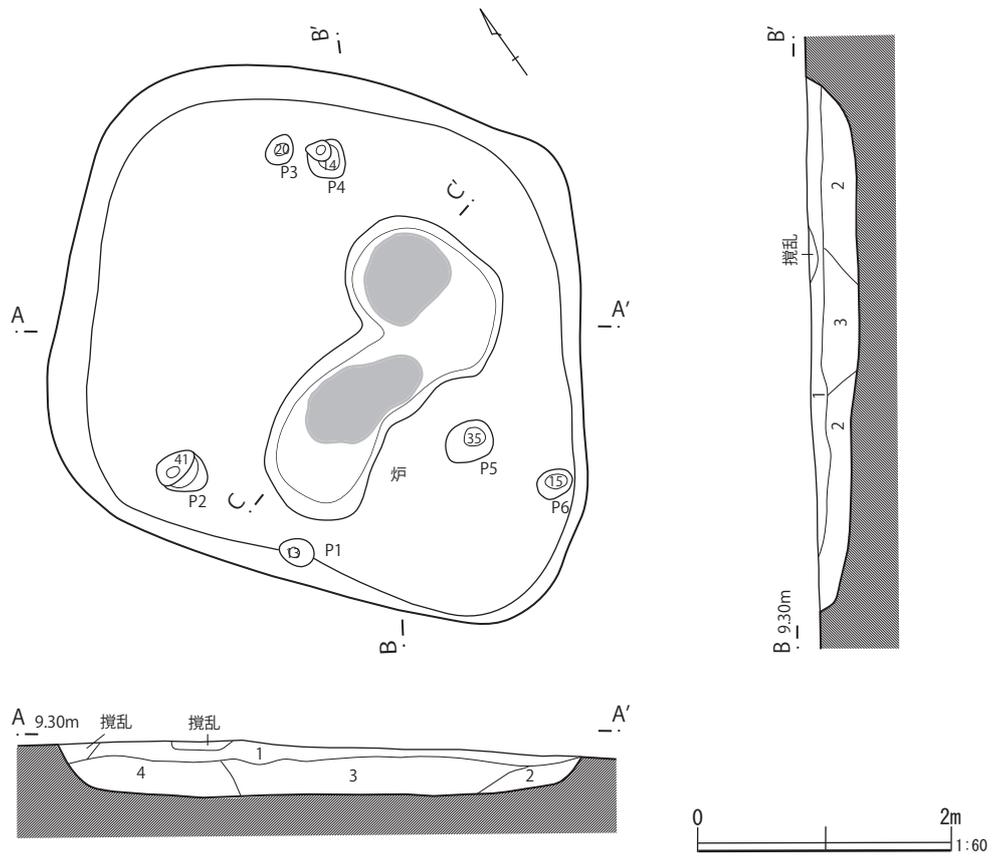
土器 第67図1~5・9・12~14は、口縁部文様帯を隆帯で区画したり、杵状区画を隆帯と沈線で形成したりする一群である。1は、緩波状縁を呈する資料で、波頂下に縄文の充填される楕円形の杵状区画を持つ



第64図 赤砂利遺跡（第11地点）全測図

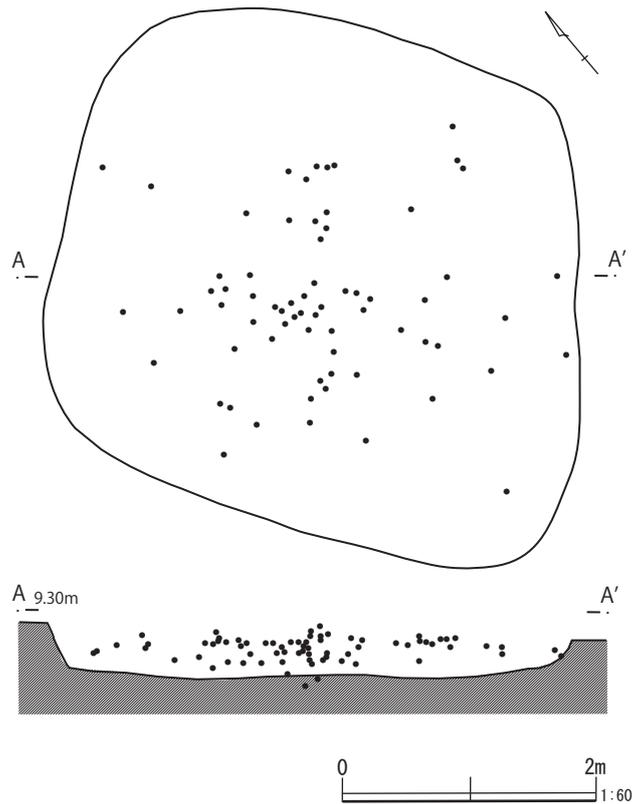
ものと思われる。2は、渦巻文の看取されるもの、3は、内湾する緩波状縁深鉢、4は、口縁部上に環状の把手が付されたと思われるものである。5・9は、横走隆帯とこの上下を撫でる沈線が見られるもの、12は、口縁部文様帯内に楕円形の枠状区画の施される資料である。13は、隆帯による渦巻文が看取されるもの、14は、刺突の付される隆帯が見られるものである。6～8は、口縁部文様帯の区画に隆帯を用いないものである。6は、口縁部文様带上端を2条の横走沈線で画し、以下に縄文を施すもので、2条の沈線で連弧文が描かれる。7は、上部の平らな「∩」状の縄文帯とこれを縁取るような磨消文帯が垂下する資料、8は、口縁部の横長の枠状区画を沈線のみで構成すると思われる資料である。15は、罎に穿孔された有孔罎付土器の罎部資料である。16は、口縁部文様帯下端を画したと思われる隆帯と垂下沈線の観察される資料である。17～27は、磨消文帯や沈線が垂下する縄文地文の胴部資料である。27では、2条の沈線で縁取られた磨消文帯が蛇行しながら垂下するものである。28～31は、縄文の施された胴部資料である。32・33は、内湾する平縁土器で、縦位の条線文が施される。34～37は、櫛状施文具による条線文の施された胴部資料である。34では、口縁部無文帯との間を区画したと思われる浅い沈線が観察される。38は、外面に隆帯が垂下し内面に斜行する集合短沈線が施される口縁部資料である。39は、垂下する鎖状隆帯とこの両脇に集合沈線の観察される胴部資料で、38と合わせて曾利式の系譜を引くものである。40は、横走する沈線と以下に施された集合沈線の観察される胴部資料である。

第68図1は、推定口径24cm、残存高13cmほどのキャリパー形深鉢の胴上半部資料である。上下を隆帯で区画する口縁部文様帯には、横長の枠状区画が配され、内部には単節 RL 縄文が充填される。胴部には単節 RL 縄文を縦位に施文した縄文帯と2条の沈線に縁取られた磨消文帯とが交互に垂下する。2は、推定口径28cm、残存高15cmほどを測るキャリパー形深鉢の胴上半部資料である。内湾する口縁部には3cmほどの無文帯が置かれこの下端を2列の円形刺突列で区画し、以下に単節 RL 縄文を縦位施文した縄文帯と2条の沈線に縁取られた磨消文帯とが交互に垂下する。枠状区画を持つ口縁部文様帯は配されない。3～9は、無文の口縁部資料である。3は玉縁状の口唇部を持ち大きく内湾するもの、4は内削ぎの口唇部を持



- 8H
 1 灰褐色土 締まり有 粘性有 ローム粒子 (0.5 ~ 1cm) を多く含む。
 2 暗褐色土 締まりやや強 粘性やや弱 ロームブロック (3 ~ 5cm) を多く含む。
 3 暗褐色土 締まりやや強 粘性やや弱 2層に似るが、炭化物粒子を多く、焼土粒子をまばらに含む。
 8H 炉
 4 暗褐色土 締まりやや強 粘性やや強 焼土粒子 (0.3 ~ 0.5cm) と炭化物粒子をまばらに含む。
 5 赤褐色土 締まり有 粘性有 焼土ブロック (1 ~ 3cm) と炭化物粒子を多く含む。赤化した被熱ローム。
 6 暗褐色土 締まりやや強 粘性やや強 炭化物粒子を多く含む。
 7 赤褐色土 締まり有 粘性有 5層に似るが、大粒の焼土ブロック (3 ~ 5cm) を多く含む。
 8 赤褐色土 締まり強 粘性弱 硬く締まった被熱ローム。
 ※5層と7層を中心に被熱の範囲が2箇所あり、5層は7層よりも高い位置で被熱の痕跡が認められる。

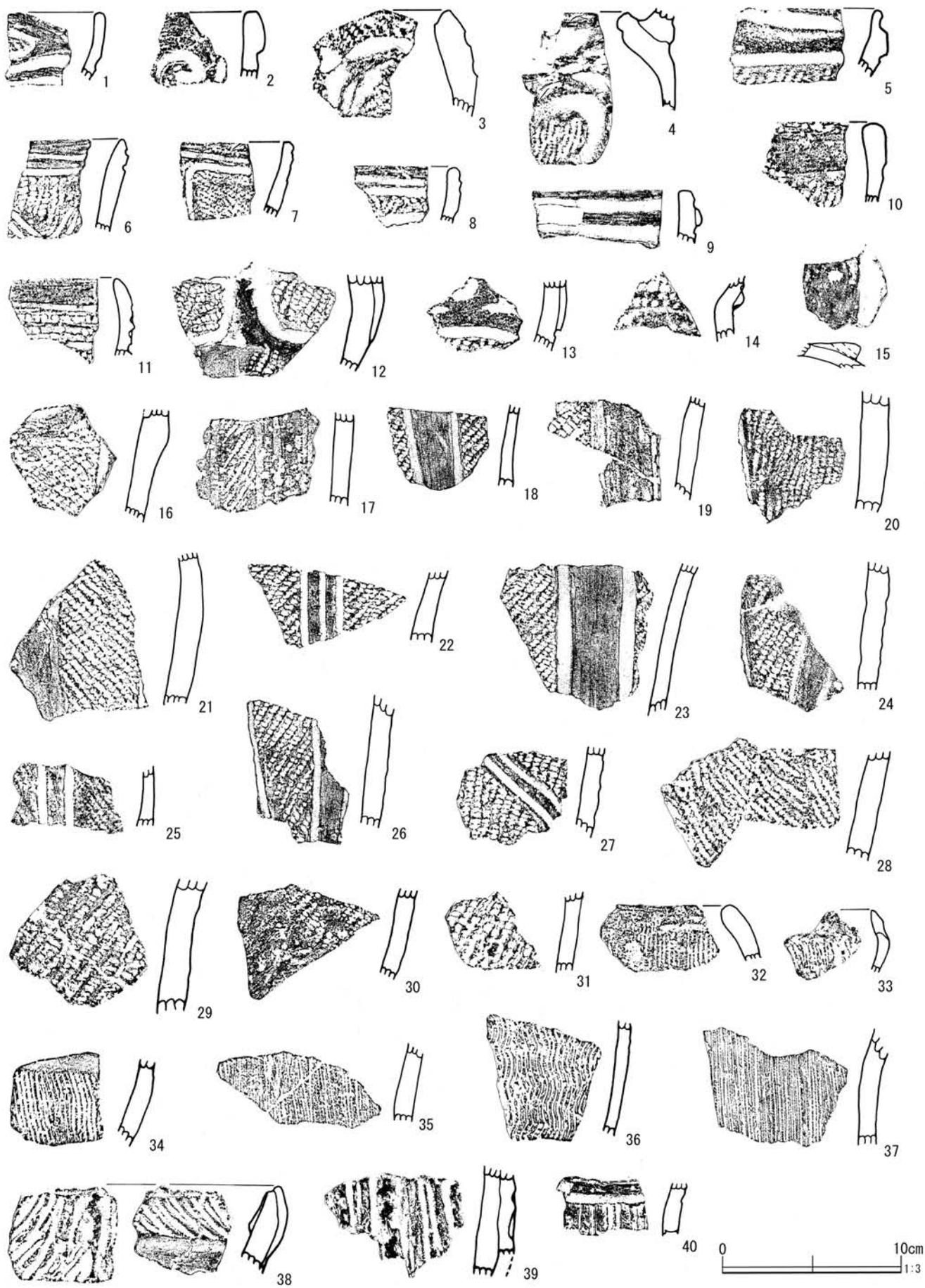
第65図 第8号住居跡



第66図 第8号住居跡遺物分布図

ち軽く内湾するもの、5・7・8はほぼ直立する口縁部を持つもの、6は強く内湾するもの、9は外削ぎとなる口唇部端面に1条の沈線を引くものである。

石器 第70図1は、黒曜石製の細石刃である。正面には新旧合わせて数面の剥離面が観察される。裏面は、上部に打点のある主剥離で打瘤が残される。下端は切断を加えている。2は、チャート製の凹基無茎の石鏃である。やや厚みのある不整形剥片を素材とし、正面左側縁を中心に丁寧な調整加工を施している。右側縁から厚みを飛ばす剥離を施している。裏面中央には右側に打点のある主剥離が観察され、基部の厚みを削ぐ剥離が観察される。基部は両面から丁寧な押圧剥離が加えられている。3は、チャート製の石鏃で、厚みのある剥片を素材としており、表裏両面に正面右側に打点のある主剥離が残される。周縁部には両面から規則的で丁寧な押圧剥離が加えられ形状が整えられているが、基部の扱いは甘く中央に茎部とするには短すぎる突起が残される。4は、チャート製の平基有茎石鏃で、中央付近から先端方向を欠損する。両面に基部方向に打点を持つ主剥離が大きく残され、両側縁と基部を中心に不規則な押圧剥離が加えられる。5は、チャート製の石鏃の脚端部である。表裏に大きめの剥離を残し、周縁部に不規則で粗い剥離が施される。未製品の段階で欠損したものであろう。6は、チャート製の石鏃の脚端部である。不規則ながら表裏とも両側から細かな押圧剥離が加えられ、断面も菱形に整形されている。5と異なり製品と考えられる。7は、チャート製の石鏃未製品と思われる。横長の不整形剥片を素材とし、正面は厚みを削ぐように先端方向からの大きな剥離を加えているほか、右側縁にも不規則な剥離が加えられる。裏面中央には素材剥片の主剥離が残され、打瘤の厚みを削ぐように左側縁に正面からの加撃による規則的な剥離が施されている。8はチャート製の不整形石鏃と思われる。不整形剥片を素材とし、厚みのある正面右側縁と基部を中

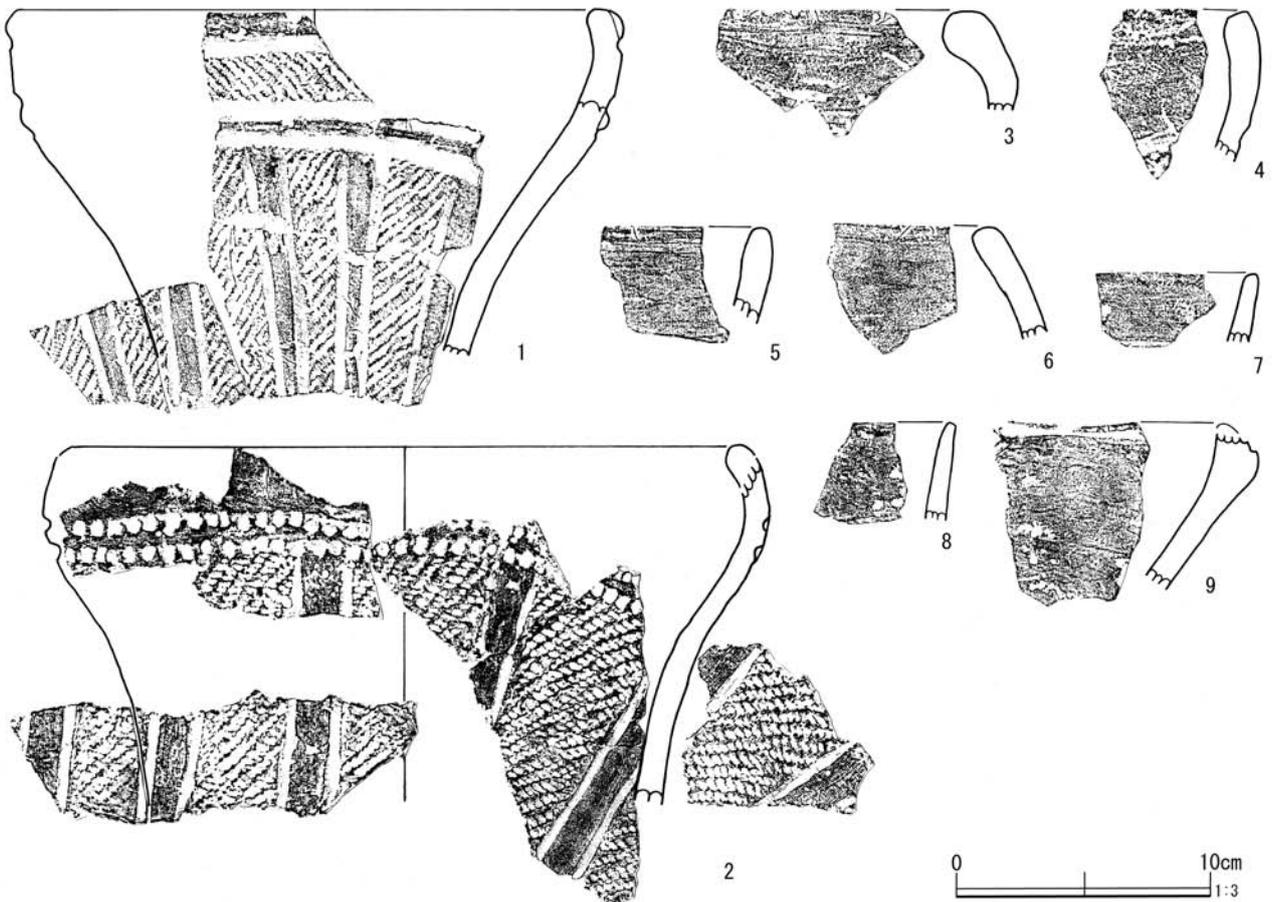


第67图 第8号住居跡出土遗物 (1)

心に細かく丁寧な剥離が加えられる。9は、粗悪なチャート素材とした石錐である。不整形な剥片を素材とし、正面左側縁を中心に不規則な剥離を加え持ち手としている。先端部は両面から不規則な剥離を加え、錐部を作り出している。10は、黒曜石製の石錐である。やや厚みのある剥片の打点方向を錐部としている。正面右側縁には素材礫の表皮が残る。左側縁を中心に丁寧な押圧剥離を加え、錐部を細長く作り出している。11は、チャート製の石錐である。三角形に整形され、石鏃風であるが厚みのある先端部が錐として使われ磨耗している。12は、チャート製の石鏃未製品であろうか。扁平な不整形剥片を素材とし、基部付近と右側縁を中心に丁寧な押圧剥離を加えている。左側縁は切断を加えたまま未調整の様子である。13～16は、いずれもチャート製の二次加工剥片である。13は、やや縦長の不整形剥片を素材とし、裏面上端付近を中心に二次加工を加えている。14は、不規則剥片を素材とし、正面右側縁に不規則で粗い二次加工を加えている。15は、やや横長の貝殻状剥片を素材とし、正面上部のネガティブなバルブを削ぐように二次加工を施している。16は、不整形な剥片を素材とし、正面右側縁に細かな二次加工を施している。

(2) ピット (第64図)

検出されたピットは25基を数えるが、遺物の出土は僅かに認められるが帰属時期は判然としない。北区で20基、南区で5基のピットが検出された。ピットの計測値は第18表に示した通りである。



第68図 第8号住居跡出土遺物 (2)

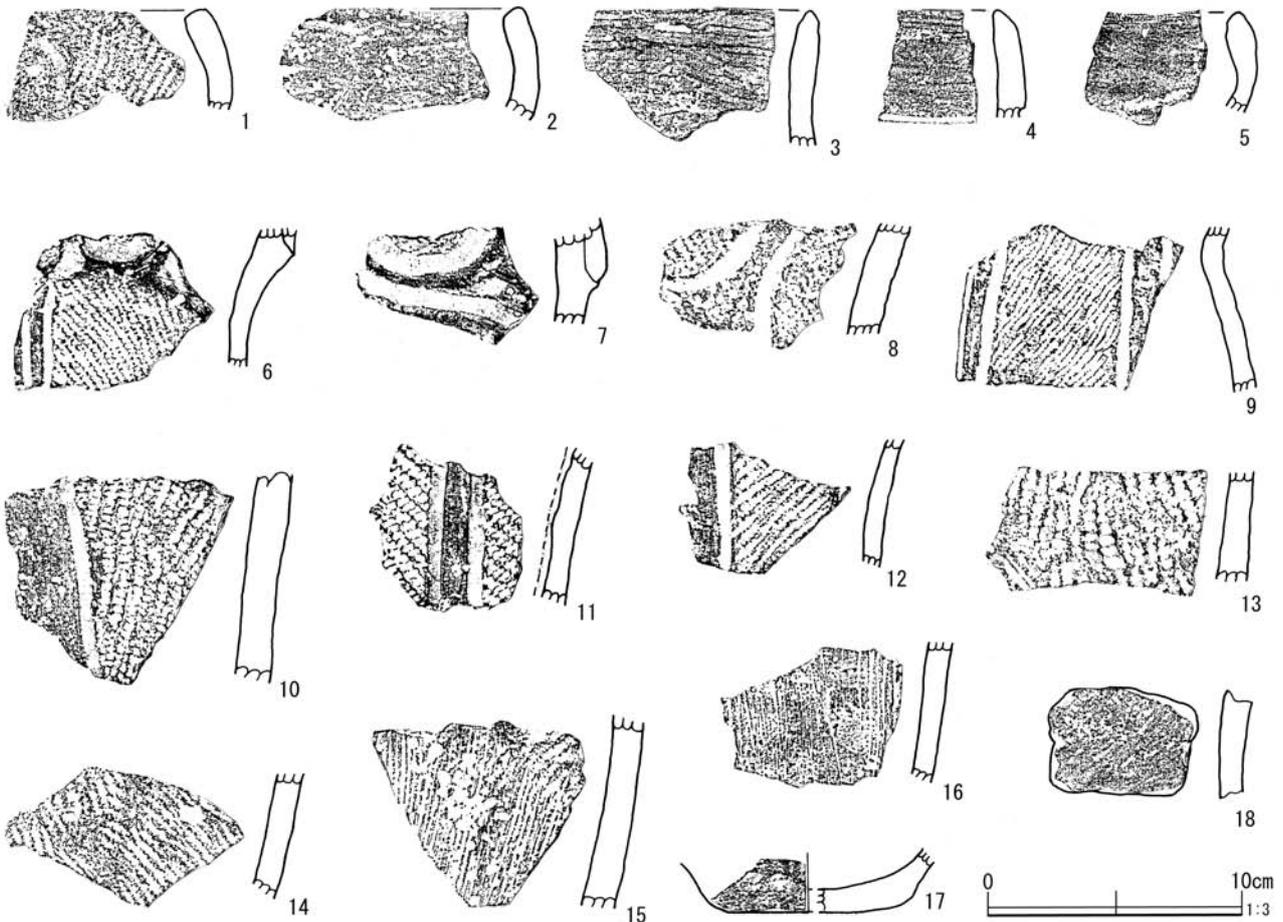
第18表 赤砂利遺跡（第11地点）ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
1	30	22	84	10	20	14	25	19	28	16	16
2	22	16	11	11	28	22	27	20	42	26	24
3	14	12	14	12	28	(20)	15	21	36	36	21
4	30	16	24	13	(24)	(30)	16	22	60	60	26
5	30	26	13	14	(34)	(28)	15	23	30	26	63
6	30	26	13	15	(16)	(16)	19	24	30	(18)	20
7	32	28	20	16	30	26	17	25	42	28	19
8	22	16	54	17	(20)	22	20				
9	18	16	18	18	(20)	22	18				

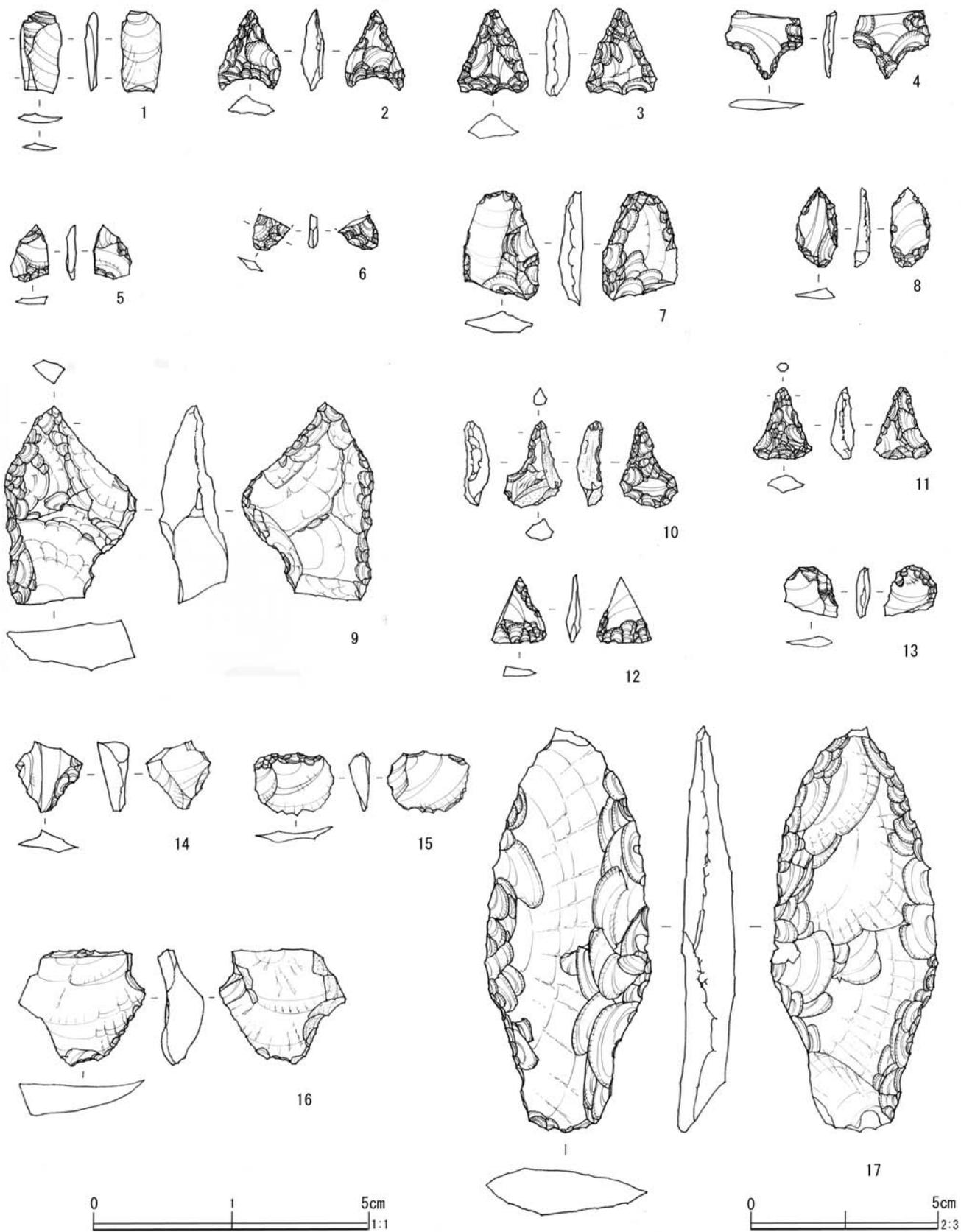
※単位は全てcm

(3) 調査区出土遺物（第69・70図17）

土器 第69図1は、内湾傾向を示す平縁土器である。単節縄文の地文上に「∩」状の磨消文帯を垂下させるものである。2～5は、無文の口縁部資料で、2・5は内湾傾向の強いもの、3はやや外反するもの、4はわずかに内湾する資料である。6・7は、口縁部文様帯に隆帯を用いた杵状区画を形成するものである。前者では胴部に垂下する磨消文帯が看取される。後者では、口縁部の円形区画内に単節縄文が充填されることがわかる。8～12は縄文地文上に磨消文帯が垂下するものである。8は「H」状磨消となるものである。9は頸部でくびれ胴部で膨らむ器形をとる。13・14は、縄文の施された胴部資料、15・16は、縦位の条線文の施され



第69図 調査区出土遺物（2）



第70図 調査区出土遺物 (3)

る資料である。前者では上部に単節縄文も重複施文される。17は、無文の底部資料で、推定底径7cmを測る。

土製品 第69図18は土器片錘である。無文の胴部資料を素材とし、長方形に整形し、長軸に沿って縄掛けの刻みを付している。

石器 第70図17は、ガラス質黒色安山岩製のスクレイパーである。先端部をわずかに欠く。また、全体にパティナの付着が著しい。横長剥片を素材とするもので、表裏両面に正面左側縁に打点を持つ主剥離が残される。正面の左側縁は打瘤を削ぐように、右側縁は素材の形状を整えるような成形加工が施されている。裏面は、左上部から2度の大きな剥離を加え厚みを削ぐとともに、両側縁を中心に不規則ながら丁寧な整形加工を繰り返し施している。

第19表 赤砂利遺跡（第11地点）出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
70	1	8H	細石刃	黒耀石	1.4	0.8	0.2	0.2	
70	2	8H	石鎌	チャート	2.2	1.7	0.6	1.3	
70	3	8H	石鎌	チャート	2.3	1.9	0.5	2.2	
70	4	8H	石鎌残欠	チャート	1.7	2.0	0.3	0.9	
70	5	8H	石鎌残欠	チャート	1.4	1.0	0.2	1.7	
70	6	8H	石鎌残欠	チャート	0.9	1.0	0.2	0.2	
70	7	8H	石鎌ブランク	チャート	2.8	2.0	0.6	3.7	
70	8	8H	石鎌	チャート	2.1	1.0	0.3	1.1	
70	9	8H	石錐	チャート	5.2	3.5	1.4	26.7	材質悪い
70	10	8H	ドリル	黒耀石	2.3	1.5	0.6	1.6	
70	11	8H	ドリル	チャート	1.9	1.6	0.6	1.2	
70	12	8H	石鎌未製品	チャート	1.8	1.5	0.4	0.6	
70	13	8H	二次加工剥片	チャート	1.3	1.3	0.3	0.4	
70	14	8H	二次加工剥片	チャート	1.9	1.7	0.8	1.6	
70	15	8H	二次加工剥片	チャート	1.7	2.1	0.3	1.0	
70	16	8H	二次加工剥片	チャート	3.1	3.2	0.9	9.4	
70	17	調査区	スクレイパー	ガラス質黒色安山岩	10.8	4.4	1.2	70.2	パティナ付着

V 総括

1 七カマド遺跡

Ⅲ章の1で既述のように、試掘調査によって中・近世の溝跡が検出されたことが、初の本格的な発掘調査に繋がった。本調査においては、土坑7基、溝跡1条、ピット11基を確認した。土坑は平面径が長方形を呈すもの（第1・2・7号土坑）と円形基調のもの（第3・4・5・6号土坑）に分けられる。長方形土坑の長軸はほぼ北の方角を指し、同時期に掘削された可能性が高い。土坑の出土遺物は僅かであるが、黒褐色土あるいは暗褐色土にロームブロックが混じる覆土から、帰属時期は近世以降と考えられる。

第1号溝跡は北西から南東へ延伸するが、第1地点の北西側の試掘調査箇所においては、溝跡の痕跡が認められなかったため、調査区北側での蛇行や屈曲が想定される。南側については、遺跡の南寄りを通る黒沼用水に向かって延伸しており、元々は黒沼用水に接続して、用排水路として機能していた可能性が高い。黒沼用水は近世に開削されており、第1号溝跡の帰属時期も黒沼用水開削前後であった可能性が考えられる。

2 赤砂利遺跡

縄文時代中期と中・近世を中心に調査成果をまとめておきたい。

赤砂利遺跡で実施した発掘調査の内、過去に白岡市教育委員会・白岡町遺跡調査会（当時）主体の調査地点（第1・2・3・4地点）の中では、縄文時代中期後半（加曾利E式期）の住居跡は第1地点で1軒が検出されたのみであったが、本報告の第5・7・11地点においては、縄文時代中期後半の住居跡を計8軒検出した。未報告であるが、埼玉県埋蔵文化財調査事業団主体の調査地点（第6・8・9地点）においても、縄文時代中期後半の住居跡が検出されており、縄文時代中期の集落跡としての赤砂利遺跡の全容が徐々に明らかになりつつある。第5地点で検出した第2・3号住居跡は調査区内で検出できた部分だけでも長径7mを超える。赤砂利遺跡の第1・5・7・11地点で検出した9軒の住居跡の長径の平均値は約5.6mである。また、市域の沖山西遺跡（第1・2・3地点）においては、計13軒の縄文時代中期後半の住居跡を検出したが、住居跡長径の平均値は約5.4mであった。第2・3号住居跡は、長径が市域における縄文時代中期後半の住居跡の平均値を大きく上回る大型の住居跡であると言えよう。2軒の住居跡は確認面からの深さも50～60cmを測り、深い掘り込みをもつ。炉跡はいずれも炉の石は抜き取られているものの、炉枠として円礫を配していた石囲炉であるという共通点をもつ。他の住居跡とは異なる特徴をもつ大型の第2・3号住居跡の用途は不明な部分が多いが、共同作業場あるいは共同宴会場的な機能が推定されようか。

住居跡の用途を考えるうえでは、第11地点の第8号住居跡も興味深い事例である。長径4.2mの比較的小型の住居跡であるが、加曾利E式の縄文土器片とともにチャートの石鏃や未製品、二次加工剥片が多数出土した。炉跡は2回に渡って作り直された痕跡が認められた。石器製作のための作業場的な機能を有していた可能性が考えられる。

中・近世に関する遺構を、第7・10地点を中心に検出した。第7地点は大徳寺の地蔵堂改築に伴う調査であるが、寺域内ということもあり、調査前から中・近世遺構が多数検出されることが予測されていた。

検出した土坑のうち第26・27・28・29・30・31・35号土坑の7基から人骨や銅銭が出土し、墓壙と考えられる。人骨は頭蓋骨や大腿骨が認められた。頭蓋骨は土坑の北側で正面を西に向けた状態で検出したものが多く、埋葬形態の中での北枕の意識が窺える。出土状況から、遺体の埋葬姿勢は足を曲げて横に寝かされた状態であったと推測される。第35号土坑は火葬墓であるが、他の墓壙群の存在しない調査区東寄りに位置しており、墓壙群と火葬墓との間には時期差が存在した可能性が考えられる。火葬墓は通風口が張り出すT字形のプランで、通風口部分が一段低くなる。T字状火葬墓は中世でも古い段階に多いことから、他の墓壙群よりも先行すると考えられる。大徳寺大日堂建設に伴う調査（第1地点）では同様の墓壙群が検出されていないことから、第7地点の成果によって、中・近世に形成された墓域の北限と東限がある程度判明したと言える。

第7地点で検出した第4号掘立柱建物跡の主軸方向は、やや西に傾いており、現大徳寺の軸方向よりも墓壙群の軸方向に近い。また、今回検出した建物は掘立柱式であったが、寺という性格を考えると、礎石建物跡の存在も否定できない。地蔵堂解体及び表土掘削中には60cm前後の礎石と思われる石を確認している。地蔵堂に使用していたとされるが、堂の規模から考えて、別時期に他の建物で使用されていたものを転用していた可能性が高い。本堂などの主要建物は礎石建であったのかもしれない。第4号掘立柱建物跡と墓壙との新旧関係は不明であるが、墓域が連続して営まれることを考慮すると、建物跡の方が古い可能性がある。

第10地点は伝鎌倉街道中道に隣接する地点にあたり、調査前には街道自体の発見も期待されたが、道路の痕跡は認められなかった。出土遺物が限られているため、遺構の帰属時期は明確でないが、隣接する第2地点の成果から14世紀末から15世紀代にかけて遺構形成のピークが存在したものと考えられる。今までの調査成果から、第10地点に東隣する市道に鎌倉街道中道の存在が推定されるが、本調査地点においては、街道に沿って並列する第3・5号柵列や街道と直交する第1・2・4号柵列が認められるなど、街道やその区画に伴うと考えられる痕跡が発見されたことは意義深いものと言える。また、検出された4棟の掘立柱建物跡の主軸方位は、1棟（第5号掘立柱建物跡）を除き、街道に沿って並列する。特に平面形態から門等の構造物である可能性が高い第7号掘立柱建物跡と、街道と直交する第4号柵列が隣り合う検出状況は、街道に対する門構え等の構造を考えるうえで示唆に富んでいると言える。

参考文献

- 奥野麦生編 1997 『赤砂利遺跡』白岡町遺跡調査会調査報告書第3集 白岡町遺跡調査会
- 杉山和徳・奥野麦生編 2015 『沖山遺跡（第1地点）・沖山西遺跡（第1・2・3地点）・大町遺跡（第2地点）』白岡市埋蔵文化財調査報告書第24集 白岡市教育委員会
- 松崎慶喜編 2004 『赤砂利遺跡（第2地点）』白岡町埋蔵文化財調査報告書第13集 白岡町教育委員会
- 松崎慶喜編 2008 『新屋敷遺跡・中妻遺跡（第1地点）・鶴巻遺跡（第2地点）・清左衛門遺跡（第1地点）・赤砂利遺跡（第3地点・第4地点）・大町遺跡』白岡町埋蔵文化財調査報告書第17集 白岡町教育委員会

写真図版



掘削作業状況 (1)



掘削作業状況 (2)



実測作業状況 (1)



実測作業状況 (2)

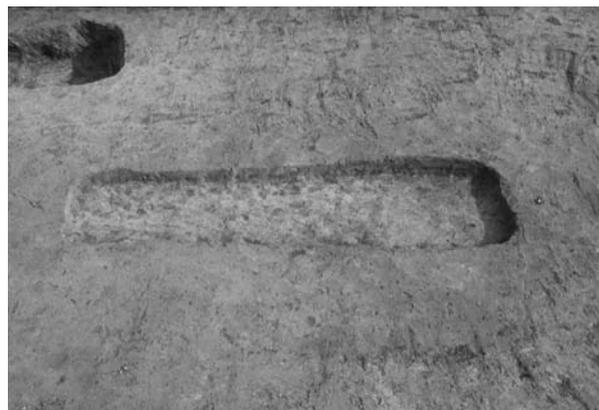
図版2 七カマド遺跡（第1地点）



調査区全景



第1号溝跡



第1号土坑



第2号土坑



第3号土坑



第4号土坑



第5号土坑



第6号土坑



第7号土坑



調査区出土遺物 (1) (第8図)

図版4 赤砂利遺跡（第5地点）



調査区全景（北から）



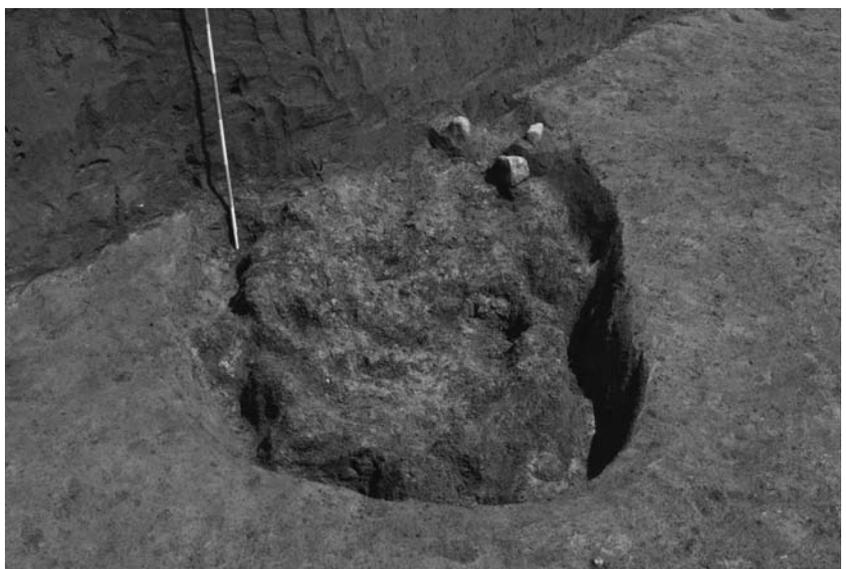
調査区全景（南から）



第1号住居跡



第2号住居跡



第2号住居跡炉

图版6



第3号住居跡



第3号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡炉



第4号住居跡



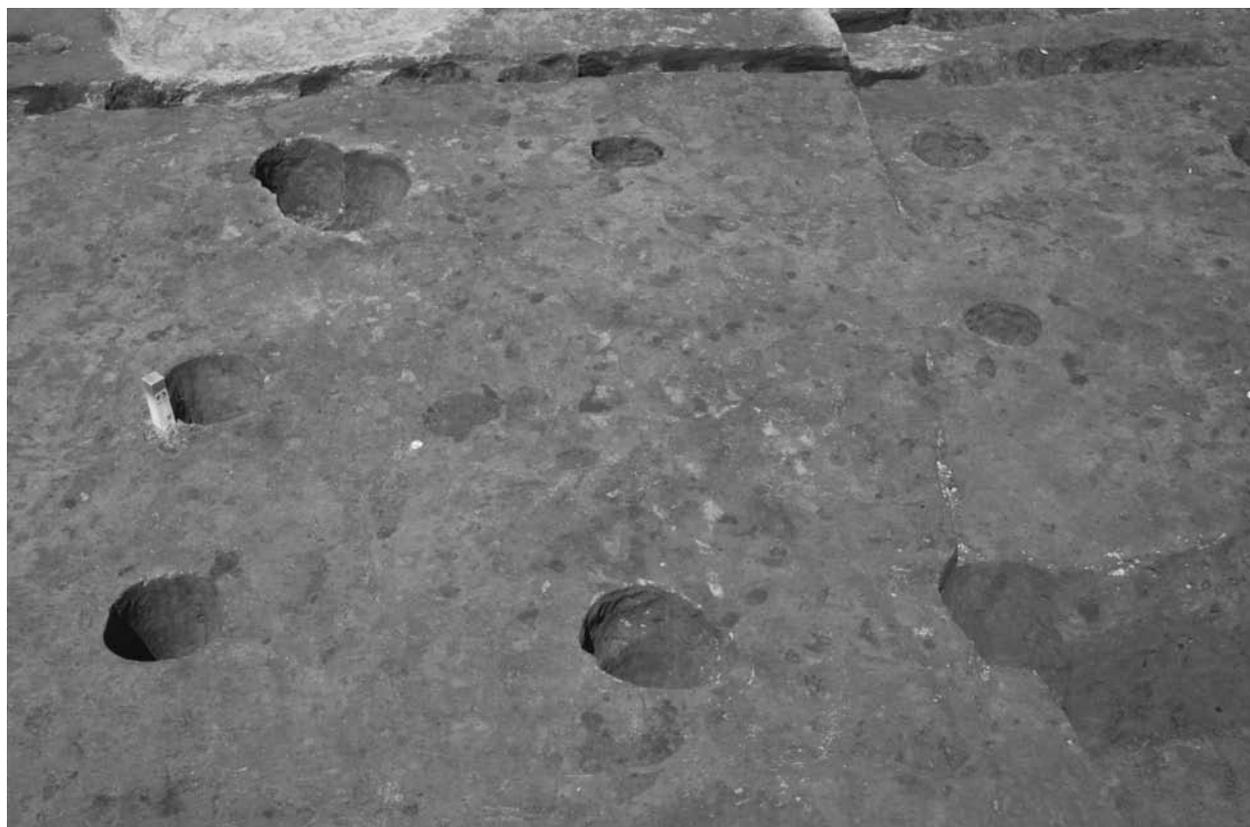
第5号住居跡



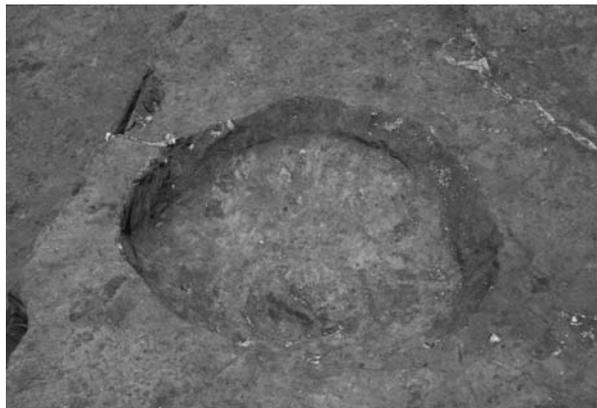
第6号住居跡



第1号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡



第2号土坑



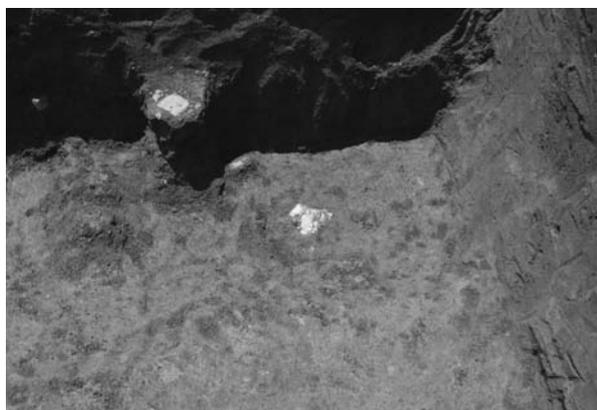
第4号土坑



第5号土坑



第7号土坑



第8号土坑遺物出土狀況



第9号土坑



第10·11号土坑



第12·13号土坑

图版 10



第16号土坑



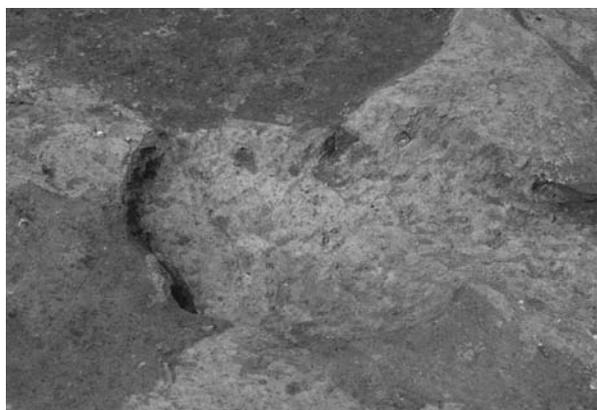
第17号土坑



第18号土坑



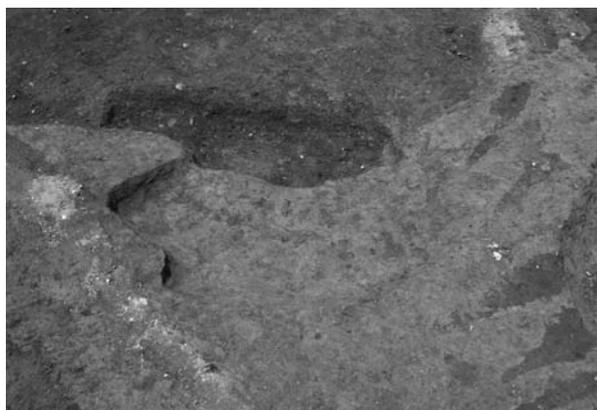
第19号土坑



第20号土坑



第22号土坑



第23号土坑



第24号土坑



第1号沟迹



第2·3号沟迹



第4号沟迹



第7号沟迹



第1号住居跡出土遺物 (第12图)



第2号住居跡出土遺物 (3) (第16图)



第2号住居跡出土遺物 (1) (第15图)



第2号住居跡出土遺物 (2) (第17图4)



第2号住居跡出土遺物 (4) (第17图1~3·5~9)

图版 14



第2号住居跡出土遺物 (5) (第18図)



第3号住居跡出土遺物 (2) (第22図)



第3号住居跡出土遺物 (1) (第21図)



第3号住居跡出土遺物 (3) (第23図1~4)



第3号住居跡出土遺物 (4) (第23图5)



第3号住居跡出土遺物 (5) (第23图6)



第3号住居跡出土遺物 (6) (第23图7)



第3号住居跡出土遺物 (7) (第23图8)



第3号住居跡出土遺物 (8) (第24图)



第4号住居跡出土遺物 (第25图)



第5号住居跡出土遺物 (第28图)

図版 16



第6号住居跡出土遺物 (第30図)



溝跡出土遺物 (第39図)



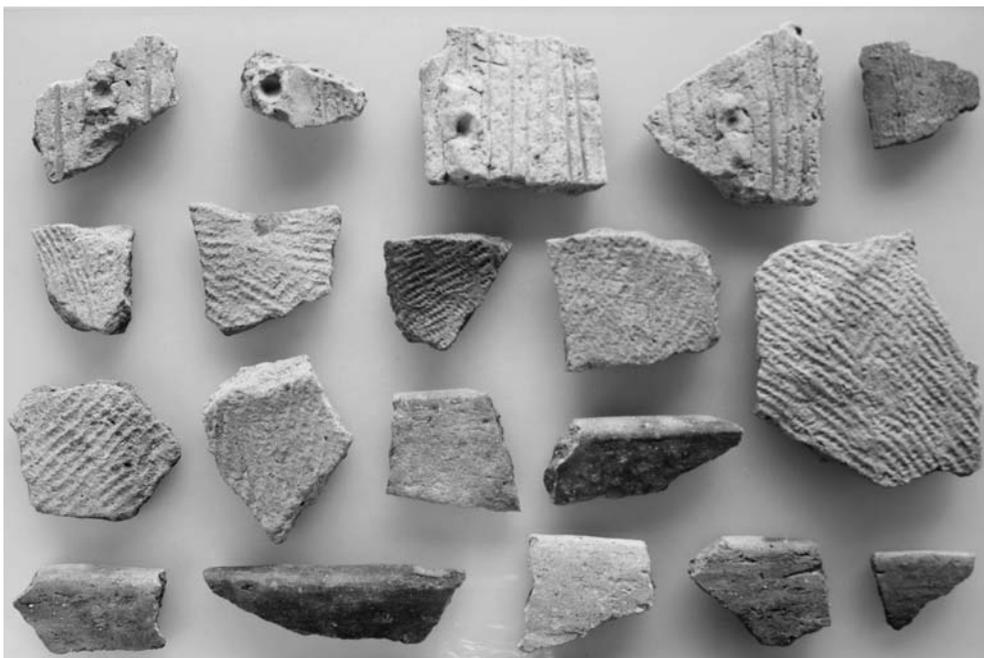
土坑出土遺物 (1) (第34図)



グリッド出土遺物 (1) (第40図)



土坑出土遺物 (2) (第36図)



グリッド出土遺物 (2) (第41図)

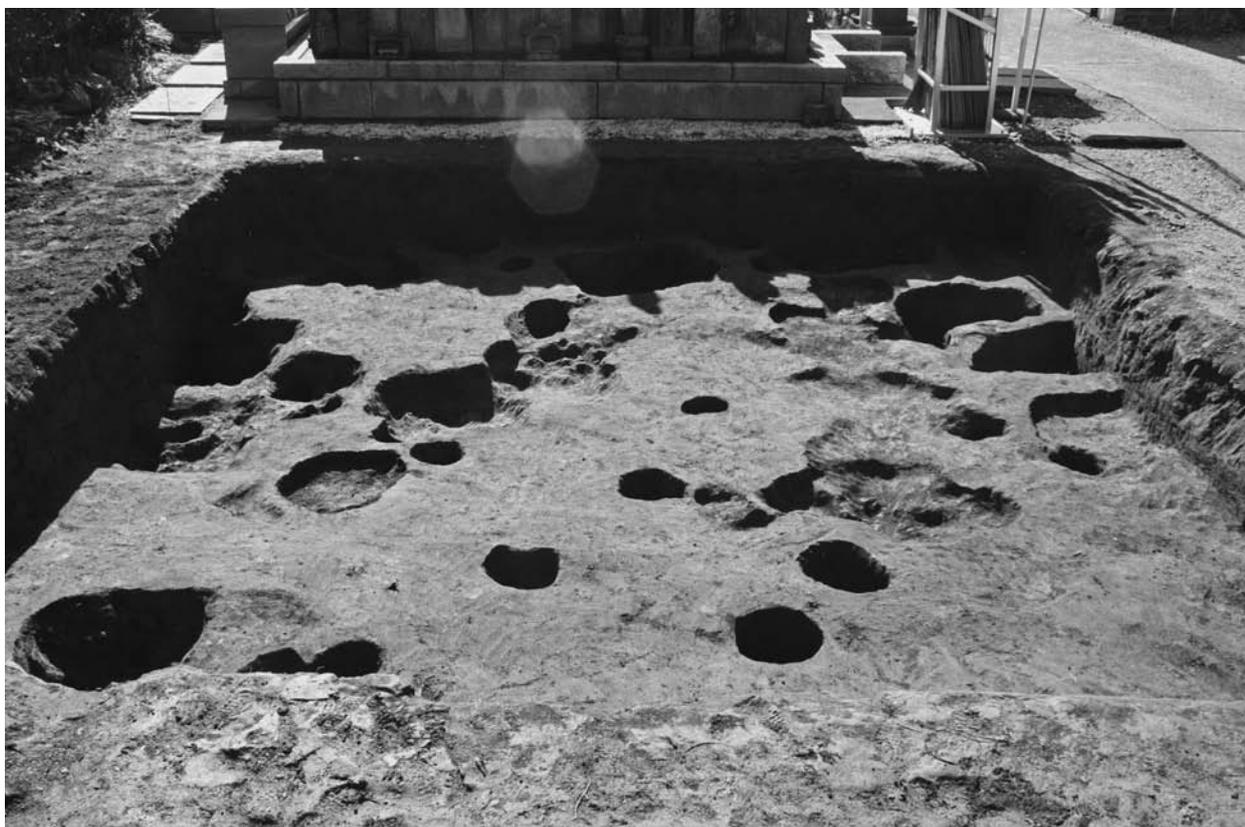


グリッド出土遺物 (3) (第42図)

図版 18 赤砂利遺跡（第7地点）



調査区全景



第7号住居跡



第1号住居跡炉



第25号土坑



第26·27号土坑



第26号土坑遺物出土狀況



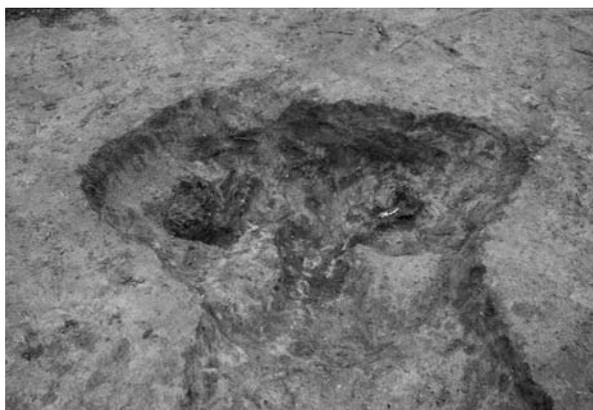
第29号土坑



第31·33号土坑



第34号土坑



第35号土坑



第7号住居跡出土遺物 (第45図)



土坑出土遺物 (3) (第48図)



銭差紐 (第48図20)



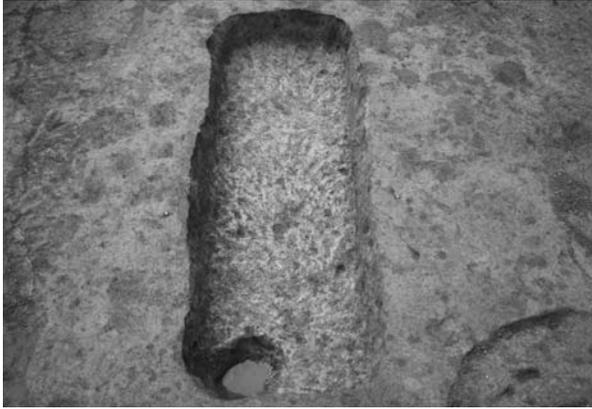
調査区出土遺物 (2) (第49・50図)



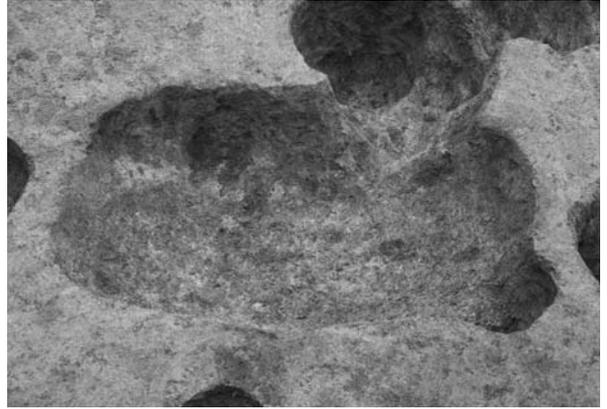
調査区北半部全景



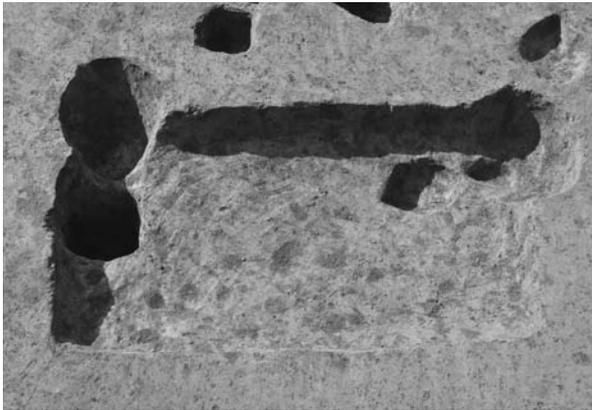
調査区南半部全景



第36号土坑



第38号土坑



第41号土坑



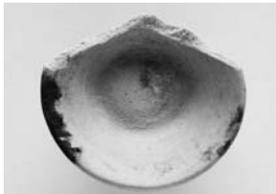
第43号土坑



第10号溝跡



第1号井戸跡



土坑出土遺物 (4) (第62図1)



グリッド出土遺物 (4) (第62図2~11・第63図)



調査区北区全景



調査区南区全景



第8号住居跡

図版24



第8号住居跡出土遺物 (1) (第67図)



調査区出土遺物 (3) (第69図)



第8号住居跡出土遺物 (2) (第68図)



調査区出土遺物 (4) (第70図)

報告書抄録

ナナカマドイセキ（ダイイチチテン）・アカツチャリイセキ（ダイゴ・ナナ・ジュウ・ジュウイチチテン）								
書名	七カマド遺跡（第1地点）・赤砂利遺跡（第5・7・10・11地点）							
副書名	市内遺跡群発掘調査報告書XXIV							
シリーズ名	白岡市埋蔵文化財調査報告書第26集							
編著者名	杉山 和徳 奥野 麦生							
編集機関	白岡市教育委員会							
所在地	〒349-0292 埼玉県白岡市千駄野432 TEL 0480-92-1111							
発行年月日	2017（平成29）年3月31日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
ナナ 七カマド遺跡	シラオカ 白岡1470-1他	11445	025	36° 01′ 12″	139° 39′ 55″	20101129 ～ 20101215	500	研究施設
アカツチャリイセキ 赤砂利遺跡	第5地点 カミノダ 上野田164-1、166-1 の一部 第7地点 カミノダ 上野田170-1の一部 第10地点 シモノダ 下野田938-1 第11地点 カミノダ 上野田164-11の一部、 164-13の一部	11445	056	36° 00′ 53″	139° 41′ 32″	第5地点 20100525 ～ 20100624 第7地点 20110214 ～ 20110221 第10地点 20140701 ～ 20140730 第11地点 20160808 ～ 20160819	第5地点 500 第7地点 36 第10地点 458.87 第11地点 76.67	第5地点 個人住宅 第7地点 寺院 第10地点 個人住宅 第11地点 個人住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
七カマド遺跡	集落	中・近世	土坑7基 溝跡1条	縄文土器・陶器・石器・ 鉄滓		幅4mを超える中・近 世の溝跡が検出され た。		
赤砂利遺跡	集落	縄文時代中期 中・近世	住居跡8軒 掘立柱建物跡7棟 土坑45基 溝跡10条 井戸跡1基	縄文土器・陶器・磁器・ 土製品・石器・鉄滓・銭 貨		直径7mを超える大型 の縄文時代中期後半 (加曽利E式期)の住 居跡が検出された。		
<p>遺跡の概要</p> <p>七カマド遺跡では中・近世の溝跡が検出された。</p> <p>赤砂利遺跡では縄文時代中期後半の住居跡が検出されるとともに、中・近世の掘立柱建物跡や柵列を形成する柱穴が数多く検出された。</p>								

白岡市埋蔵文化財調査報告書第26集

七カマド遺跡（第1地点）
赤砂利遺跡（第5・7・10・11地点）

市内遺跡群発掘調査報告書XXIV

平成29年3月24日 印刷

平成29年3月31日 発行

発行 白岡市教育委員会

印刷 朝日印刷工業株式会社